国道９号線バイパス建設予定地内

埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅵ

（夫敷遺跡）

平成元年３月

建設省松江国道工事事務所
島根県教育委員会

序

建設省松江国道工事事務所においては，松江地区の一般国道９号の交通混雑を緩和して円滑な交通を確保し地域社会の発展に資するため，松江バイパスを建設しています。

道路整備に際しては，埋蔵文化財の保護にも充分留意しつつ関係機関と協議しながら計画していますが，避けることの出来ない文化財については道路事業者の負担によって必要な調査を実施し，記録保存を行っています。当バイパスにおいても，道路予定地内にある埋蔵文化財について島根県教育委員会と協議し，その協力のもとに昭和50年度以降現在まで約３億円の費用を投じ発掘調査を実施してきております。

本報告書は，昭和62年度に実施した夫敷遺跡調査の結果をとりまとめたものであります。本書が郷土の埋蔵文化財に関する貴重な資料として学術ならびに教育のため広く活用されることを期待すると共に，道路事業が埋蔵文化財の保護にも充分留意しつつ進められることへの御理解を頂きたいと思うものであります。最後に，今回の発掘調査及び本書の編集にあたり，御指導御協力頂いた島根県教育委員会の各位に対し深甚なる謝意を表するものであります。

平成元年３月

建設省中国地方建設局

松江国道工事事務所長　土　嶋　知　己

序

島根県教育委員会では建設省中国地方建設局の委託を受けて，昭和62年度一般国道９号線松江バイパス建築予定地内の夫敷遺跡の発掘調査を実施しました。

松江バイパスの調査は，昭和50年から昭和57年度にかけて現在使用されている二車線の道路部分の調査を行い，61年度からは車線拡張に伴う調査を実施しております。62年度の調査区は昭和55年度の隣接地にあたり，弥生時代以降の新旧２面の水田跡と古墳時代の旧河道跡を検出致しました。水田跡は島根県下でも調査例が少なく，当地方の弥生時代における稲作の実態を知る上で貴重な資料と考えております。本報告が，広く埋蔵文化財に対する理解と関心を高めることに多少なりとも役立てば幸いです。

なお，調査にあたり御協力頂きました建設省松江国道工事事務所をはじめ，関係者各位に厚く御礼申し上げます。

平成元年３月

島根県教育委員会

教育長　松　井　邦　友

例　　言

1．本書は，建設省中国地方建設局の委託を受けて，島根県教育委員会が昭和62年度に実施した一般国道９号線松江バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査の報告である。

2．62年度は，夫敷遺跡の調査を実施し，発掘地は次のとおりである。

夫敷遺跡 ―― 島根県八束郡東出雲町出雲郷字額ノ免1524－２他

3．調査組織は次のとおりである。

調査指導者　山本　清（島根県文化財保護審議会委員），池田満雄（同），田中義昭（島根大学法文学部教授），林　正久（同教育学部助教授），藤原宏志（宮崎大学農学部教授）

協　力　者　三辻利一（奈良教育大学教授），平尾良光（東京国立文化財研究所保存科学部化学研究室長），置田雅昭（天理大学付属天理参考館学芸員），竹谷俊夫（同），田中清美（大阪市文化財協会），京嶋　覚（同）

事　務　局　熊谷正弘（文化課課長），安達富次（文化課課長補佐），勝部　昭（同），矢内高太郎（文化係長），吾郷朋之（文化課主事），陶山　彰（島根県教育文化財団嘱託）

調　査　員　川原和人（埋蔵文化財第２係長），西尾克己（文化課主事），板垣　旭（講師兼主事），広江耕史（島根県教育文化財団文化財主事），桑原真治（同嘱託）

遺物整理　吉冨恭子，佐治　恵，高角恭子，坂本玲子，梅津幸子，橋本修治

4．本書の執筆，編集は，調査員が集団討議してこれを行い，文責は目次に表記した。

5．本書に掲載した地形図は，建設省国土地理院発行のものを使用した。

6．本遺跡出土遺物及び実測図，写真は島根県教育委員会で保管している。

目　　次

Ⅰ．位置と環境 …… （板　垣）　1

Ⅱ．調査に至る経緯 …… （広　江）　3

Ⅲ．調査の経過 …… （桑　原）　3

Ⅳ．遺跡の概要

第Ⅰ調査区 …… （板　垣）　4

第Ⅱ調査区 …… （板　垣）　4

第Ⅲ調査区 …… （板　垣）　4

第Ⅳ調査区 …… （板　垣）　4

第Ⅴ調査区 …… （広　江）　5

第Ⅵ調査区 …… （桑　原）　15

Ⅴ．む　す　び …… （板垣，広江，桑原）　46

I　位置と環境

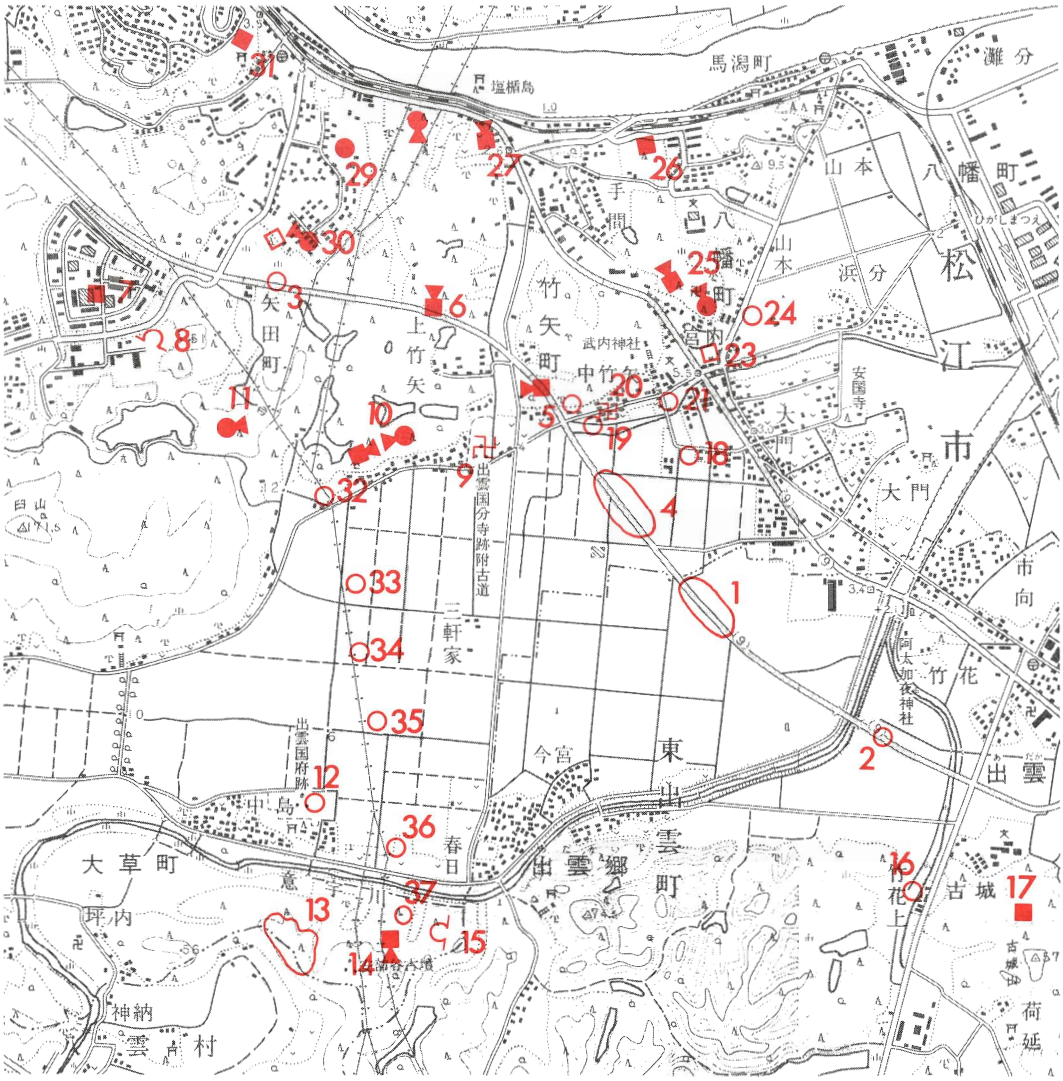
今回調査を実施した夫敷遺跡は意宇平野の中央やや東寄りに位置している。意宇平野は意宇川が形成する沖積平野で，今日でも出雲地方において有数な穀倉地帯として知られている。夫敷遺跡が知られるようになったのは，『出雲国風土記』による出雲国府跡及び意宇郡郡家跡をこの地としたことに始まるが，戦後数々の調査が進むにつれ再検討がなされ，出雲国庁の所在地は夫敷遺跡の西方約1.5㎞に位置する現在の松江市大草町六所神社付近であろうとする考えが出され，調査により確認されている。

周辺の縄文時代の遺跡は意宇平野の縁辺や馬橋川下流域付近の低湿地に点在しており，竹ノ花遺跡，竹矢小学校校庭遺跡，法華寺前遺跡，才塚遺跡，さっぺい遺跡などが知られる。

弥生時代の遺跡は意宇平野の中央部に分布の広がりをみせ，縄文遺跡と複合するもののほか，布田遺跡，宮内遺跡，三軒屋遺跡などが知られる。中でも布田遺跡は島根県下ではまれな低地性集落であり，貴重な資料を提供してくれる遺跡である。また上小紋・向小紋遺跡や夫敷遺跡の前回の調査により水田跡の検出がなされており，さらに現在の武内神社に所蔵されている伝竹矢出土細形銅剣は意宇平野内から発見されたものといわれ，水田技術や青銅器文化を受け入れた弥生集落の存在を思いおこさせる。

弥生時代後半頃から的場土壙墓や四隅突出型の来美墳丘墓，さらには古墳時代前期に入って中竹矢遺跡の土壙墓の出現の後，この地域に多数の古墳が営まれ始める。古墳時代中期以降茶臼山北麓から大橋川水系沿いの丘陵地にかけて著名な大形古墳が築造される。手間古墳（前方後円墳，全長約70m）・井ノ奥4号墳（前方後円墳，全長約57.5m）・石屋古墳（方墳；一辺40m）・竹矢岩船古墳（前方後方墳，全長50m）などがそれである。また茶臼山西麓には県下最大級の山代二子塚古墳（前方後方墳，全長92m）・山代方墳（一辺45m）・永久宅後古墳（別名山代円墳，規模不明）大庭鶏塚（方墳；一辺約42m）等が築造される。八重垣神社，神魂神社付近から大草の丘陵にかけても，岡田山一号墳（前方後方墳，全長約22m）・岩屋後古墳（墳形不明）・古天神古墳（前方後方墳，全長約27m）などが営まれる一方，西百塚，東百塚古墳群や後谷・荒神谷古墳群といった一大群集墳が築かれている。それに伴い小谷横穴群，安倍谷横穴群といった横穴墓が多数形成される。

律令時代に入るとこの平野の一角には国庁が設置され，政治上重要な地位を占めることになる。国庁だけでなく，意宇郡家，意宇軍団，駅，山代郷正倉等の公的施設の設置が『出雲国風土記』に記されており，出雲国の中心としての位置を築いていくのである。まさにこの地は古代出雲を語る上で，欠くことのできない遺跡密集地帯であるといえよう。



第１図　夫敷遺跡と周辺の遺跡

1．夫敷遺跡　2．春日遺跡　3．平所遺跡　4．布田遺跡　5．中竹矢遺跡・中竹矢１号墳
6．才ノ峠遺跡・才ノ峠１号墳　7．来美墳丘墓　8．十王免横穴群　9．出雲国分寺跡
10．上竹矢古墳群　11．廻田古墳　12．出雲国庁跡　13．百塚山古墳群　14．古天神古墳
15．安部谷横穴群　16．竹ノ花遺跡　17．古城山古墳　18．宮内遺跡　19．出雲国分寺瓦窯跡
20．出雲国分尼寺跡　21．平浜八幡宮前遺跡　22．代官家後横穴群　23．的場土壙墓横穴群
24．さっぺい遺跡　25．迎接寺古墳群　26．灘山古墳　27．竹矢岩船古墳　28．手間古墳
29．井ノ奥古墳群　30．井ノ奥４号墳　31．石屋古墳　32．間内遺跡　33．上小紋遺跡
34．四配田遺跡　35．神田遺跡　36．大屋敷遺跡　37．天満谷遺跡

Ⅱ　調査に至る経緯

今回の夫敷遺跡の調査は，昭和55～56年に行った漸定道路部分の残り4車線の本道工部分についてである。

国道9号線松江東バイパスは，6車線が計画されており，昭和57年に行われた島根県国体主要関連道路として供用するために，55・56年の2ケ年にわたって計7遺跡（春日遺跡，夫敷遺跡，布田遺跡，中竹矢遺跡，才ノ峠遺跡，勝負遺跡，石台遺跡）の調査を行った。

その後，60年度に建設省から国道9号線松江東バイパスの残り4車線の本道工部分の調査依頼があり，協議の結果，61年度に春日遺跡から調査を行った。

62年度は，本道工部分の調査に入り2ケ年目であり，東バイパスのルート内を東側の東出雲町より松江に向かって順次行うことになり，夫敷遺跡に着手することとなった。

Ⅲ　調　査　の　経　過

62年度調査を実施した夫敷遺跡は，前回の調査結果等を考慮して調査区を設定した。第Ⅰ～Ⅳ調査区は前回遺構が存在しなかった部分に隣接する地帯で，10×10mのグリッドを任意に4ケ所設定したものである。調査は5月6日より重機による耕作土除去から開始した。4区とも遺構は検出できず，6月5日に終了した。第Ⅴ調査区は前回水田跡が検出された隣接地を中心に，約30×90mの範囲で，7月7日より重機による耕作土除去から調査に入ったが，第Ⅵ調査区の耕作土除去が終了した8月3日からは一時中断し，第Ⅵ調査区を先に調査することになった。当初遺物が点在する程度と予想していたが，9月3日，古墳時代中期の遺物包含層が確認され，多量の遺物が出土し，さらに前期の遺物包含層が確認された。これらは当時の旧河道跡と考えられ，湧水が激しく，調査は難行し，終了したのは10月7日であった。引き続き第Ⅴ調査区の調査を再開し，北側より精査を繰返し，10月21日，溝状遺構（SD－01，02，03）を3本検出した。そして同月27日に上層の水田跡検出のため再度掘り下げた。下層の水田面は厚い砂層が堆積しており，サブトレンチによりこの砂層上面を追い，順次全面をこのレベルまで掘り下げて畦畔を検出する方法を採った。その結果，雨，雪等の悪条件にもかかわらず畦畔を損傷することなく，ほぼ完全な状態で水田跡を検出できた。写真撮影，畦畔実測等が終了したのは12月22日で，翌日にプラントオパール分析のための土壌サンプリングを行い，この日をもって全日程を終了した。

Ⅳ　遺　跡　の　概　要

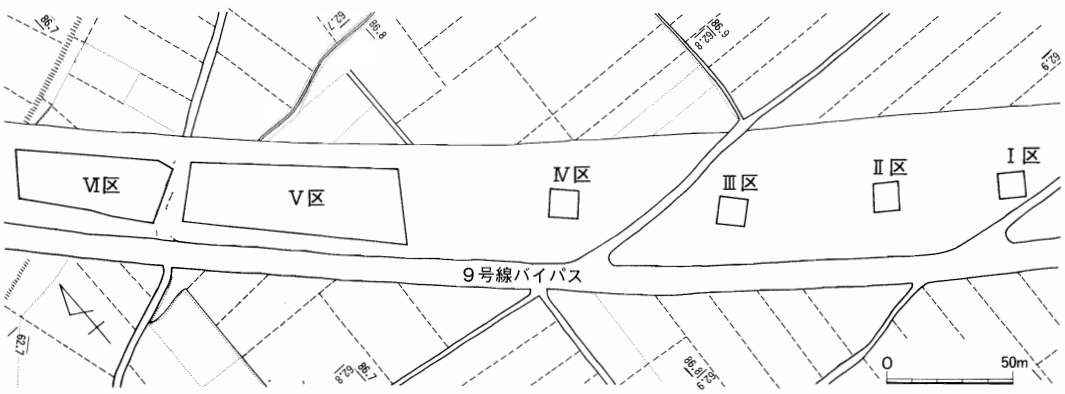
今回の調査では，調査区を９号線バイパスに沿って約200ｍの範囲内に４ケ所設置した。さらに便宜上，東側の調査区からⅠ～Ⅳ区と呼ぶことにした。Ⅰ～Ⅳ区とも東西10m，南北10ｍの調査区として調査を実施した結果，遺構を検出するには至らなかった。遺物は旧耕作土を中心に少量ではあるが出土している。しかしこれらのほとんどは細片磨滅しており，後世の流れ込みによるものと考えられる。大半の出土遺物は須恵器片，土師器片であるが，黒耀石片，土錘といったものも出土しており，古いものでは弥生時代から見られ，古墳時代後期，奈良時代，中世にまたがっている。この中でも奈良時代のものが量的には多いようである。

第Ⅰ調査区　設置した調査区の最も東側に位置している。調査区内の土層の堆積状況は基本的に灰褐色粘質土の下に青灰色の粘土が堆積しており，さらに黒色粘土が堆積していた。出土遺物は須恵器片・土師器片・土錘１点，黒耀石片１点，陶磁器片，土師質土器片などである。

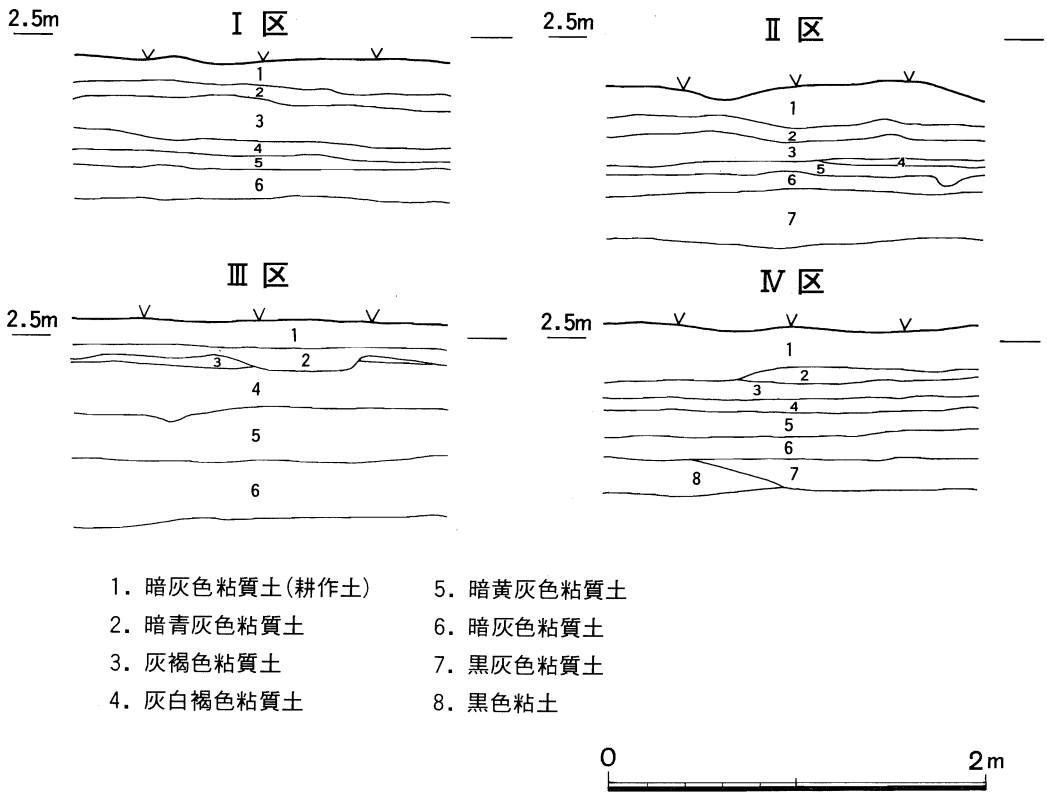
第Ⅱ調査区　第Ⅰ調査区の西隣に位置している。調査区内の土層堆積状況は基本的に灰褐色粘質土下に青灰色粘土が堆積しており，さらに黒色粘土が堆積していた。遺物は須恵器片が出土したが，原形に復し得るものはない。他に土錘２点，土師器片，陶磁器片がわずかに出土している。

第Ⅲ調査区　Ⅰ，Ⅱ区のさらに西隣に位置する。調査区内の土層堆積状況は基本的に灰褐色粘質土下に青灰色粘土が堆積しており，さらに黒色粘土が堆積していた。遺物は須恵器片と土錘が１点出土した。須恵器は蓋２個と坏と考えられるもの１個である。

第Ⅳ調査区　４ケ所の調査区では一番西側に位置する。調査区内の土層堆積状況は灰褐色粘質土下に青灰色粘土が堆積しており，さらに黒色粘土と暗灰色粘土が相互に堆積していた。遺物は須恵器片が多いが，原形に復し得るものはない。他に陶磁器片，土錘が１点出土している。

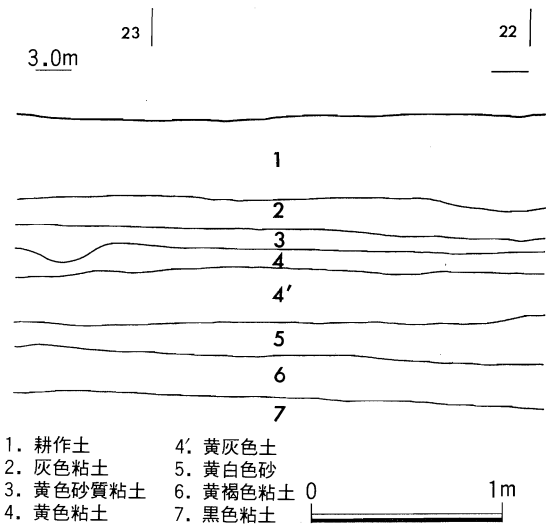


第２図　夫敷遺跡調査区配置図



第3図　第Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ調査区東壁土層図

第Ⅴ調査区　本調査区は，前回の調査で水田跡を検出した部分の北東側にあたる。第Ⅰ～Ⅳ調査区に比べ標高が0.5m高くなっており，表土の高さ2.8mを測る。Ⅴ区から平野の南側を流れる意宇川に向けて緩く傾斜しており徐々に低くなっている。遺構として上下2面の水田跡を検出し，昭和55年度調査時のものに続くと思われる。土層の堆積状況は，基本的には第Ⅰ調査区～第Ⅳ調査区と同様であるが，第Ⅴ調査区においては，第3層黄色砂質粘土，第5層黄白色砂と上下2層に砂層がみられる。



第4図　第Ⅴ調査区土層図

上層水田跡（第６図）　上層の水田跡は，第４層の黄色粘質土を基盤層としており，その上を黄色砂質土が覆っている。畦は，南北方向に幅1.0mの大畦と，それに続くように幅0.3mの畦が東西方向に向けて位置している。１区画の大きさは，短辺３ｍ～６ｍ，長辺６ｍ～14mとやや大形の区画である。大畦は，前回の調査でも検出されており，調査区を隔てて同様の畦が続いている。畦は，水田の基盤層に比べやや暗灰色の斑状の土が多く見られることで区別がつく程度である。畦の確認のため上面がかなり削られており，断面は不明である。水田面は，全体的に北から南へ向け緩やかに傾斜している。調査区北側で東西方向の溝を３本検出している。SD－01，02は，最近の水路の跡でこの２本の溝の間が農道となっていた。SD－03からは，弥生土器，須恵器（第11図）が出土しているが，水田跡に直接伴うものかは断定し得なかった。

下層水田跡（第７図）　下層の水田跡は，第６層の黄褐色粘質土を基盤層とし，その上に厚さ0.1mの黄白色砂が覆っており，この砂を丹念に取り除くことによって畦の高まりを検出した。砂の堆積は，南側へ行くに従って薄くなっており，南端の大畦を境として砂の堆積はみられなくなっている。畦は東西方向のものが良く残っており，南端の大畦は幅1.5mを測る。その他の畦は，幅0.3mの畦で断面の頂部に丸味を持っている。水田一枚の規模は，８×15mと長方形のプランと呈しており，合計で15区画を検出している。南北長は，同規模となっている。この水田を覆っている黄白色砂中より弥生土器が出土している。

出土遺物（第９図）　５区出土の遺物には，上層より須恵器，土師器，土師質土器，陶器がみられるが，図示したものは下層水田跡出土の弥生土器である。

弥生土器（第９図，第11図　１）

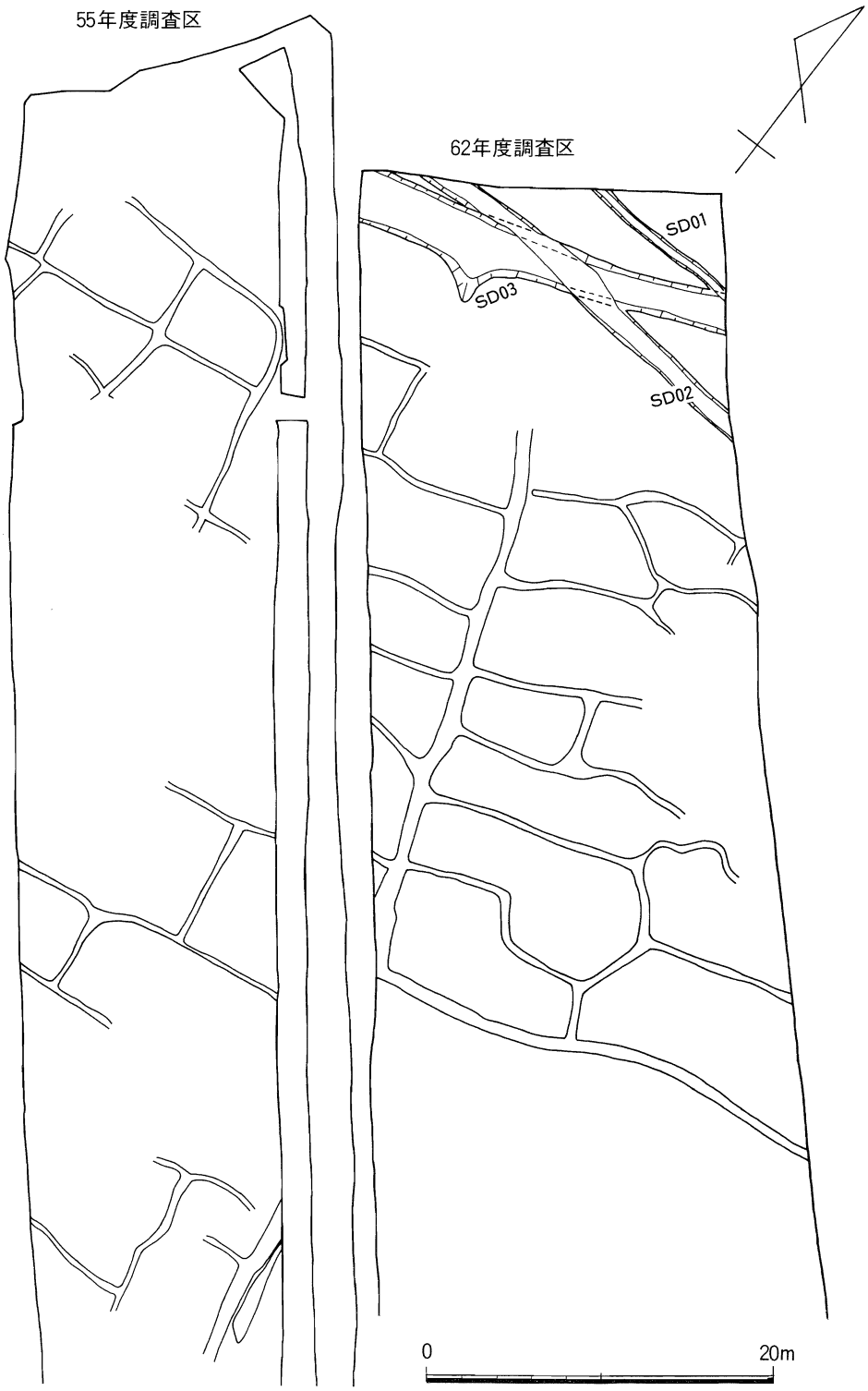
壷形土器（第９図　１～３）

いずれも，口縁部はわずかに外反する程度で，端部はほとんど発達しない。文様をもたないもの（第９図３）もあるが，口縁端部や頚部に沈線をめぐらすものも存在する。

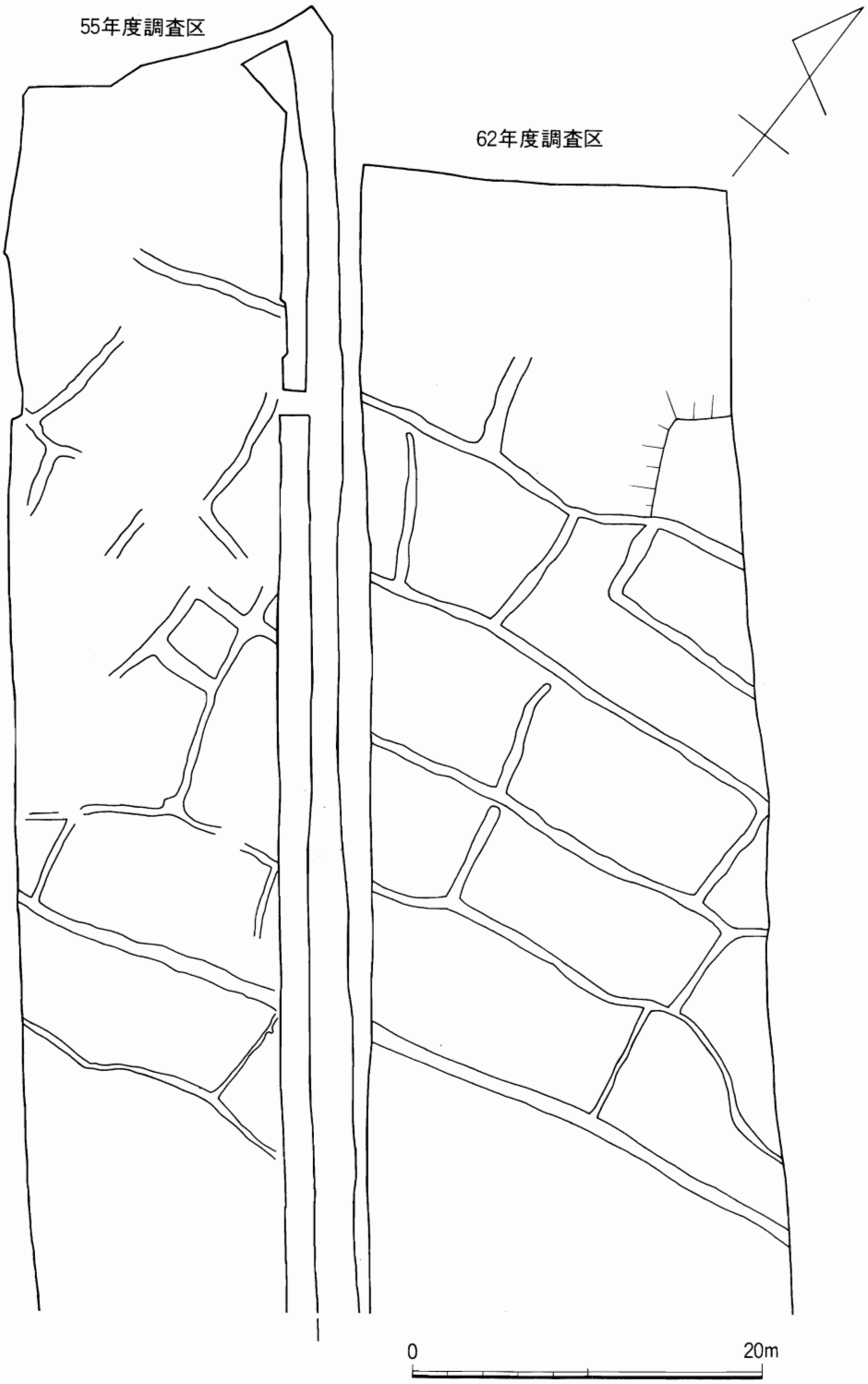
甕形土器（第９図　４～13）

いずれも，口縁端部は肥厚，拡張する。４～８は口縁端部が内傾して２～４条の沈線を巡らしたのちにナデ調整をくわえる。７，８は外面肩部～胴部最大径にハケメ原体による連続刺突文をめぐらす。調整は，口縁部はヨコナデ，胴部外面はタテ方向のハケメを施す。７のようにハケメののちヘラミガキをくわえるものもある。胴部内面は，４，６を除いて頚部以下にヘラケズリが認められる。

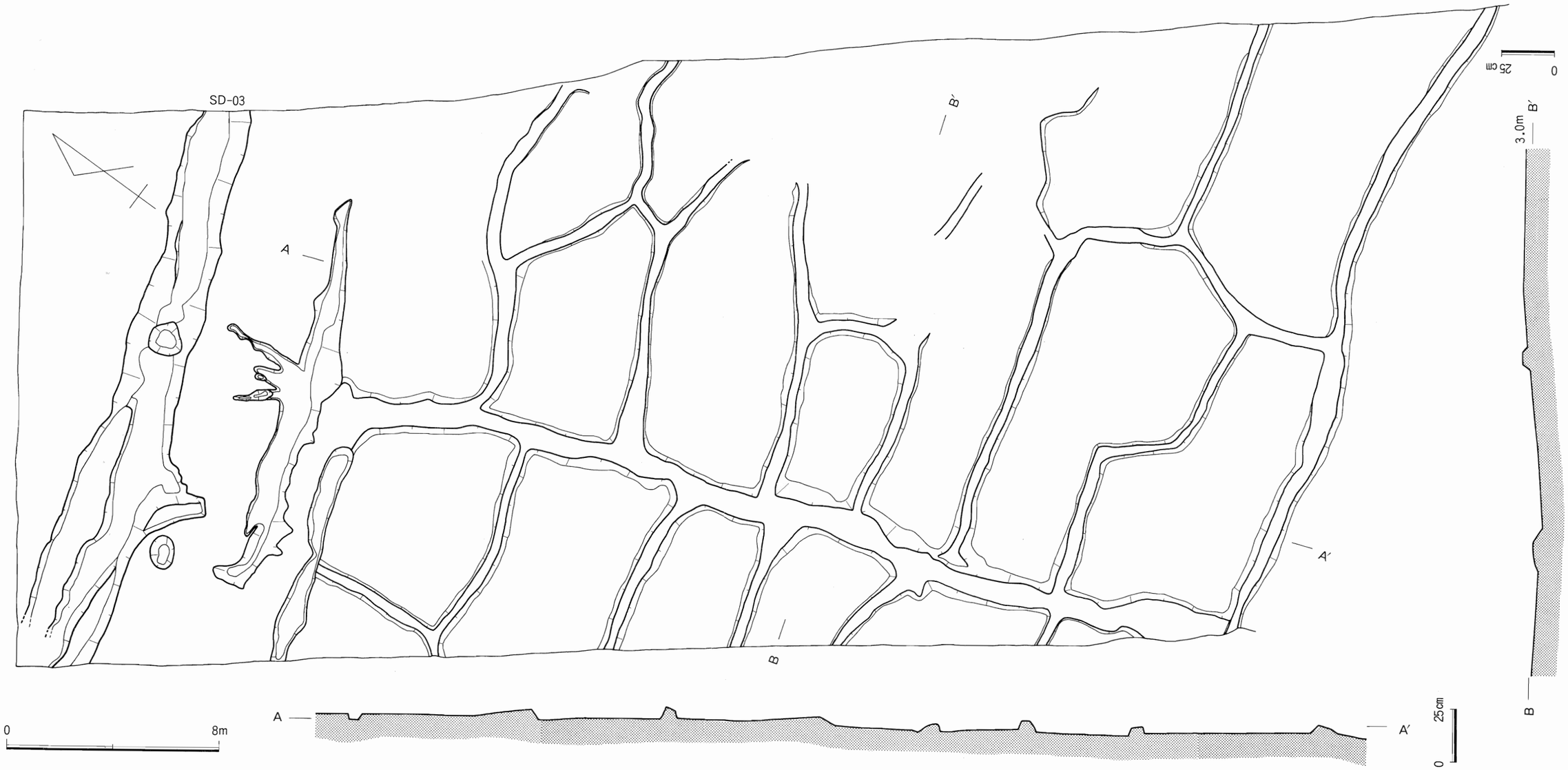
９～13は，口縁端部の施文は前述の一群と同様であるが，形態的には，上方への拡張が大きくなり，直立する。11は頚部にヘラ状工具による刺突文，13は肩部にクシ状工具による刺突文が施される。調整については，外面がタテ方向のハケのちナデ，内面は10，11，12の頚部にヘラミガキが施



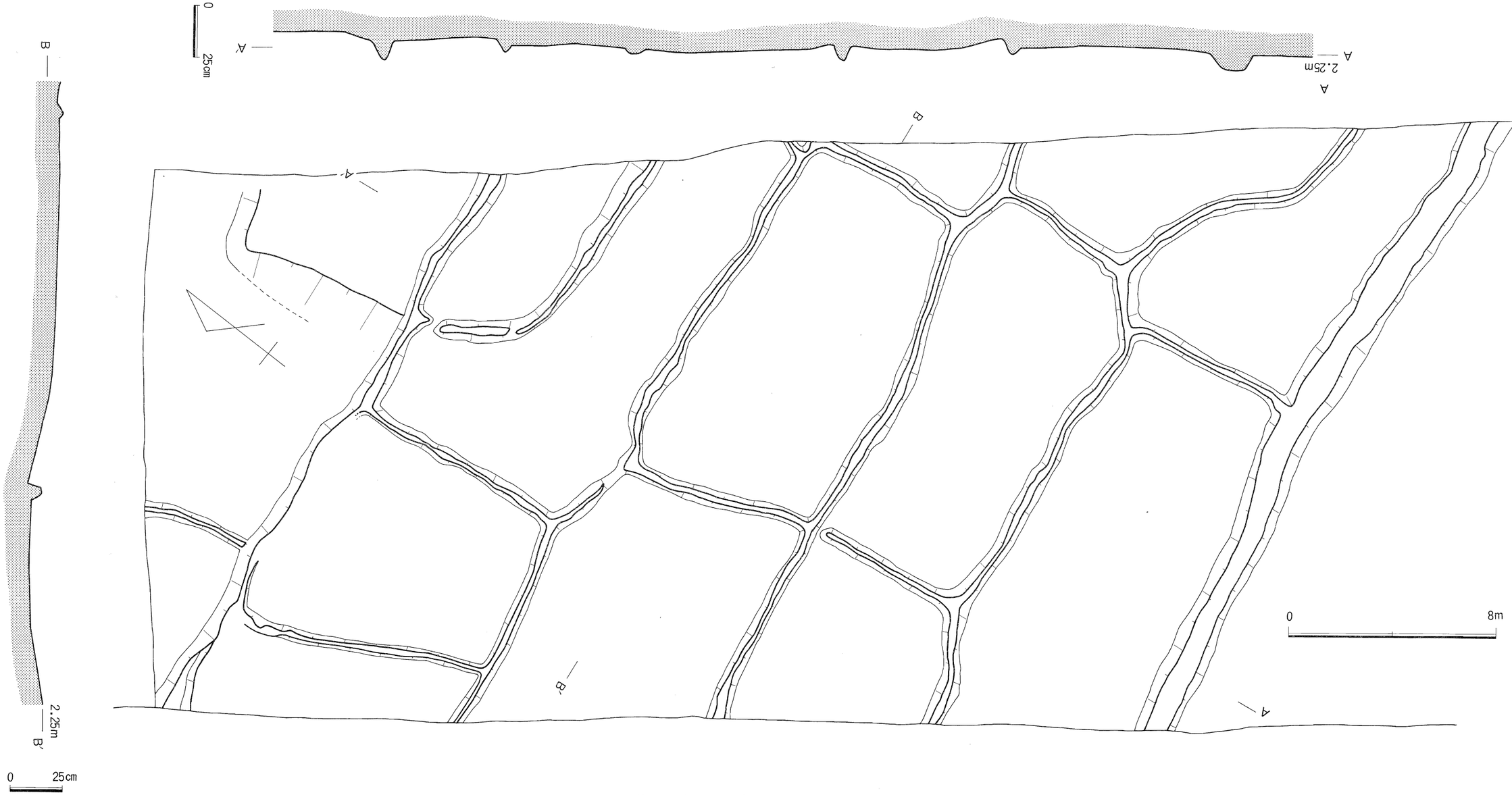
第５図　第Ⅴ調査区上層水田跡実測図



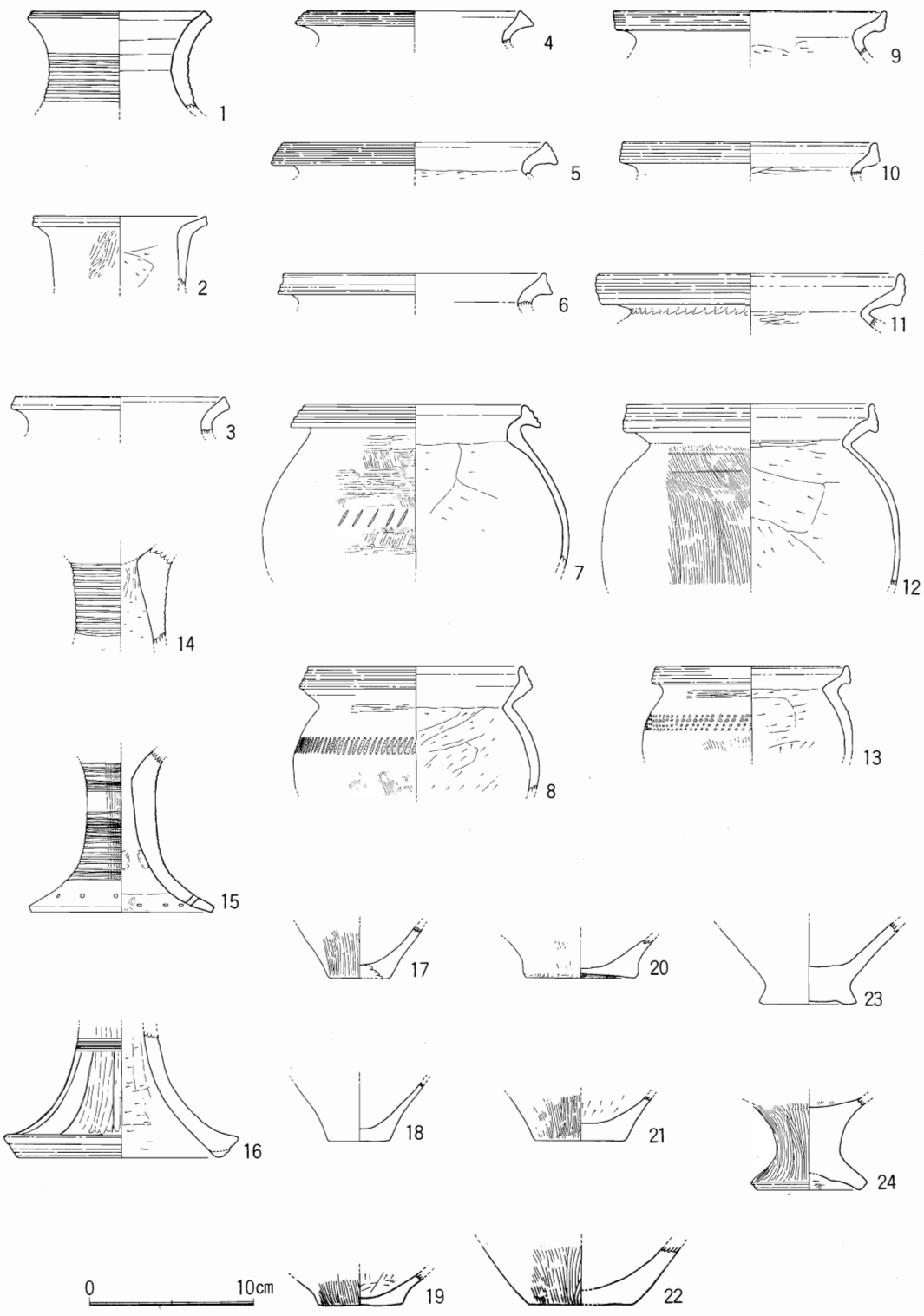
第６図　第Ⅴ調査区下層水田跡実測図



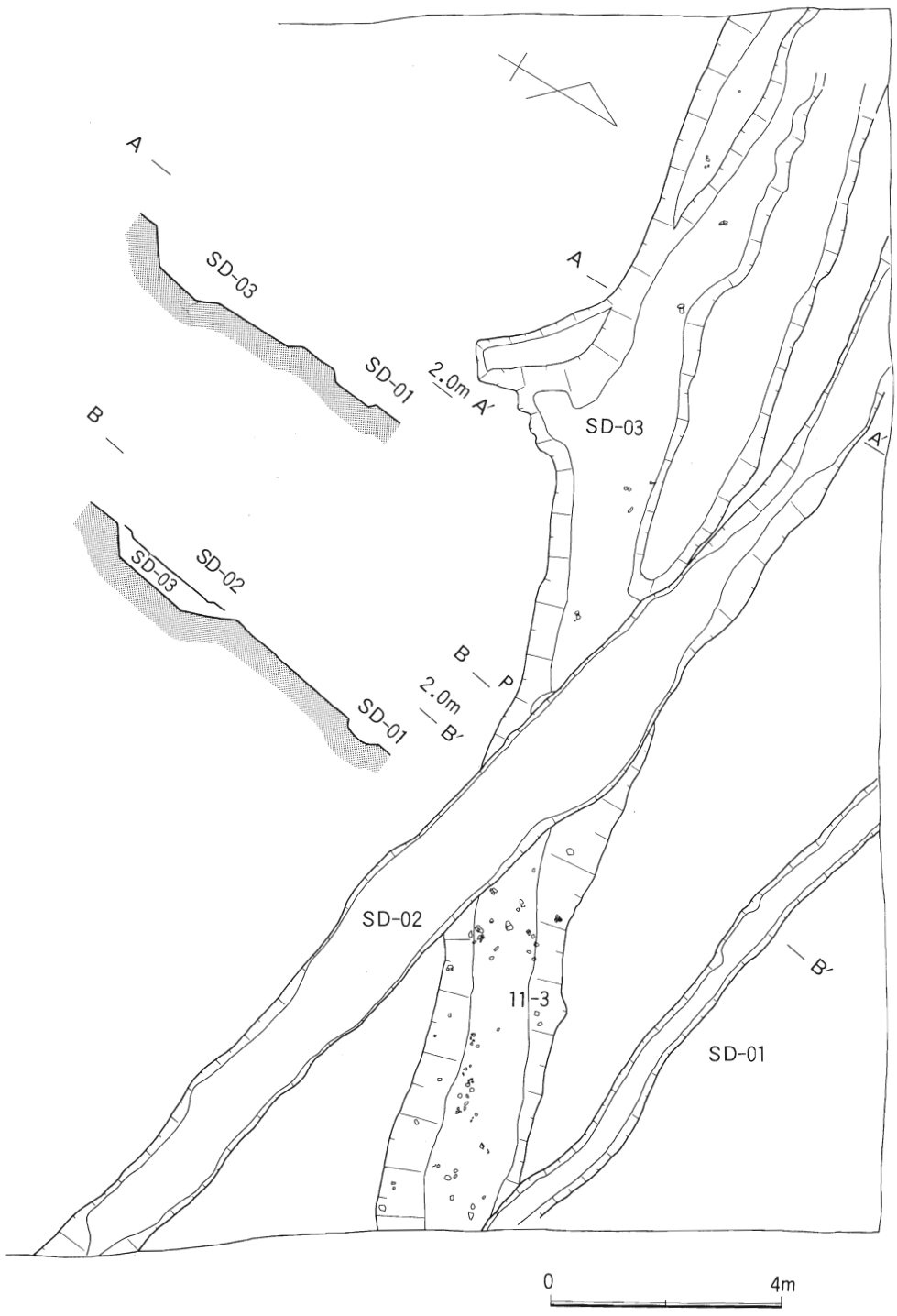
第７図　第Ⅴ調査区上層水田跡実測図



第８図　第Ⅴ調査区下層水田跡実測図



第９図　第Ⅴ調査区出土遺物実測図



第10図　第Ⅴ調査区溝全体図

される他は，ヘラケズリで調整する。

高坏形土器（第９図　14～16）

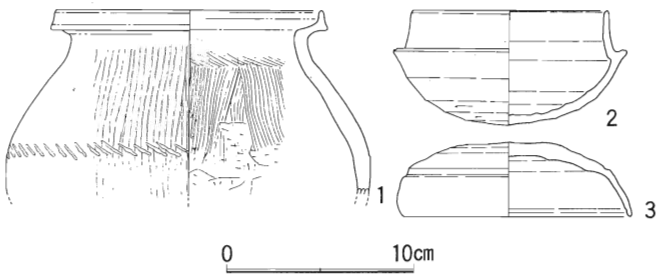
14～16は高坏形土器脚部の破片である。14，15は多条の沈線が施され，内面は14がヘラケズリ，15は指頭のナデとハケメで調整される。15は脚端部に穿孔がある。16は鋭利な工具により，透し状の切り込みが施されるが，貫通はしない。内面はヘラケズリ調整される。

底　部（第９図　17～24）

18が外面ナデ，内面ケズリのちナデ，23が磨滅して調整不明の他は，外面タテ方向のハケ（のちナデ）内面ヘラケズリ（のちナデ）を施す。20はやや上げ底気味の形態をとり，23・24は高台状を呈する。

SD－03出土遺物（第11図）

第11図－１は，口縁端部が上方へ拡張するものであるが，端部に文様は施されず，内面のヘラケズリも頚部まで達しない。２は，坏身で，山本編年Ⅰ期，３は蓋で山本編年のⅢ期に含まれると思われる。



第11図　第Ⅴ調査区 SD-03 出土遺物実測図

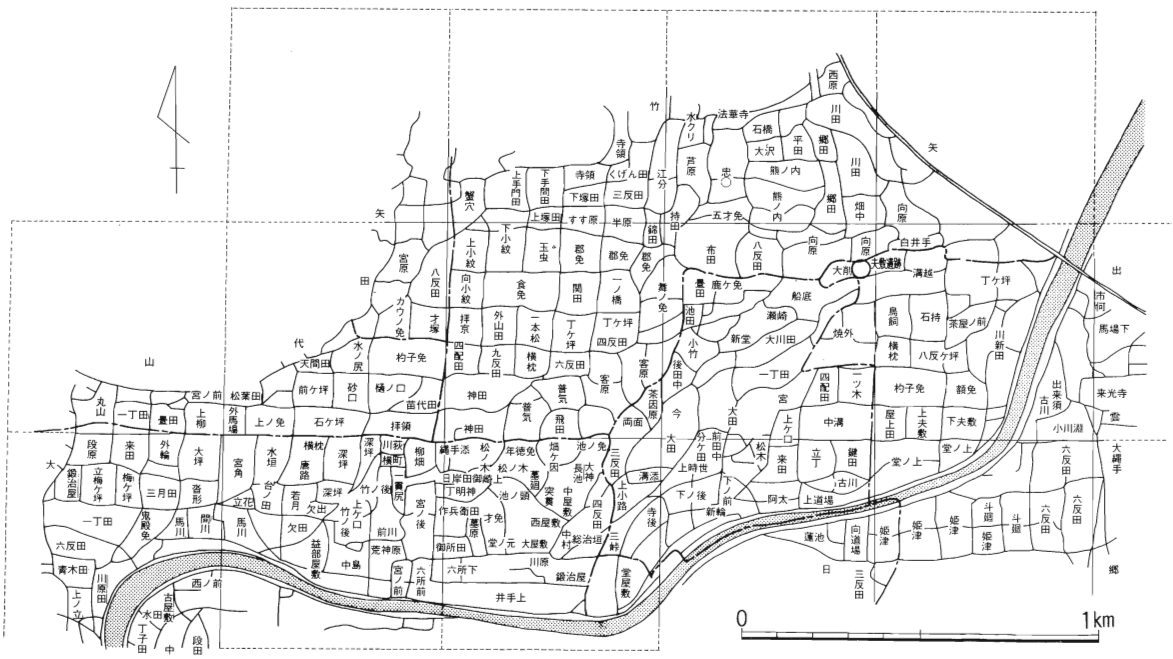
第Ⅵ調査区　この調査区は第Ⅴ調査区の北西に位置し，20×60mの範囲を対象とした。その結果，調査区中央付近より北西側が古墳時代の旧河道であったことが判明し，当時の河川による浸食・堆積作用により形成された，大別して３層の遺物包含層から多量の遺物を検出した。土層は砂層あるいは砂礫層が主層で，傾斜して堆積しており，その状況から，西から東へ流れる河川が北から南に向かって浸食していく様子が窺えた。そして最も新しい層は黒褐色の泥灰状の粘土が凹レンズ状に堆積したもの（第13図７層）で，河川が最終的に流路を変え（あるいは変えられ），沼地化したものと考えられる。この一帯が旧河道であることは，字名（第12図）にも反映されているようで，「船底」「大削」「溝越」などが残り，また現地表面が調査区北側では周囲に比して低く，小河川が存在する。これらの事実より，今回検出した旧河道は古墳時代以降流路を南側に変えた可能性が強いと思われる。以下では上述した３層の遺物含有層を上層，中層，下層と大別，仮称して説明することにする。

上層は砂層と粒の小さな砂礫層とから成り，土師器の甕，甑や，須恵器の高坏などの完形品，あるいはそれに近い状態の土器が少量かつ単独で出土した。これらは原位置を保つものでなく，河川により流され埋没したものと考えられる。前回の調査で遺物が出土した層に対応するものと考えられるが，土層が整然としていないため必ずしも同一層であるとは言えないであろう。中層は最も多

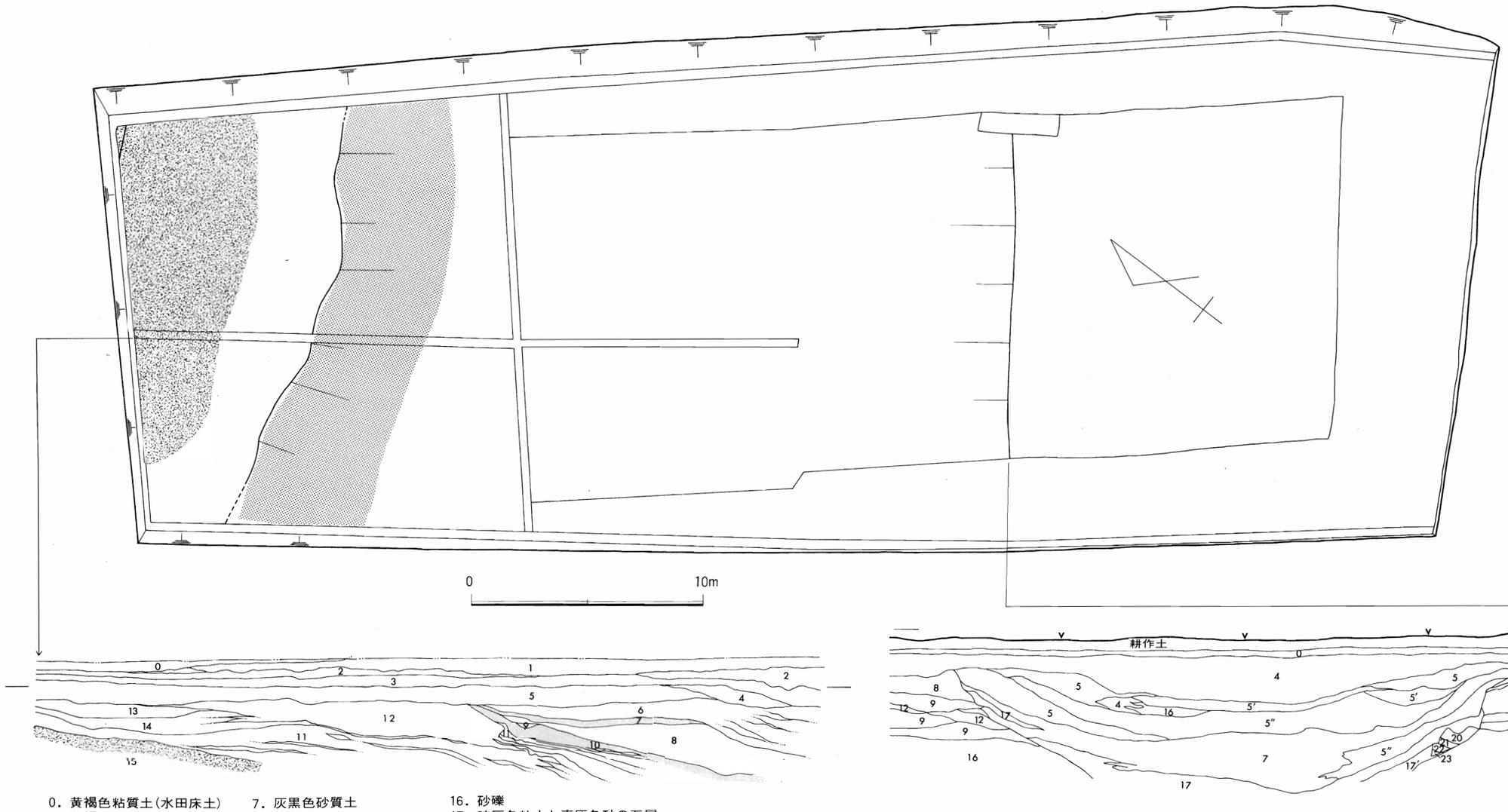
量に遺物が出土しており，上下の２層（第13図の南壁土層図には存在しない）に分層できる。いずれも急傾斜をなして堆積する砂層で，炭化物や有機物を多量に含んでいた。下位層は上位層によってカットされており，また両層から出土した土器に接合可能なものが多いことなどから，遺物を包含した下位層が堆積した後，この層を部分的に浸食して堆積したものが上位層であると考えられる。このことは下位層が良好に残る北側に完成品が多く，ほとんど上位層となる南側に細片が多い点からも理解できるだろう。出土した土器は磨滅した弥生土器，古式土師器が数点含まれるが，他は極めて保存状態の良好な古墳時代中期の土師器で，完形品が多い点からも，想像以上に短期間，あるいは一時的に廃棄されたものと考えられる。下層も基本的に中層と同じ堆積状況が認められ，古墳時代前期の土師器が多量に出土した。出土状況も中層と似ているが，完成品が少なく，細片が多いことから，廃棄された後，中層以上に浸食を受けたと考えられる。また遺物集中帯が中層のそれよりも北側に位置していることや，土層が漸移的に堆積していることからも，河川が南へ移動している様子が窺える。

SK－01（第14図）

この土壙上部で径1.6m，底部で0.8m，深さ1.3mの不整円形のプランを呈するもので，底部から砂礫層（人為的な可能性もある），粘土，砂，有機物の互層，粘土層の順で堆積しており，この上



第12図　意宇平野地割図（『八雲立つ風土記の丘周辺の文化財』より転載）



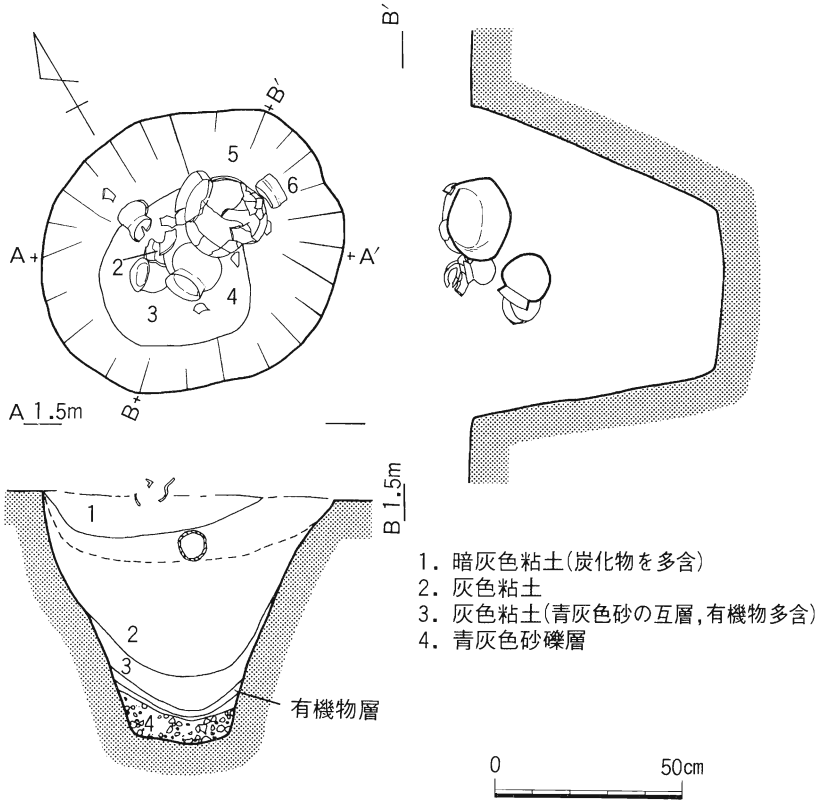
0．黄褐色粘質土(水田床土)
1．黄褐色砂礫質粘土
2．黄灰色砂
3．黄褐色砂
4．黄褐色粗砂
5．茶色砂質粘土
5′．5より砂が多い
5″．5より粘質
6．青灰色砂
7．灰黒色砂質土
8．青灰色砂礫
9．青灰色砂
10．黒褐色粘質土
11．青灰色シルト
12．青褐色と黄褐色の砂層
13．暗青灰色粘質土
14．青灰色粘土
15．暗青灰色粘質土
16．砂礫
17．暗灰色粘土と青灰色砂の互層
17′．灰白色砂
18．黄褐色砂質土
19．黄褐色砂質粘土
20．灰黒色粘土
21．黒色粘質土
22．黄色砂と青灰色砂の混土層
23．暗青灰色砂

中層遺物包含層(中期)

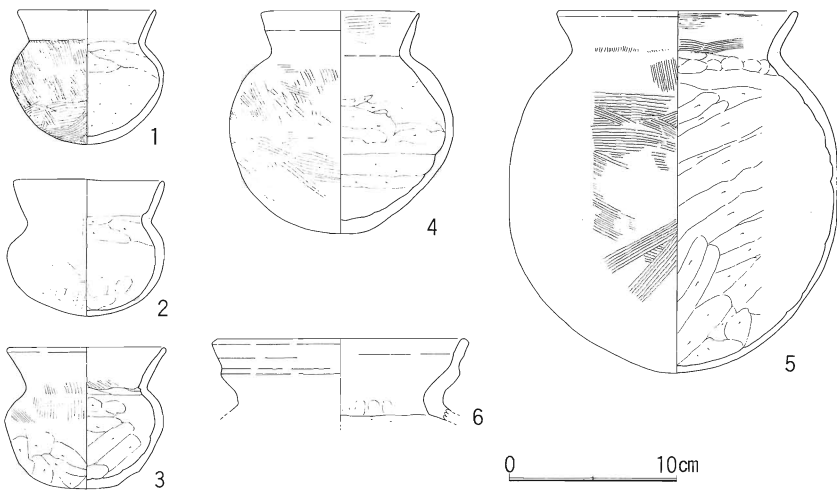
下層遺物包含層(前期)

第13図　第Ⅵ調査区全体図，土層図

から土師器の甕（第15図４～６），小形丸底壷（１～３）が出土している。１，２は口縁部が短く，体部外面はハケメを施している。３は，体部下半にヘラケズリを施しており，器壁はやや厚めのものである。４は壷で口径9.4cm，器高13.2cmを測る。５は小形の甕で口径14.4cm，器高21.5cmを測る。６は甕の口縁部であるが，この破片だけは，最上層から出土している。土器は土壙内でも上層からの出土であり，土壙の機能停止に伴いこれらの土器が入れられたものと思われる。この土壙は，中層から下層に堀り込まれており，中層のある一時期は，河川敷も安定していたようであり，中期の遺物も多く出土している。



第14図　第Ⅵ調査区 SK-01実測図



第15図　第Ⅵ調査区 SK-01出土遺物実測図

下層出土遺物　下層からは，古墳時代前期の土師器が出土している。

壷（第16図）

1は，複合合縁を呈し，頚部から肩部にかけて，刷毛目原体による羽状文が4段施されている。口径26cmを測る。2も同様に頚部に羽状文を施している。3は，口縁端部に沈線状の凹みがある。口縁部が内傾し，肩部外面に沈線により波状文・直線文が施されている。口径23.2cmを測る。9・10ともに口縁部が内傾している。11は，口縁部が直立気味に立ち上る小形の壷である。体部の器壁はうすい。6は，口縁部が外反し，端部が極めて厚く，下端部にも丸味を持っている。他のものと比べやや後出的な様素と思われる。

甕（第17，18図）

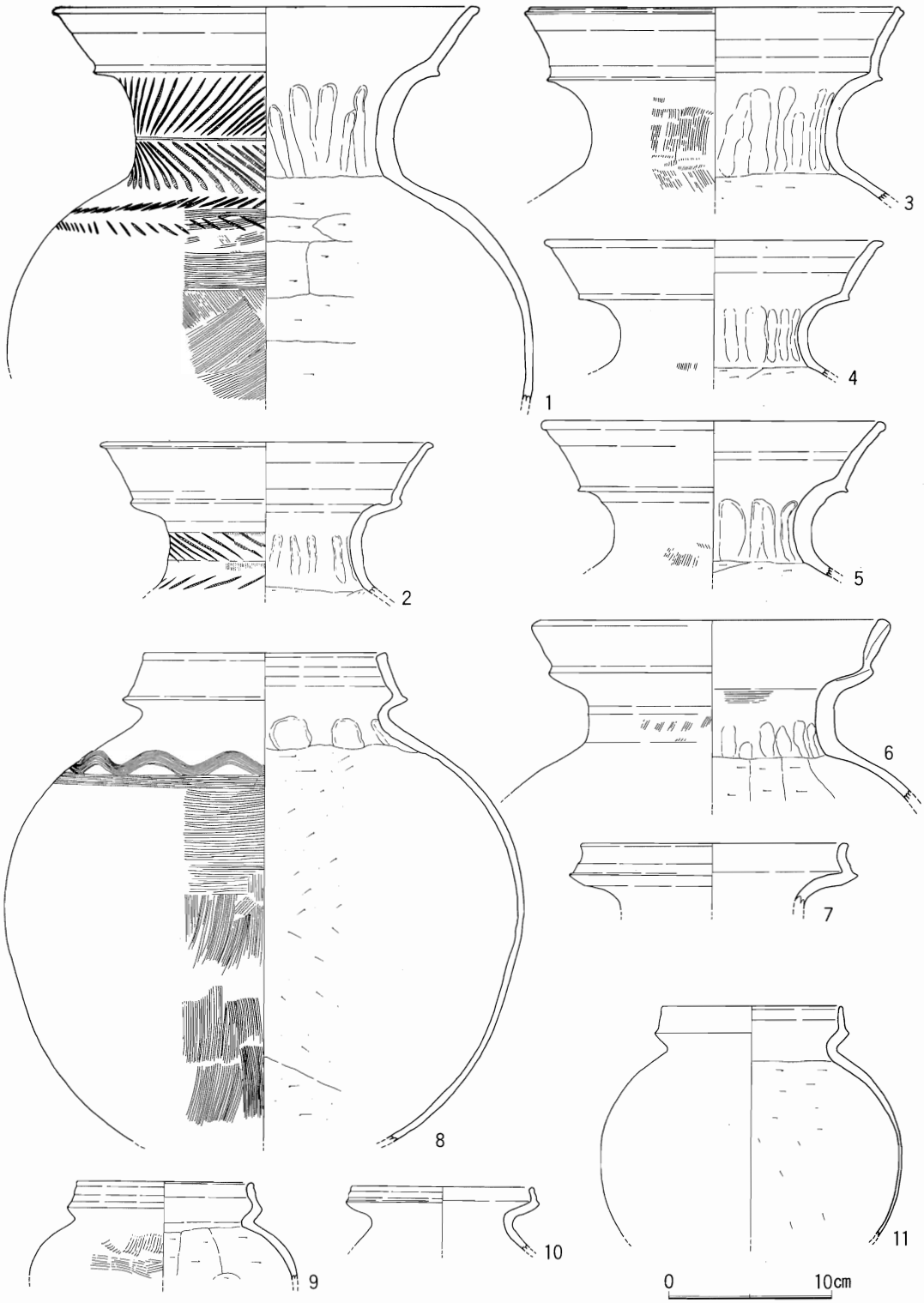
17図の方は，口径がやや小さめで，口径13.4cm～15.6cmのものである。1は，口縁部が外反しているが，他はほぼ同様に立ち上る。端部は，丸味を持つもの（1～5，10，18～20）平端面をもつもの（6～8，11，16，17）若干凹むもの（12～15）がある。6は，口縁下端部が鋭く外方へ突出している。11は，口径14.8cm，器高25.4cmを測る完成品である。7・19は肩部に波状文が施されている。3，6，8，10，14は体部上半外面のハケメが横方向に整って施されている。第18図1～11は，口径13.4cm～23.4cmを測る。1，3，10は，口縁端部に丸味を有し，6は若干凹み，他は平坦である。1，3，6，8，9は肩部外面に波状文を施している。2は，肩部に刷毛目原体により刺突を施している。口径17.2cm，器高24.6cmを測る。10，11は，口端部がやや内傾気味に立ち上る。

高　坏（第19図）

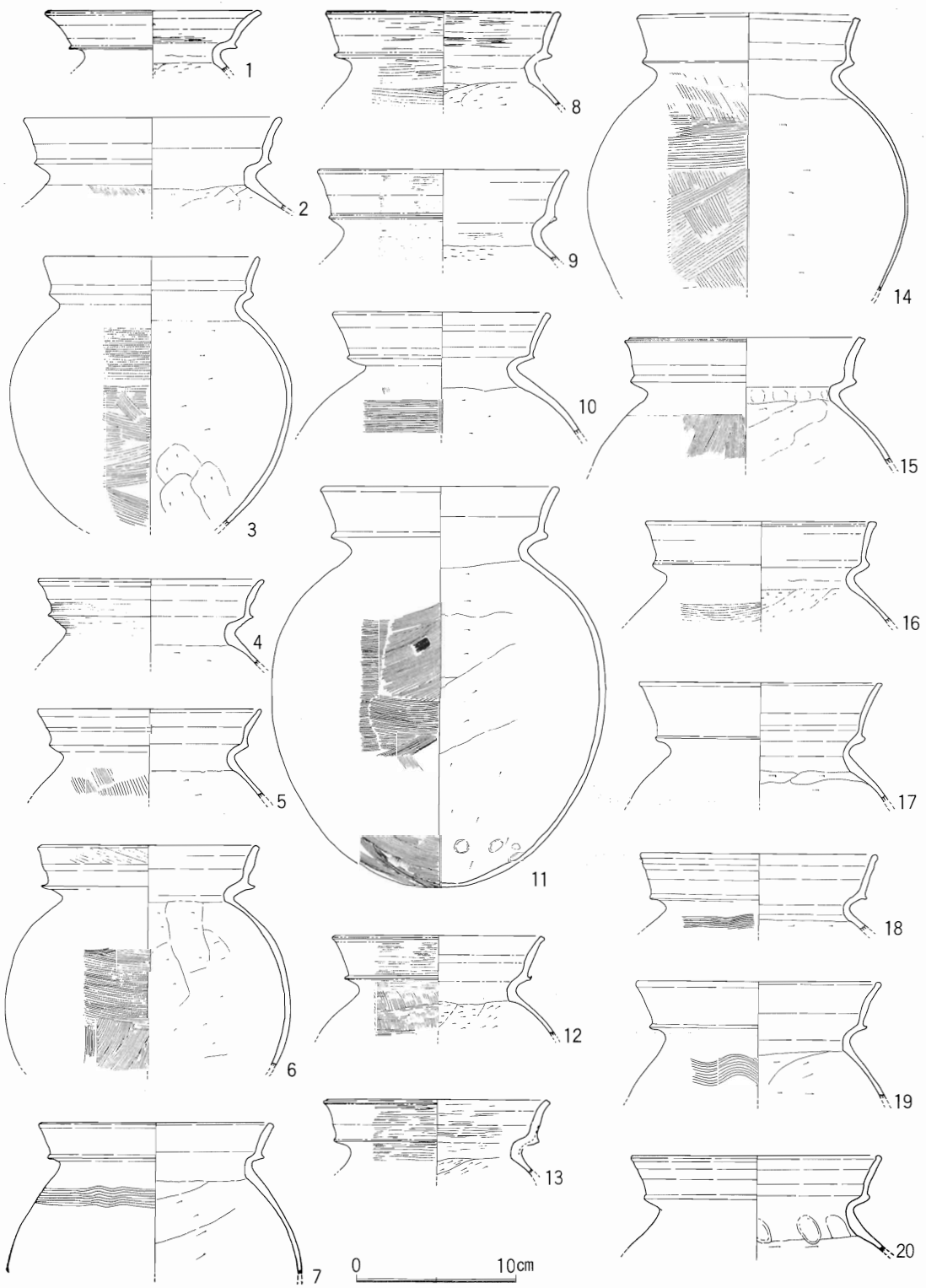
高坏は，完成品は9の21であった。1は坏部で体部に丸味を持ち，口縁部は外反気味に立ち上る。内外面ともにヘラミガキを施す。2も同じ形態であり，内面縦方向，外面横方向のヘラミガキを施している。3はやや深みのある坏部であり，内面縦方向のヘラミガキを施す。4は，外面にハケメを施した後ナデている。外底には脚部との接合部分に刺突がなされている。5は，坏部から脚部の破片で坏部の外底には，接合時に刺突がなされている。6，7，8は，小形のものであり，6は，口縁部が外反して立ち上る。内面の底部近くに縦方向へのヘラミガキが施される。8は，外面に粗い縦方向へのヘラミガキが施される。6～8は，脚部との接合時に坏部外底に刺突が施されている。9は，口径20.8cm，器高16.8cmを測る。坏部に丸味を有し，口縁端部が外反する。脚部はゆるやかに広がる。坏部の底には刺突が施されている。

器　台（第20図）

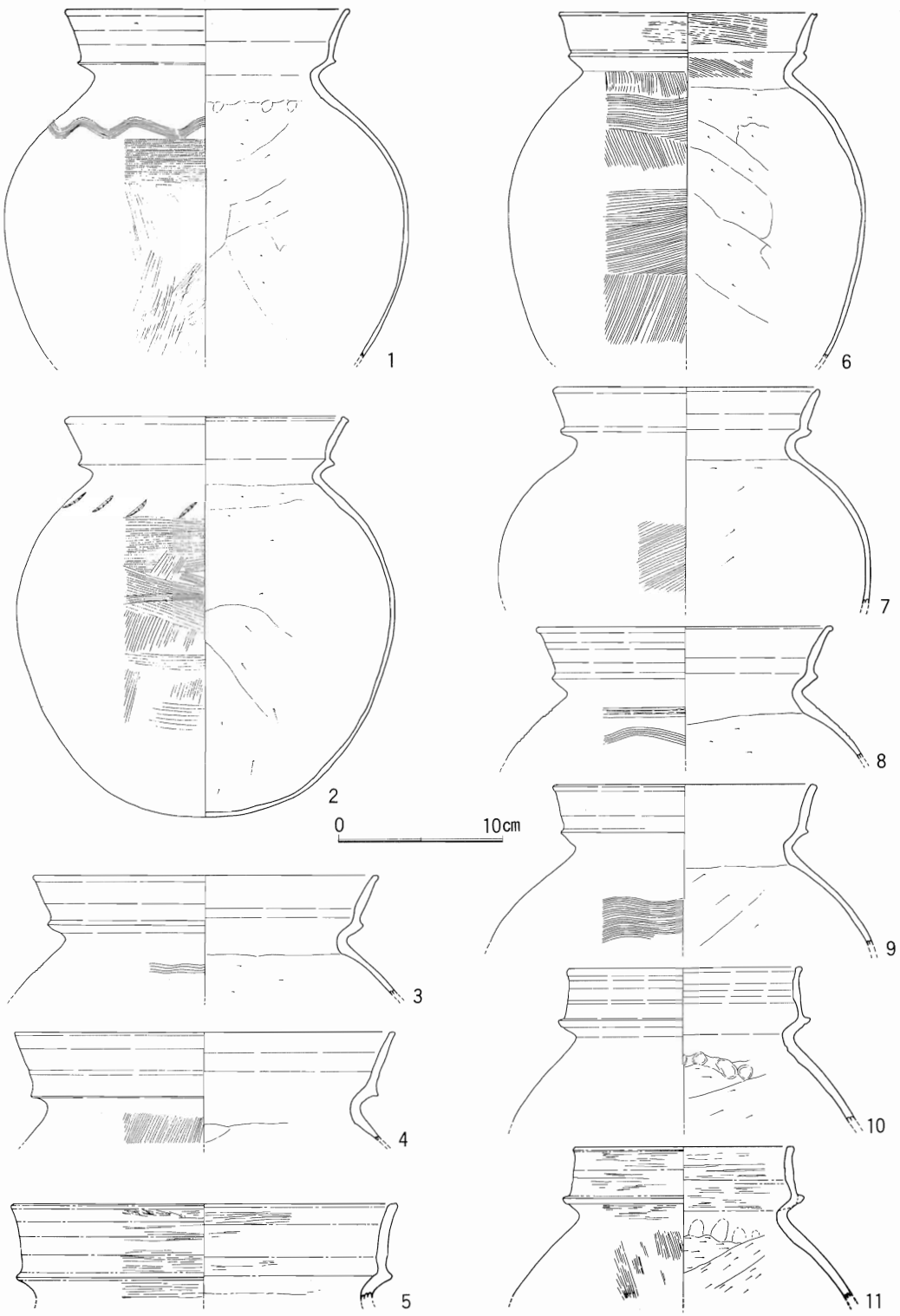
1～12は，鼓形器台である。1，2は完成品であり，1は，口径20.6cm，脚部径18cm，器高10.8cmを測る。上台部内面は，丁寧なヘラミガキ，脚台部はヘラケズリが施されている。2は，口径18cm，器高9.8cm，脚部径15.8cmを測る。上台部，脚台部の端部がやや湾曲している。上台部内面はヘ



第16図　第Ⅶ調査区下層出土遺物実測図



第17図　第Ⅵ調査区下層出土遺物実測図

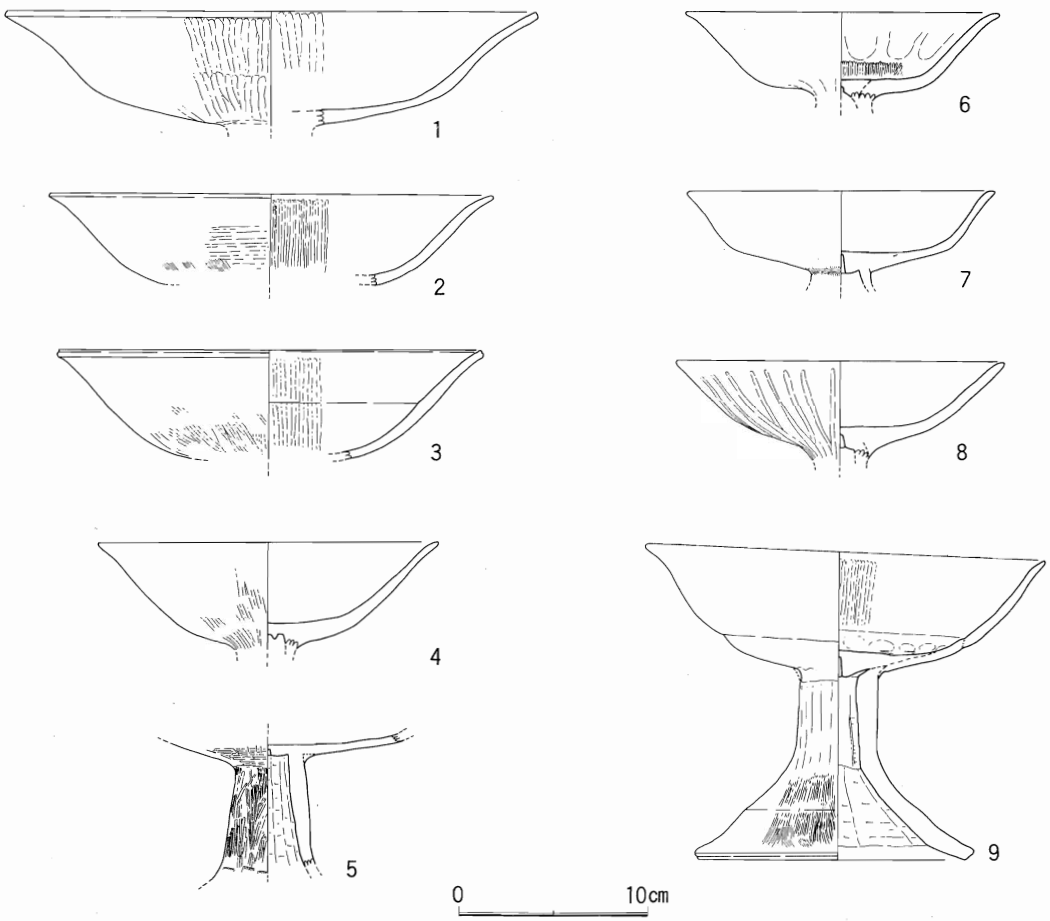


第18図　第Ⅵ調査区下層出土遺物実測図

ラケズリの後ヘラミガキ，脚台部内面はヘラケズリが施されている。３は，上台部が外反して立ち上り，下端部は下方へのびている。５は，上台部の口縁部が外反しており，内面にヘラミガキを施す。６～９は，筒部を中心とする破片である。10，11は，脚台部の破片で，10は脚径18.6cm，11は19.8cmを測る。12は，極めて大形な器台状の脚部片と思われる。

低脚坏（第21図　１～16）

低脚坏は，口径11.2cm～15.6cmと大小さまざまであり，器形も坏部の深いもの，浅いもの，脚部の高いもの，低いものとかなり器形に変化がみられる。１～５は，一般的に見られるものである。１，２は坏部に丸味を持ち直線的に立ち上る。３は，かなり内湾して立ち上るものであり，脚部も広がっている。外面はハケメの後ナデ，内面はヘラミガキを施す。４，５は坏部の浅い皿状の器形を呈しており器高も低い。７は口径11.2cmと小さく，坏部はやや深みを有す。内外面ともに細かいヘラミガキを施している。８は，坏部が直線的に開き，坏部に比べ脚部の大きなものである。９は，



第19図　第Ⅵ調査区下層出土遺物実測図

坏部が直線的に開き，脚部は低い。この低脚坏は，粘土の塊を指で延ばしたような成形と思われ，器壁には小さな気泡がみられる。10は，坏部のみの破片で，途中に稜を持っている。11は，口径15.6cm，器高8.2cm，脚部径8.8cmと極めて大形で，坏部に深みを有している。坏部の外面はハケメの後ナデ，内面ヘラミガキを施す。12も大形の坏部の破片である。13～16は脚部の破片で16は高さが3.5cmと極めて高いものである。

直口壷（第21図　17・18）

17は，口縁部が外反気味に立ち上り，体部は肩が張り出している。口縁部外面は，縦方向のハケメの後ヨコナデ，体部外面はハケメ調整を施している。18は，口縁部が直立気味に外反して立ち上り，下端部が外方へ向け突出している。

小形丸底壷（第21図　19・20）

19は，口径11.4cm，器高7.6cmを測る。口縁部は，やや内湾気味に立ち上り，体部は丸味を有す。口縁内面はハケメの後ヨコナデ，体部外面はハケメの後細かいヘラミガキを施している。20は，口縁部が複合口縁状を呈しており，口径11.8cmを測る。口縁内外面ヨコナデ，体部外面ハケメ，内面頚部以下ヘラケズリを施す。

器　台（第22図　1～4，7，8）

1～4は，脚部が直線的に開き，坏部の立ち上りの低い形態のものである。1は坏部の径8.4cm，残存高7.8cmを測り，脚部には円形の透しが3ケ所開けられている。坏部の口縁部ヨコナデ，体部内外面ヘラミガキ，脚部外面ヘラミガキを施す。2は，脚部の破片であり円形透しが3方にみられ，脚部径11.4cmを測る。7，8は，器台の上部を欠いているが，脚部が低く，裾が広がる形態のものである。これらの器台は，畿内布留系の土器と考えられる。

甕（第22図　5，6，15，16，21～25）

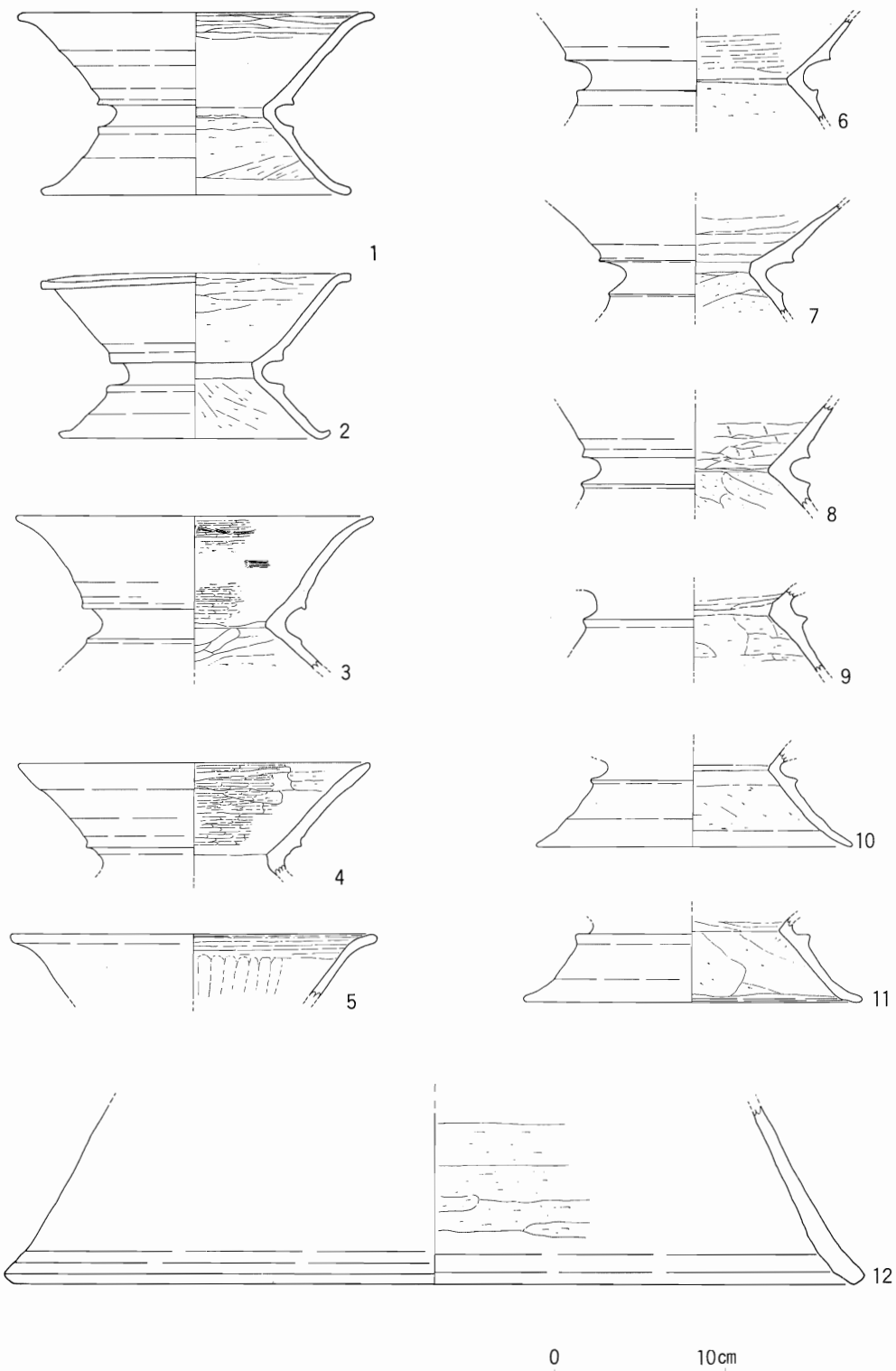
5，6は，布留系の甕であり，口縁端部の内側が肥厚している。15は口縁の外反する甕である。16は，口縁端部の器壁が厚いものである。21～25は，体部外面に叩き目を有する畿内庄内系の甕である。21～24は，タタキの後にハケメを施している。25は，口縁端部が鋭く尖っており，胎土は赤茶色を呈している。

鉢（第22図　9，10）

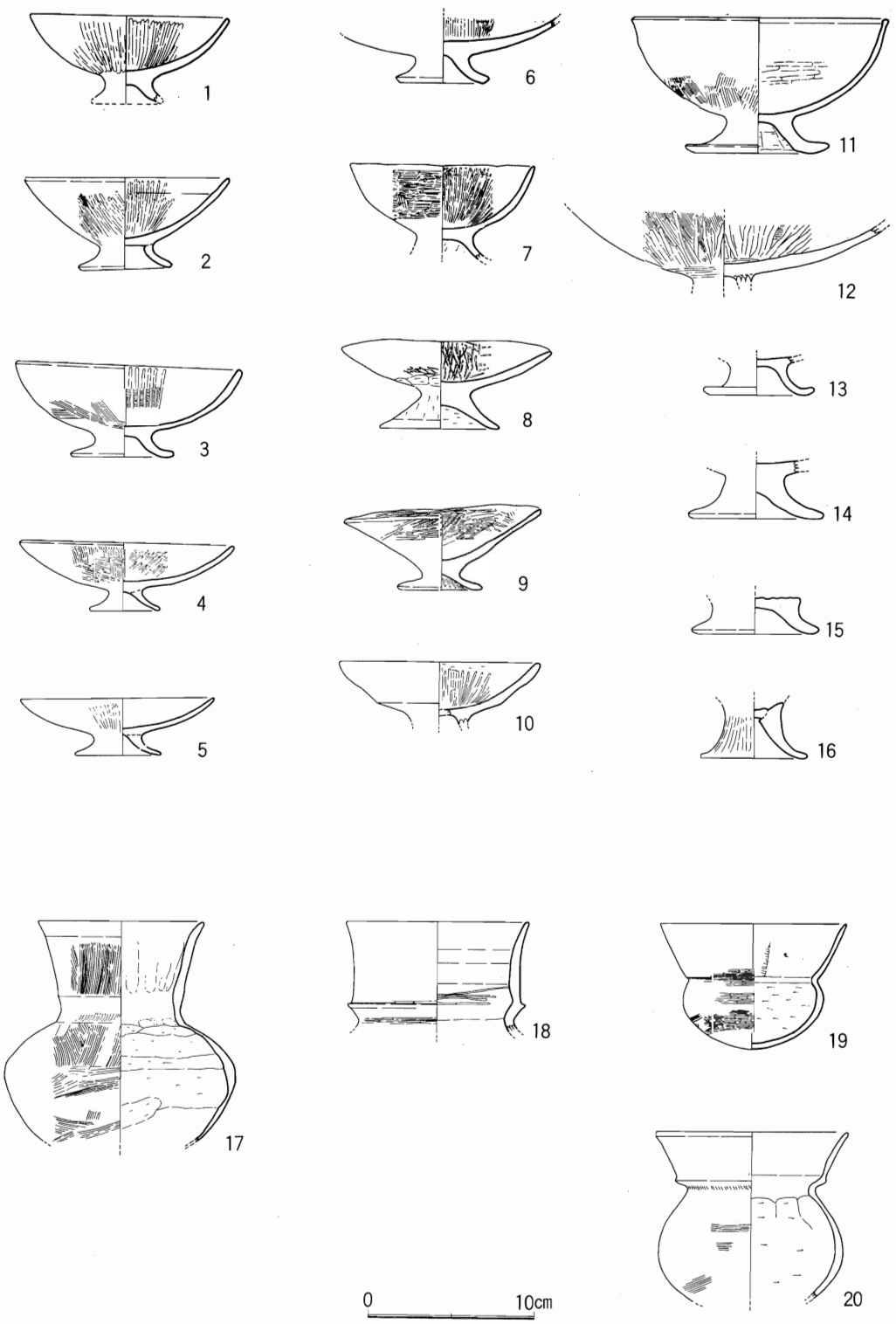
9は，布留系の鉢と思われ，口径16cm，器高5.2cmを測る。胎土中に砂粒を含まず色調が，桃白色を呈す特徴的な胎土である。10も鉢と思われ，口縁部の形態は複合口縁状を呈している。

壷（第22図12～14）

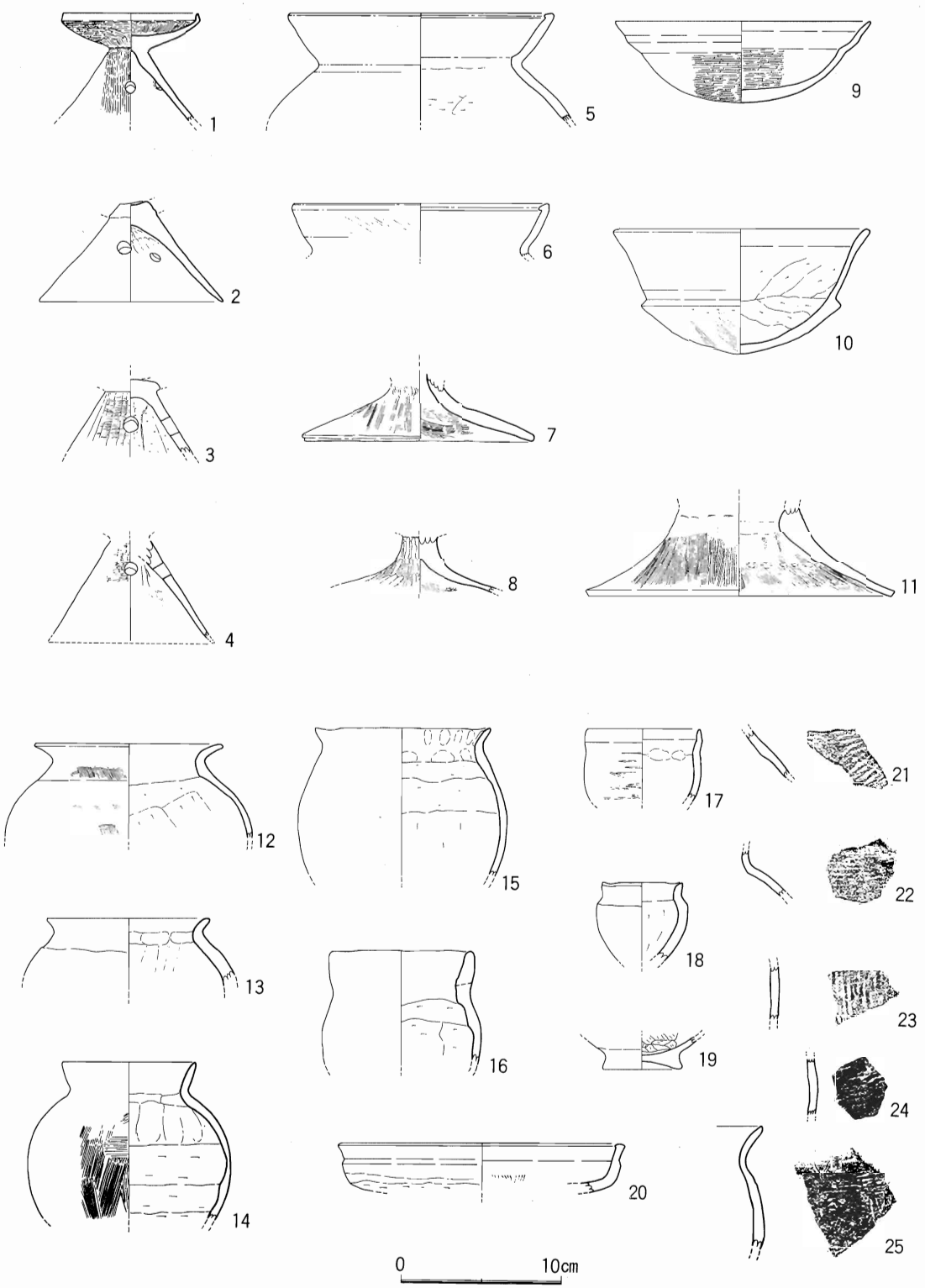
12，14はともに口縁部が外反するもので，体部外面に細かいハケメを施している。従来見られない器形である。



第20図　第Ⅵ調査区下層出土遺物実測図



第21図　第Ⅵ調査区下層出土遺物実測図



第22図　第Ⅵ調査区下層出土遺物実測図

中層出土遺物

中層からは極めて多数の土器と少量の木製品，銅鏃，クシ等が出土している。土器は須恵器を2点，少量の韓式系土器を含むが，ほとんどは土師器で，中でも高坏が非常に多く，図示できたのは半数にも満たない。

甕は二重口縁のもの（第23図）と単純口縁のもの（第24，25図）に大分できる。前者は完形品が少ないが，肩がやや張り，長胴ぎみであるのに対し，後者はほぼ球状の体部をもつ。

甕A（第23図）　二重口縁をもつもので，4は頚部が長く，壷形土器としておく。口縁の形態は，二重口縁部分が外傾，あるいは外反するものがほとんどで，直立するもの（7，9）は少ない。外面の段も明瞭なものから不明瞭なもの，痕跡だけのもの（12，13）など様々である。端部はほとんどが平坦，あるいは凹んでおり，特徴的である。他に胎土，焼成の異なるもの（15）が1点ある。

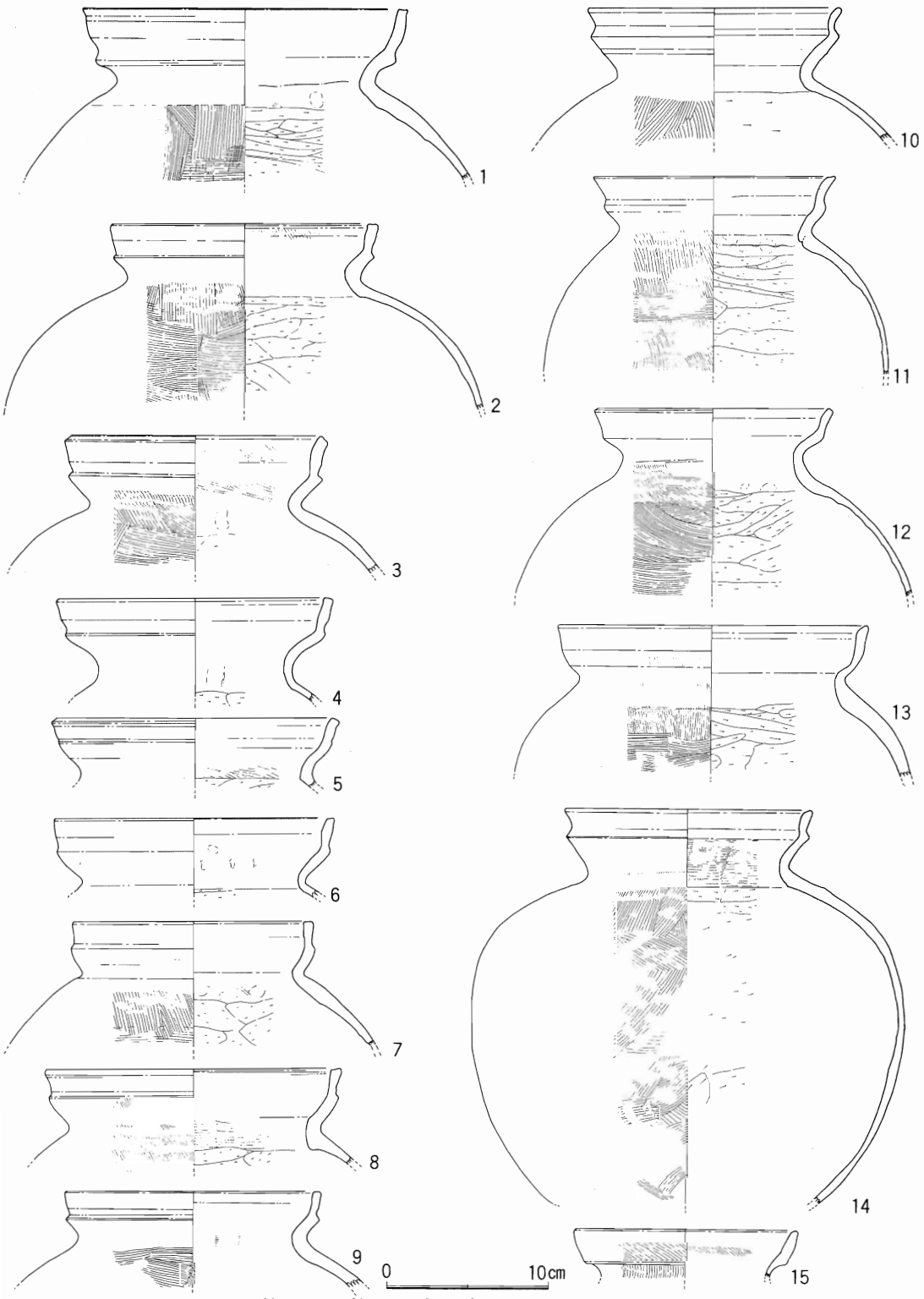
甕B（第24，25図）　単純口縁をもつもので，量的には甕Aよりかなり多く，大きさもややばらつきがある。口縁部はほとんどが逆八の字形に開くもので，直立ぎみに開くもの（24－10，14～16）は少ない。技法的には体部外面ハケメ，内面ケズリが基本であるが，雑なものから丁寧なものまで様々であり，ハケメを施さずナデのみのもの（9・10）もある。この技法の程度の差は口縁端部の調整によく表現されている。端部が平坦，あるいは凹んでいるもの，内側に肥厚するものなど，何らかのアクセントをもつものは全体に丁寧なつくりである。

高　坏（第26～29図）　高坏は数点の特殊なものを除き，成形技法から大きく2分できるが，形態的には同一の器形法量を指向している様に考えられる。

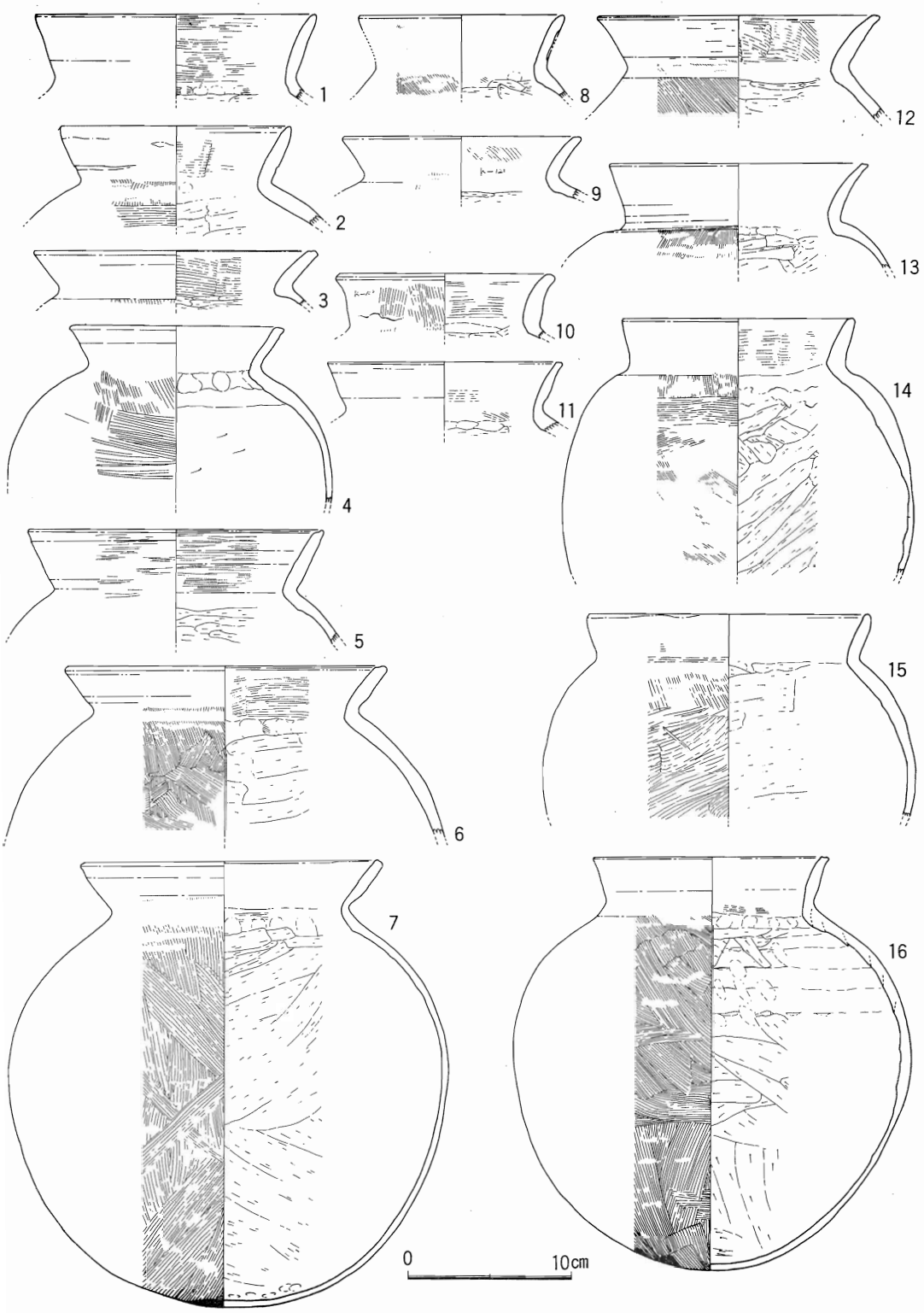
高坏A（第26図）　坏部はわん形を呈し，口縁部と坏底部との境に段はなく，口縁端部はやや内湾して立ち上る。口径は16cm～17cmのものがほとんどであり，小形品（13）はあるが，大形品はない。脚筒部はやや短く，脚部にわりとゆるやかにつながる。技法的には，坏部は6，8，9の断面の様に，粘土帯の接着面が広いという特徴がある。外面は中央に向かってハケメを施した後，口縁部を横ナデするが，口縁外面にシワ状の痕跡を残すものが多い。また内面に放射状の暗文をもつものも多い。脚は筒外面が縦方向のケズリ後ナデ，内面はシボリ目（後ケズリのものもある），指頭圧痕を残すが，下部はハケメを施すものがほとんどである。端部は回転ケズリ後ヨコナデのものが多い。また脚内面中央に5㎜位の刺突痕をもつ。

高坏B（第27図，第28図　1～18）

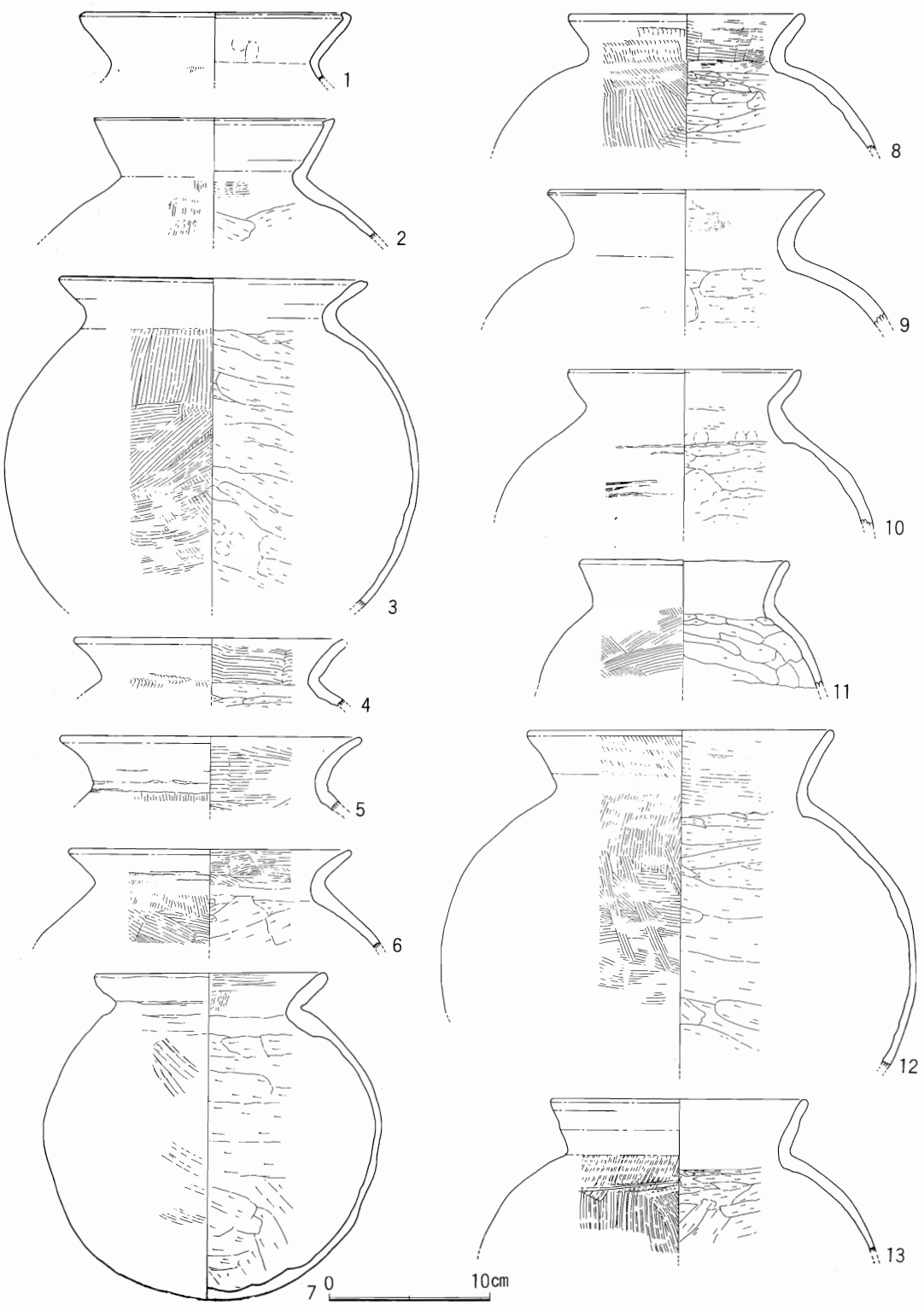
大形品（27－1～5）も存在するが基本的には同様な形態，技法をもつ。坏部は底部が丸底状を呈すもの（27－8～11，28－1，2，4，7）と底部が平坦なものとがあるが，両者とも口縁先端を外反させ，外面に段をもつ点で高坏Aと異なる。脚筒部はやや長く，大きく開く脚部との境がはっきりしている。技法的には，坏部は底部と口縁部とに分かれ，その接合部は底部側に，指頭圧痕や刺突



第23図　第Ⅵ調査区中層出土遺物実測図



第24図　第Ⅵ調査区中層出土遺物実測図



第25図　第Ⅵ調査区中層出土遺物実測図

痕を残す。また口縁外面に指頭圧痕を残すものが多く，内面，あるいは両面に暗文をもつものも多い。脚筒外面は縦方向のケズリ後ナデ，内面は上，下両方からの横方向のケズリにより上方で稜を残す。脚部内面は縦長の指頭圧痕を残すが，後にハケメを施すものもある。端部には回転ケズリ後横ナデが多い。これらの調整一部を欠くもの（27－6，7，8，9，28－16）も存在する。口径は大形品が約23㎝，他にはほとんどが16～17㎝で小形品はない。また底部内面中央に刺突痕をもつものもわずかに認められた。

脚　部（第29図）は，1～6が高坏Aに，7～20，23が高坏Bに対応する。円形透しを三方向にもつものもわずかに認められた。

坏（第30図）は形態，技法とも多様である。器高が口径に比して大きいもの（1～6，8～10，19）等と，小さいもの（14，17，20～24）等，高台の付くもの（26，27）等がある。技法的には手づくね形式のみのもの，ハケメを施すもの，外面下半，あるいは内面ヘラケズリのもの，内面に暗文を施すものなどがある。またミニチュア土器（28，29）も存在する。

直口壷（第31図）　口縁の開くものもあるが，ここでは一応直口壷として扱う。

直口壷A（1～4）大形で，球形の体部をもち，口縁部は開く。体部は外面ハケメ，内面ケズリ。

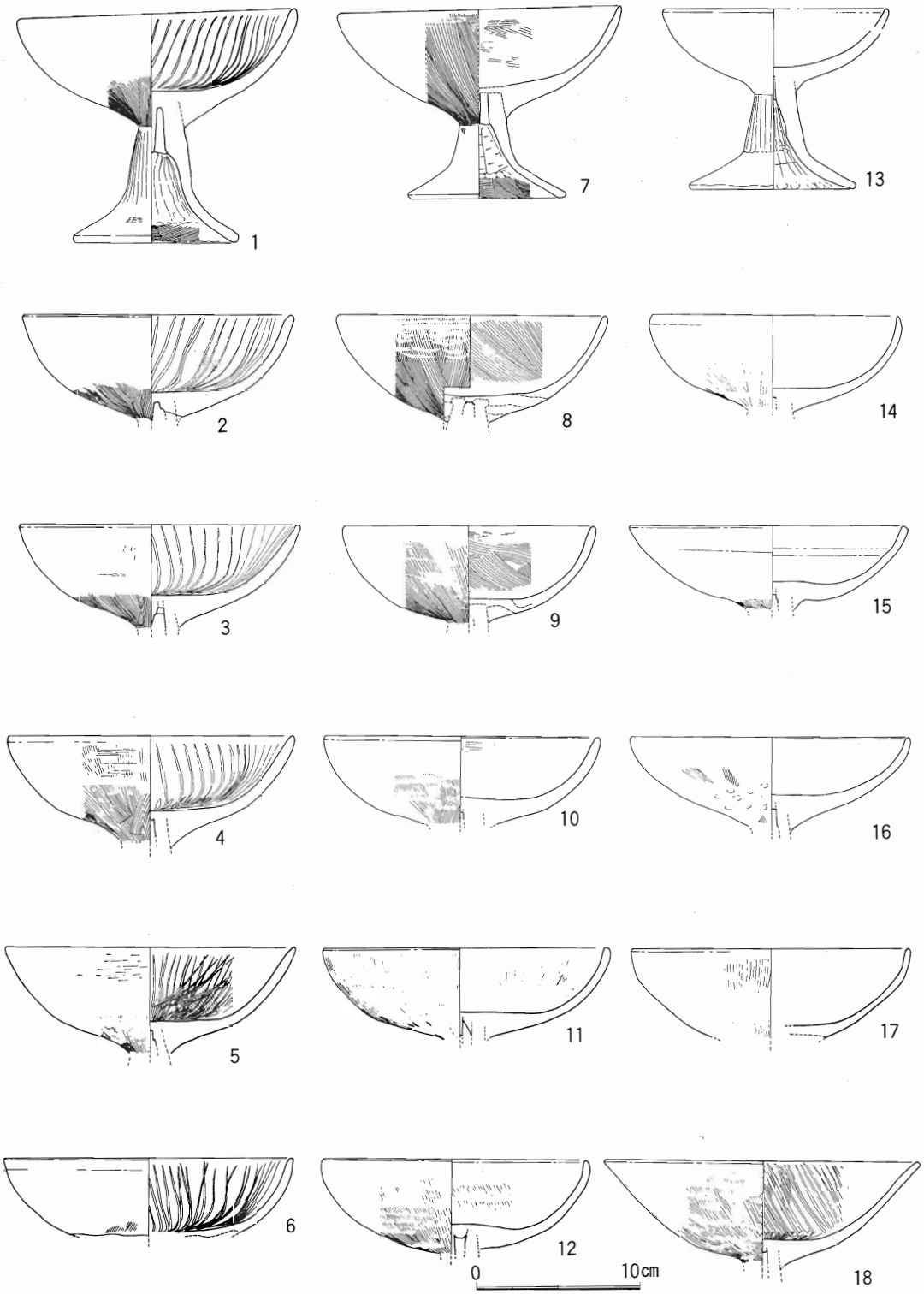
直口壷B（5～9）　体部はやや長胴を呈し，肩部が張る。平底（9）もある。口縁部は短く開く。体部は外面ハケメ，あるいはナデ（6），内面ケズリを施す。

直口壷C（10，14～17）　直口壷Bの小形品。ほとんどが手づくね，ナデのみで，ハケメを施すものは少ない。他に二重口縁状を呈し，肩部に孔をもつ，瓶形のもの（13）などがある。

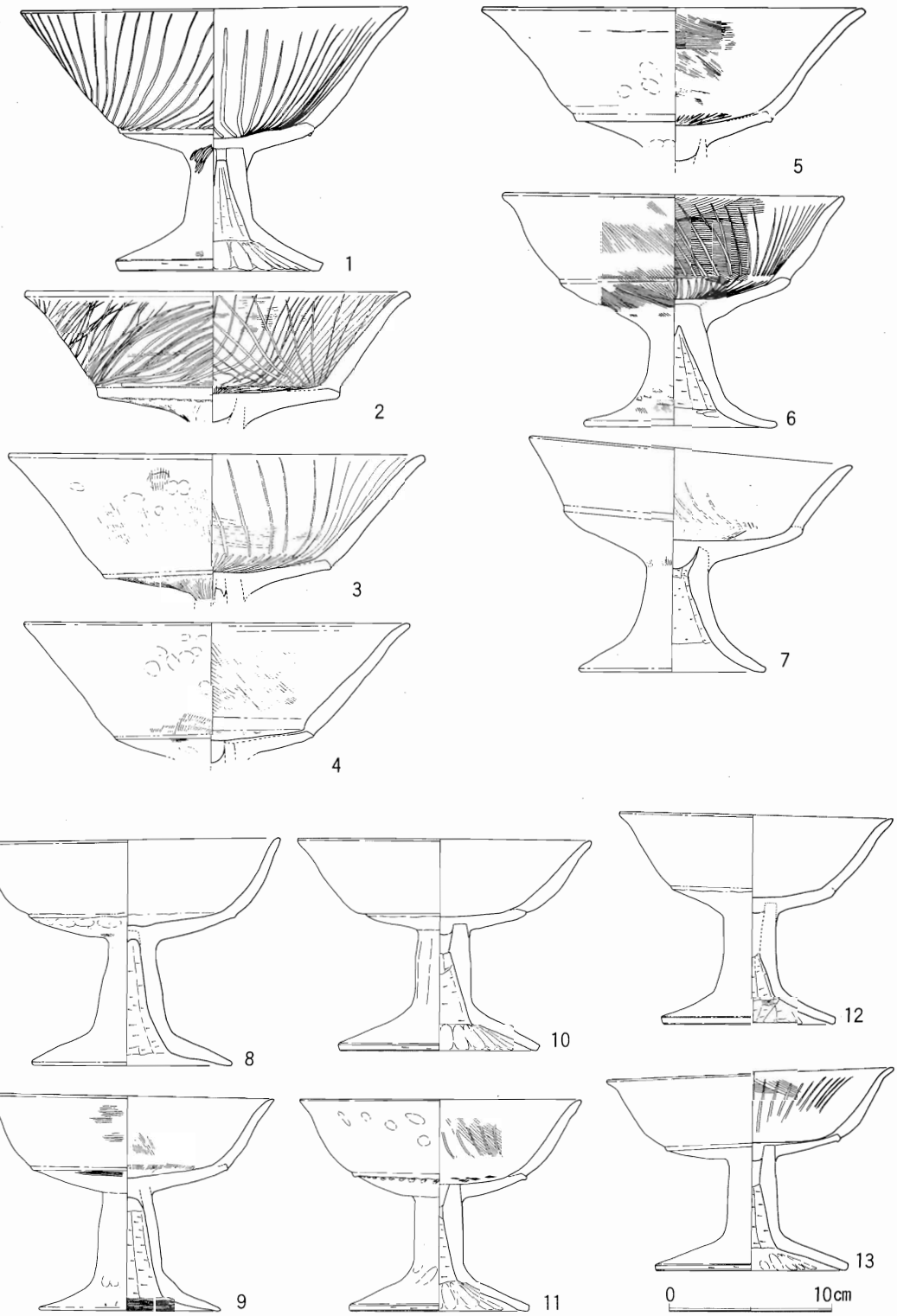
甑（第32・33図）　底部に孔を複数もち，把手のつくもの（33－8は付かない）を甑とした。細部は個々異なるが，ほとんどが，平底，もしくはそれに近い形状の底部をもち，中央に1個，その周囲に5個以上の楕円形の孔を切り込まれている。口縁はほぼ直立，あるいは外傾し，ほとんどが端部を平坦（やや中凹み）に仕上げている。把手は牛角状を呈し，体部中央に切り込んだ孔に差し込んで取り付けている。調整は，外面がハケメ，内面が下半以上をケズリとするものがほとんどであるが，外面下半がケズリのもの（32－2），底部外面に平行タタキの痕跡を残すもの（32－3，6，33－9）がある。底部の孔は，中央の孔が，周辺の孔と同じ大きさのものが過半数を占め，中央の孔が大きいもの（32－3・8，33－10・11）はやや少ない。周辺の孔数は前者が5か6に対し，後者は7，8と多い。

須恵器（第34図　1，2）

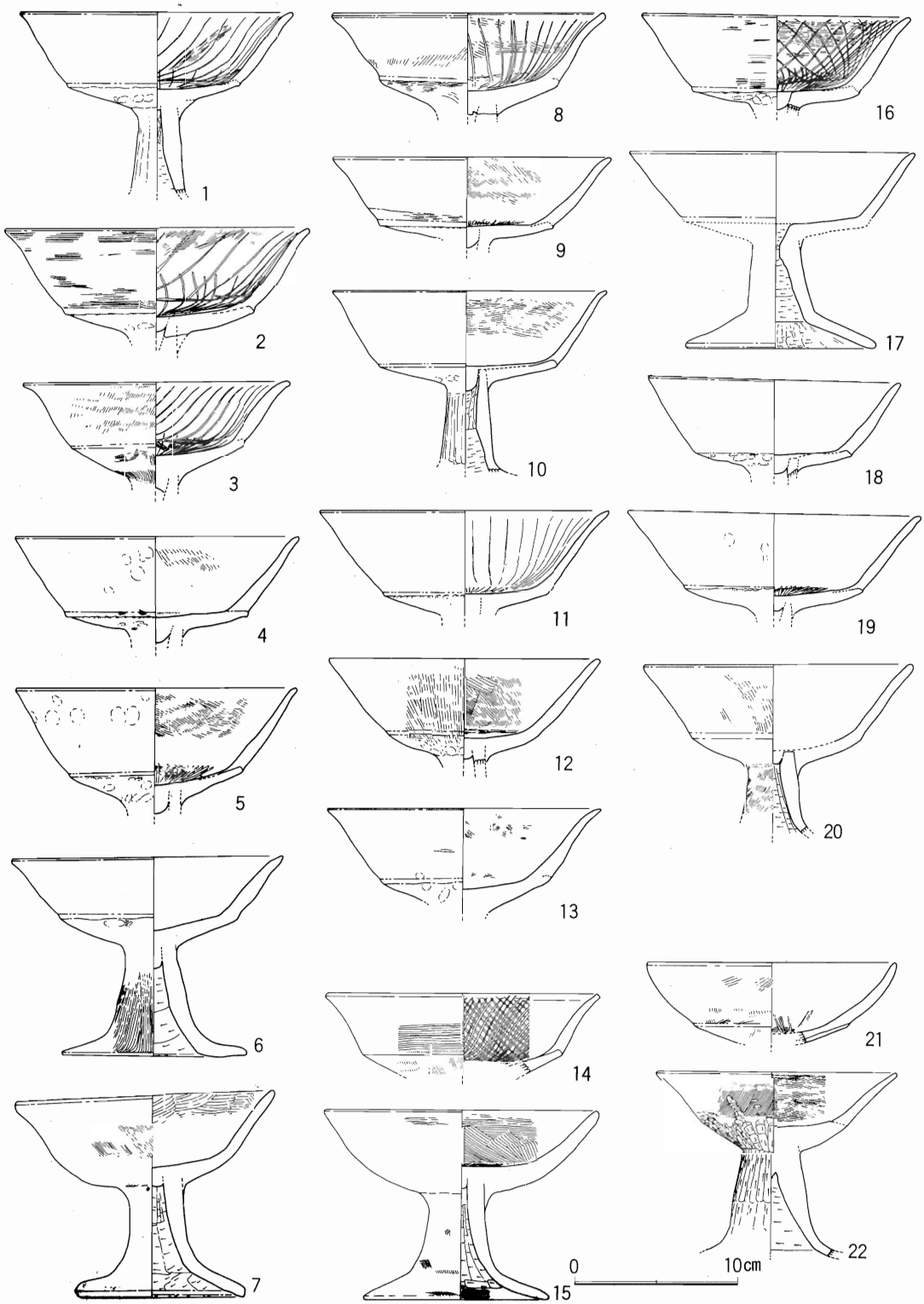
1は鉢形土器で，図では表現していないが，把手が付くものと考えられる。口縁部は回転ナデによって仕上げられている。胴部外面には板状工具によるナデ，底部付近は手持ちヘラケズリ，内面は斜方向のナデ調整が施されている。また口縁外面に一巡しない，弱い波状文が描かれている。



第26図　第Ⅶ調査区中層出土遺物実測図

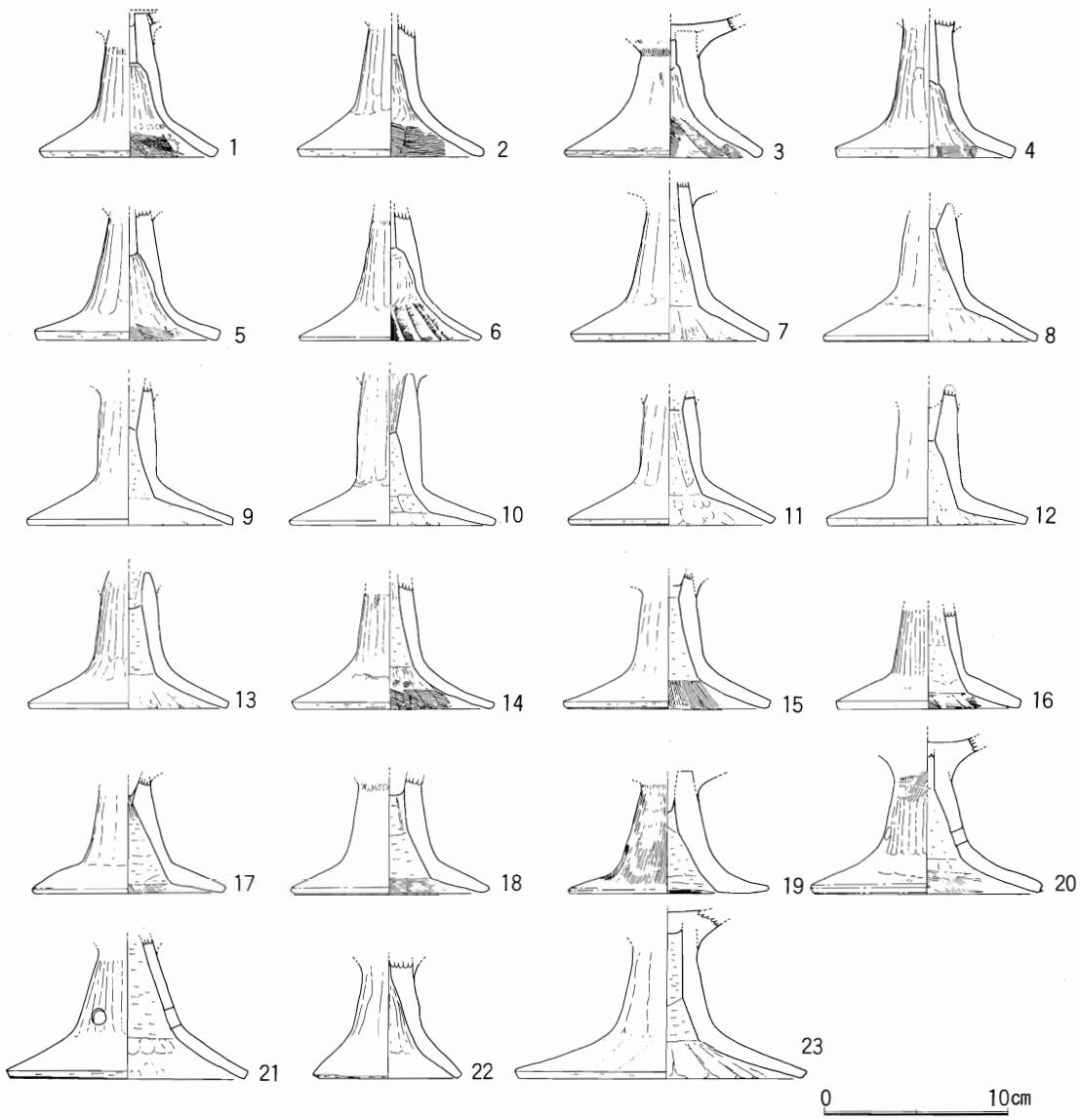


第27図　第Ⅵ調査区中層出土遺物実測図

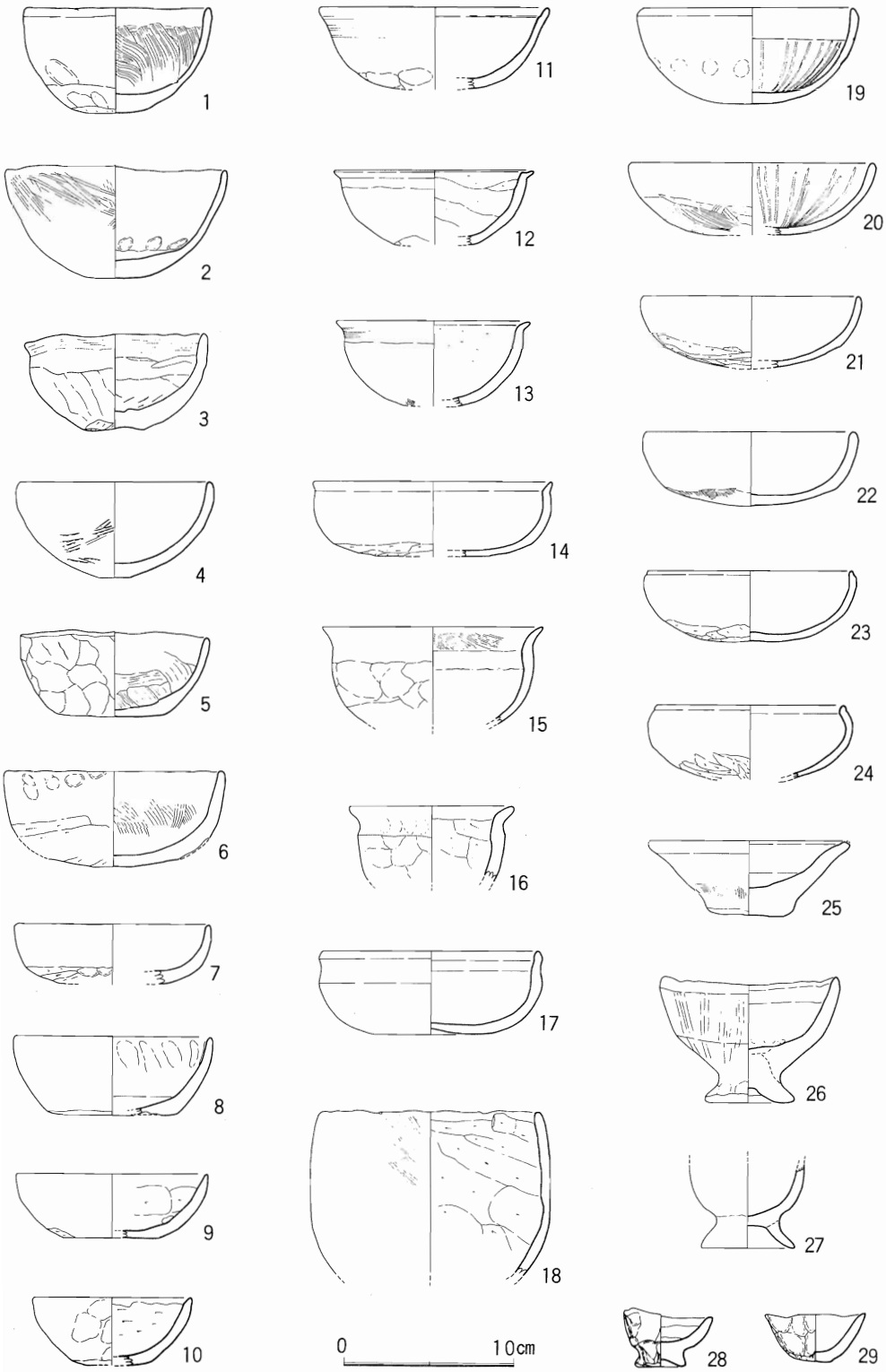


第28図　第Ⅵ調査区中層出土遺物実測図

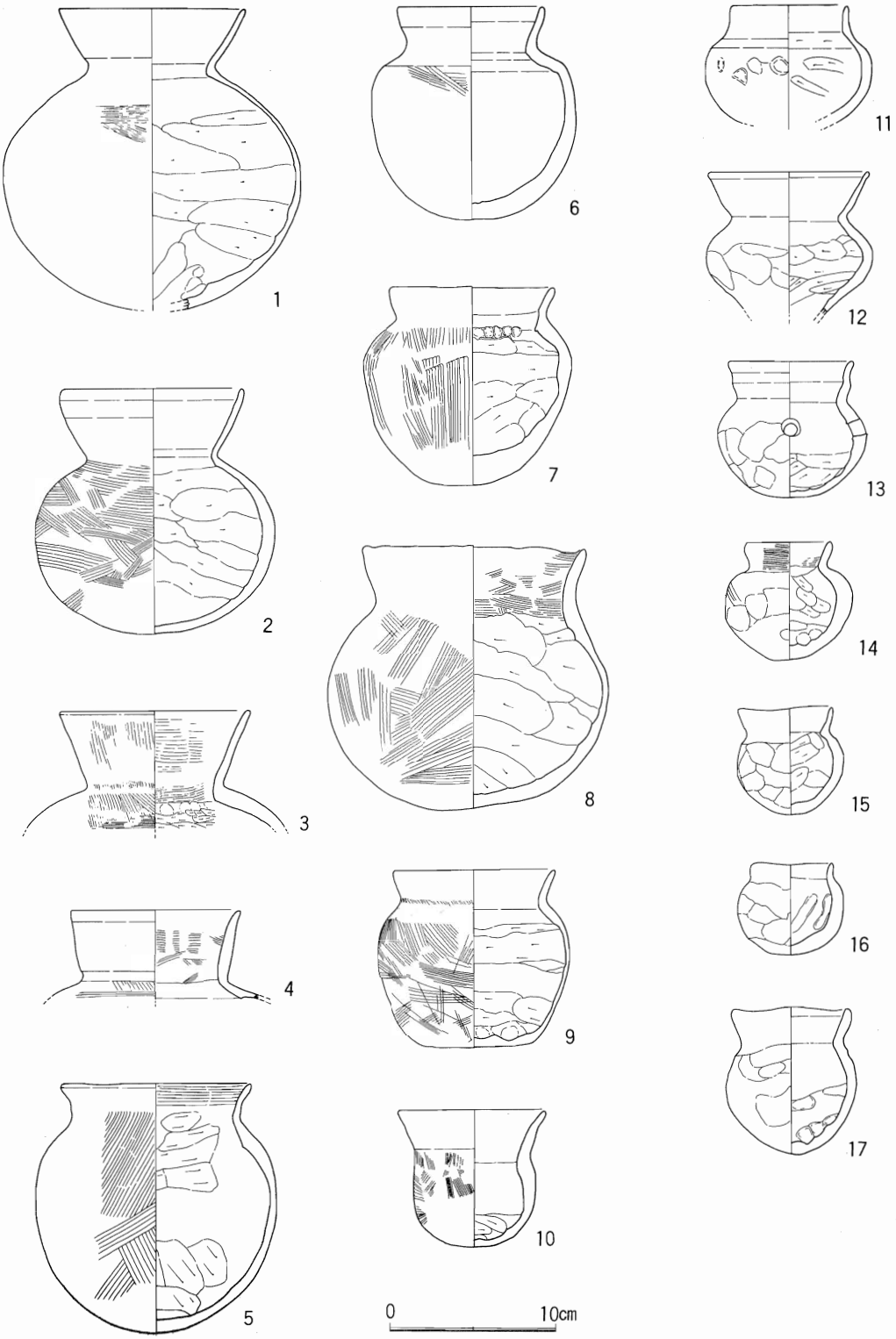
2は甕形土器で，肩部がやや張り，口縁部は外反して開くものである。口縁外面には端部付近に1本，中位に2本の断面三角形の突帯を貼り付け，口縁端は平坦となる。また口縁外面に雑な波状文を2段と，肩部に板状工具による押引き文をもつ。技法的には極めて特異で，口縁部は回転ナデ（横ナデか）を施すが，高さが一定していない。胴部は外面がナデで，一部ハケメを残し，内面はヘラケズリ後上半をナデている。



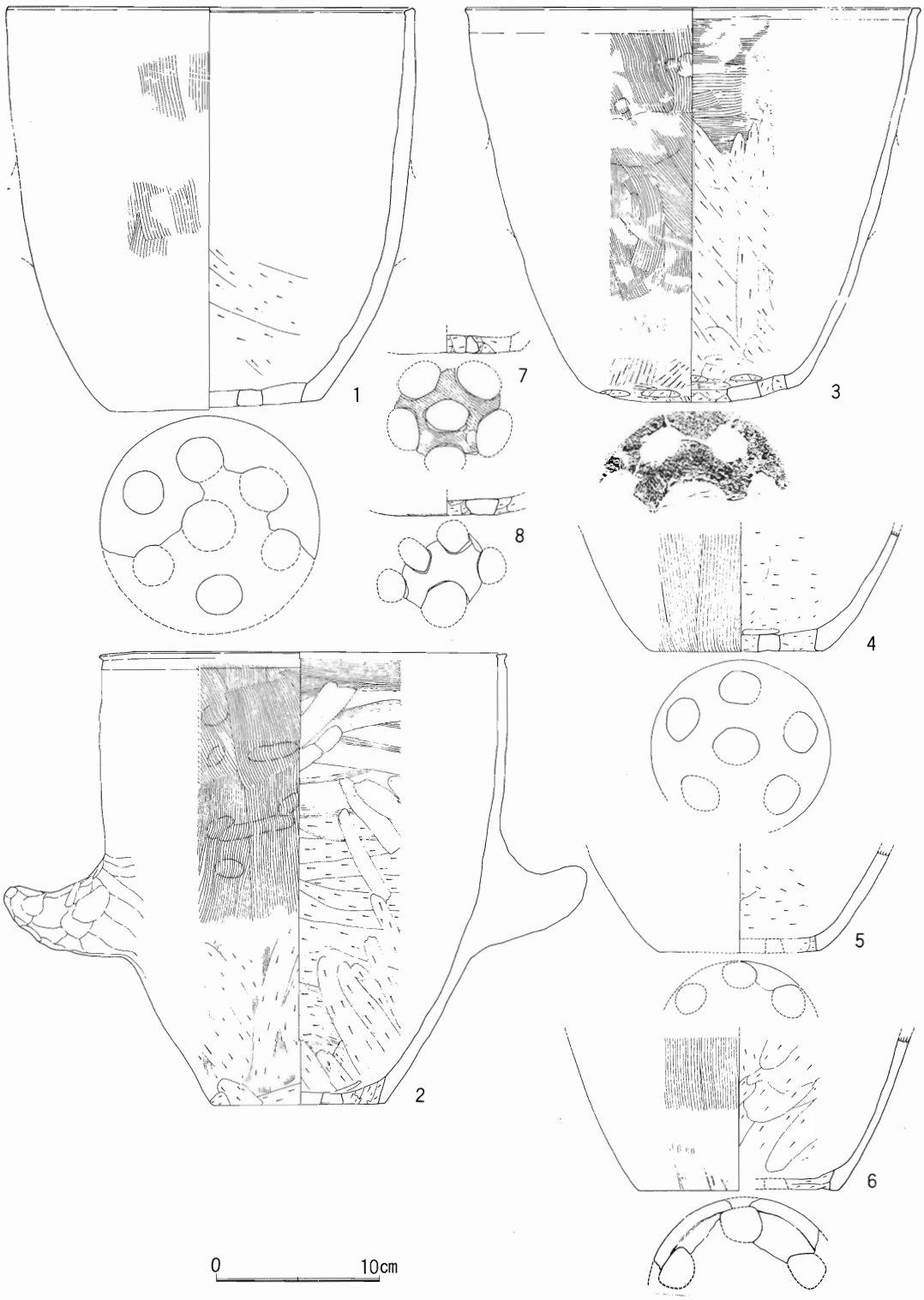
第29図　第Ⅵ調査区中層出土遺物実測図



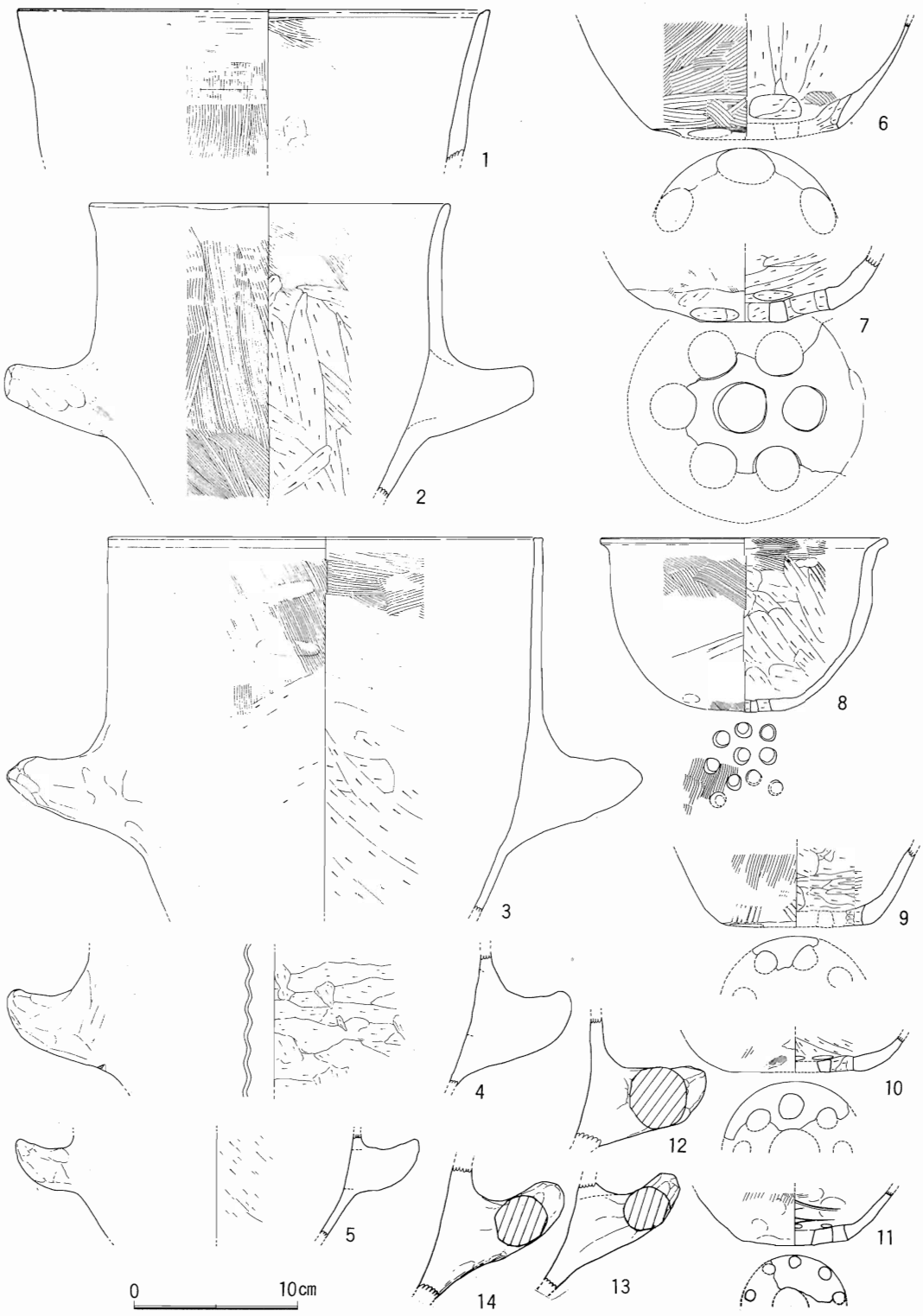
第30図　第Ⅵ調査区中層出土遺物実測図



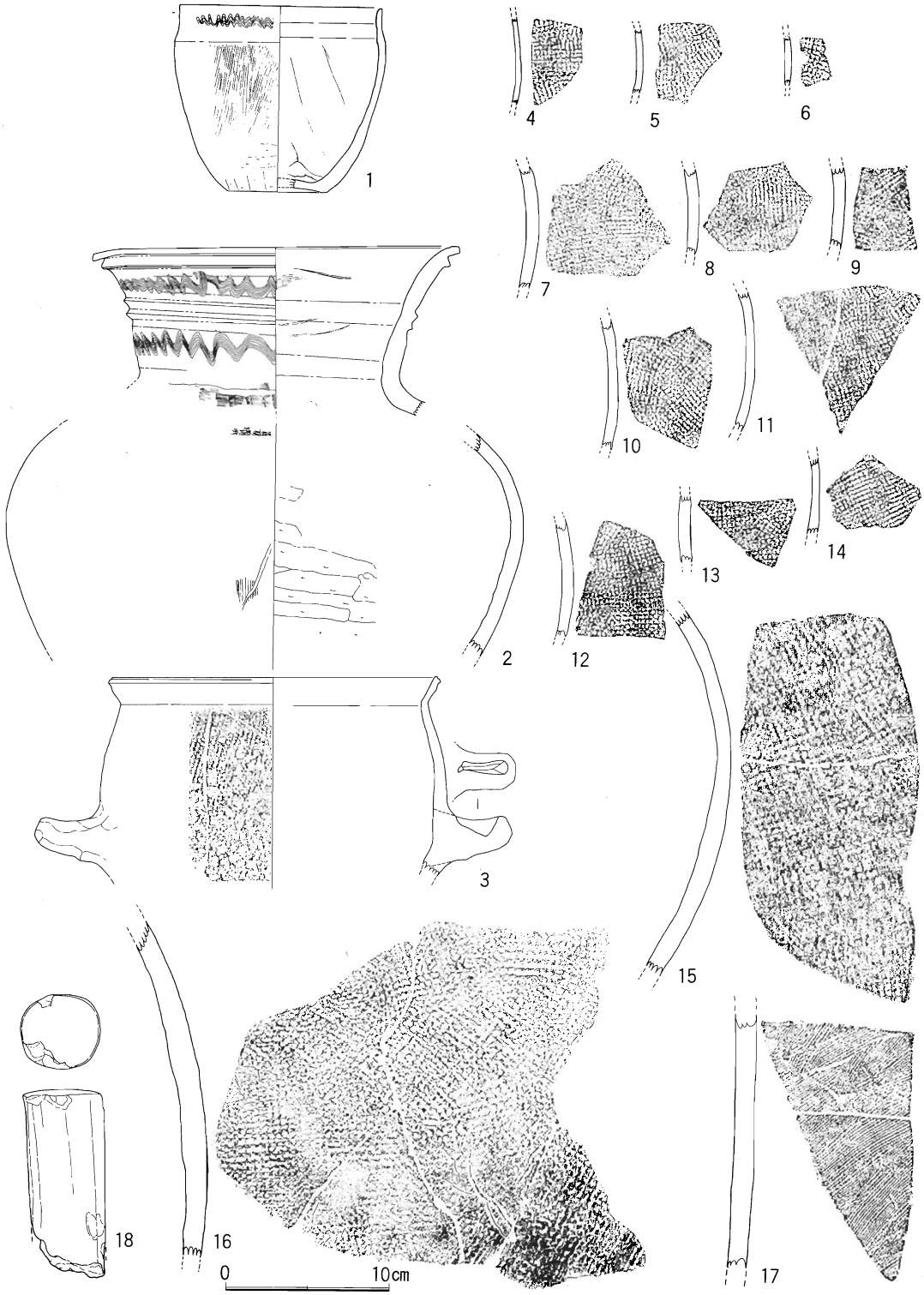
第31図　第Ⅵ調査区中層出土遺物実測図



第32図　第Ⅵ調査区中層出土遺物実測図



第33図　第Ⅵ調査区中層出土遺物実測図



第34図　第Ⅵ調査区中層出土遺物実測図

韓式系土器（第34図　3～16）

ここでは，外面に格子，斜格子タタキを残し，焼成が土師器と異なるものを，韓式系として取り扱った。

3は把手付きの鍋形土器と考えられるものである。口縁部は体部から屈曲して開き，端部は中凹みを呈す。把手は差し込み式で，上側に深い切り込みを入れる。外面は斜格子タタキ，内面はナデである。5～17は甕の体部片と考えられるものである。4～6は器壁が薄く，外面は格子目タタキ内面はナデ，7～14と15，16も壁の厚さ，格子目の大きさを除いて同じ調整である。17は外面ハケメ，内面ナデと異なるが，胎土，焼成，内面調整が土師器と異なるため，ここに属する可能性もある。これら韓式系土器の内面は全てナデ調整であるが，浅い凹みが多く見られ特徴的である。

上層出土遺物（第35図）

上層からは須恵器の高坏・蓋，土師器の坏・高坏・直口壷・甕・甑等が出土している。量は少ないが完形品が多く，砂層，あるいは礫層中よりそれぞれ単独で出土している。中層は旧河道の岸の部分に炭化物とともに流れ込んでいたが上層出土の遺物は，この河道を埋めた砂礫層からの出土である。量的にも中層よりは圧倒的に少ない。

須恵器（第34図　1，2）　1は高坏坏部で，脚部は残存していない。脚部との境に三方向の透しの痕跡を残す。口縁部は肥厚し1条の沈線を回らし，受け部は短くやや下向きとなる。底部はやや厚めの器壁である。外面は回転ケズリ後上半に回転ナデを施す。口径13.4cm，残存高5.8cmを測る。2は蓋坏の蓋と考えられ，口縁部はやや開き気味に立ち上る。口縁端は鋭く仕上げられている。口径は推定12.2cmを測る。

土師器（第34図　3～13）

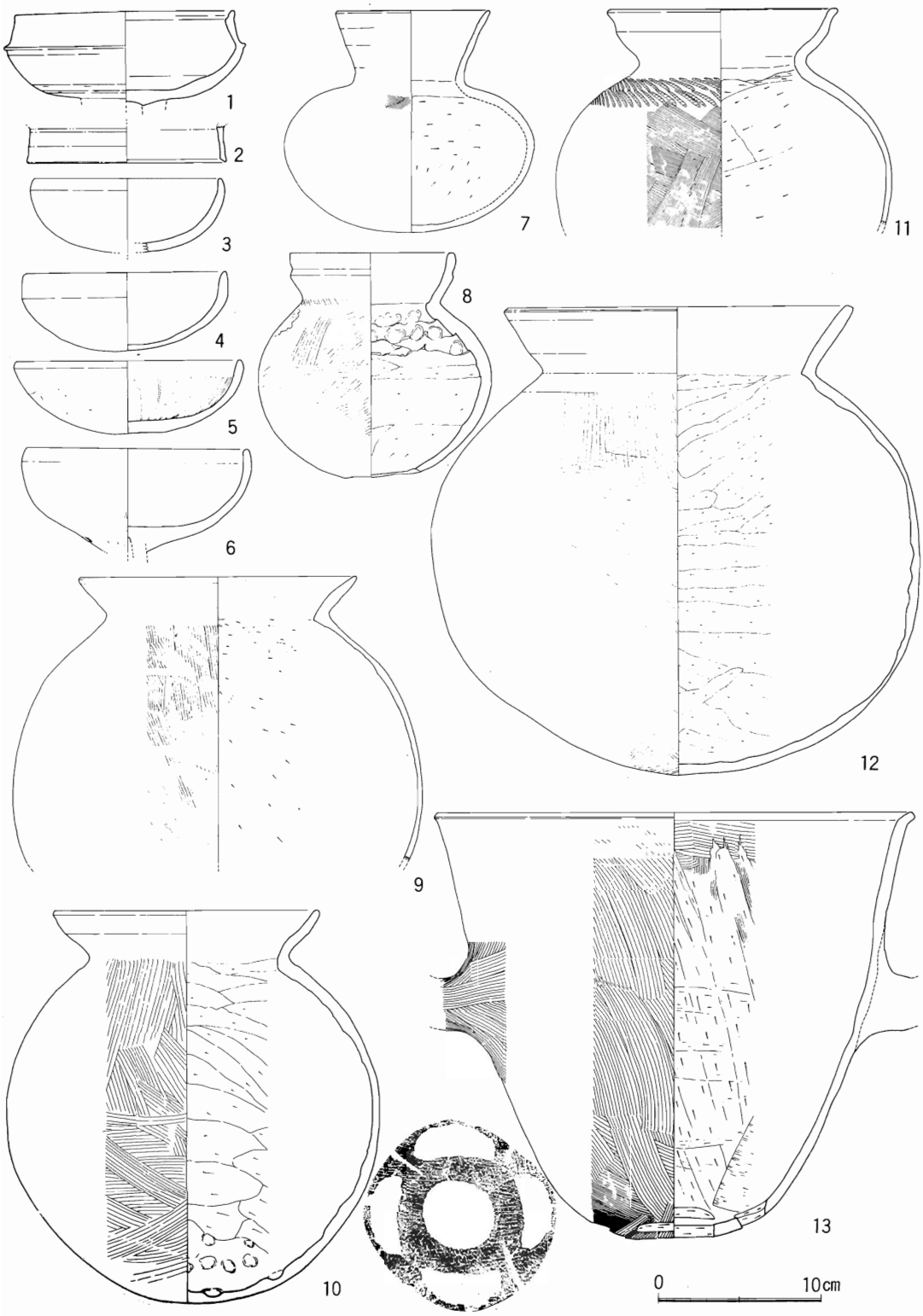
坏（3）は丸底を呈し，口縁部が内湾する。口径11.4cmを測る。4は口縁部の立ち上りが長く，やや内傾する。坏（5）は，外面にヘラケズリを施し，内面には暗文が施されている。

高坏　坏と同様，前述した中層出土の高坏よりも口縁部が長く，やや内湾する。口径も14.1cmと中層のタイプに比して小さい。

直口壷　7は口縁がやや開き，体部は高さに対して最大径がかなり大きい。8は口縁部が二重口縁の痕跡を残し，胴部はほぼ球形を呈す。底部は焼成後に穿孔が行われている。

甕　ほとんどが9，12のように逆ハの字状に開く単純口縁のもので，胴部は球形を呈す。11は口縁部が二重口縁の痕跡のようなアクセントをもち，肩部にハケメ原体による連続刺突文をもつ。

甑　1点のみであるが把手を除き完形である。口縁部は体部から直線的に開き，端部は短く外反して平坦面をもつ。底部は丸底を呈し，中央に円形，その四方に半円形の孔を切り出している。内面は縦方向のケズリ後，板状工具による横ナデを施す。把手は貼り付けただけのものである。



第35図　第Ⅵ調査区上層出土遺物実測図

第Ⅵ調査区（中層）出土遺物（第36図）

1は有茎の銅鏃である。完全な形で遺存しており，全長3.9cm，刃部長2.7cm，刃部幅1.49cm，茎径0.4cm，重量7.5ｇを測る。刃部は断面菱形を呈する。表面には黒サビがうき出している。

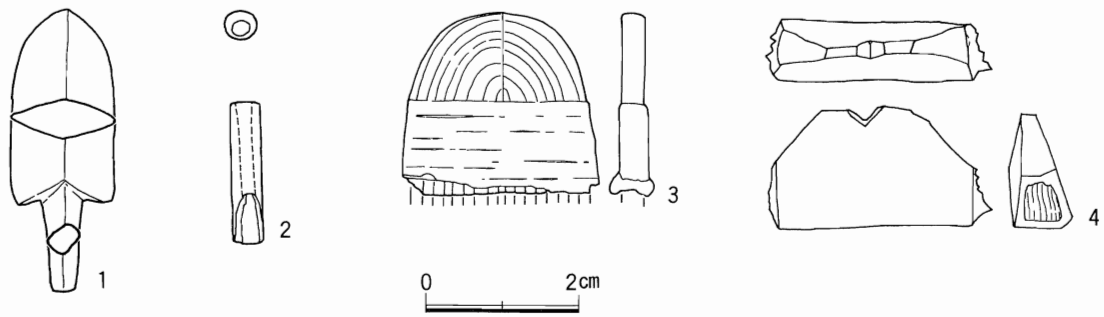
2は管玉で，一部破損しているがほぼ完形のまま遺存し，風化も進んでいない。全長1.9cm，径0.4cm，孔径0.2cm,重量0.7ｇを測る。石材は緑色凝灰岩を使用している。

3は竪櫛である。９本の把を使用し，それを折り曲げて束ねることによって18本にしている。束ねた部分には漆が塗布される。残存長2.4cm，幅2.5cmを測る。

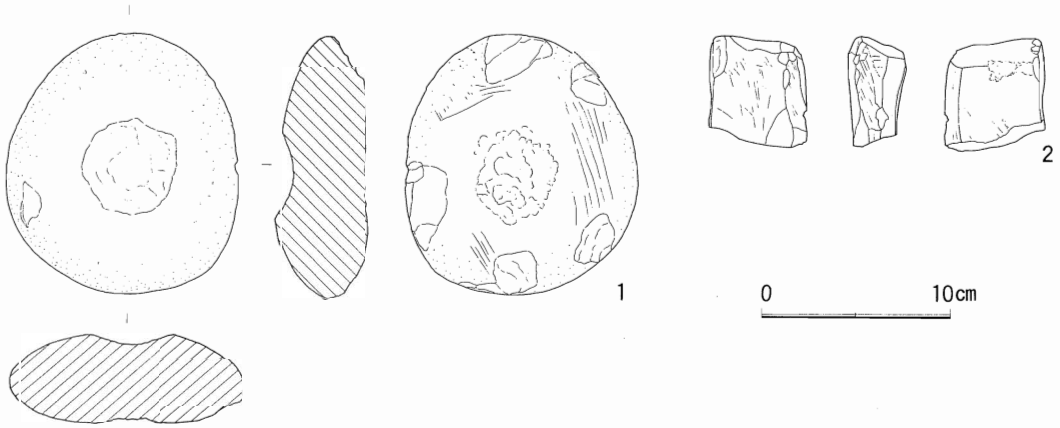
4は琴柱である。残存長2.9cm，高さ1.6cm，幅0.8cmを測る。頂部は弦をかけるためにＶ字状に切り込んでいる。裾部は直線的に広がり，端部が加工途中で折り取られたままであること，中央部に折り込みをもたないことなど，やや雑なつくりであることを示している。

第Ⅵ調査区（中層）出土遺物（第37図）

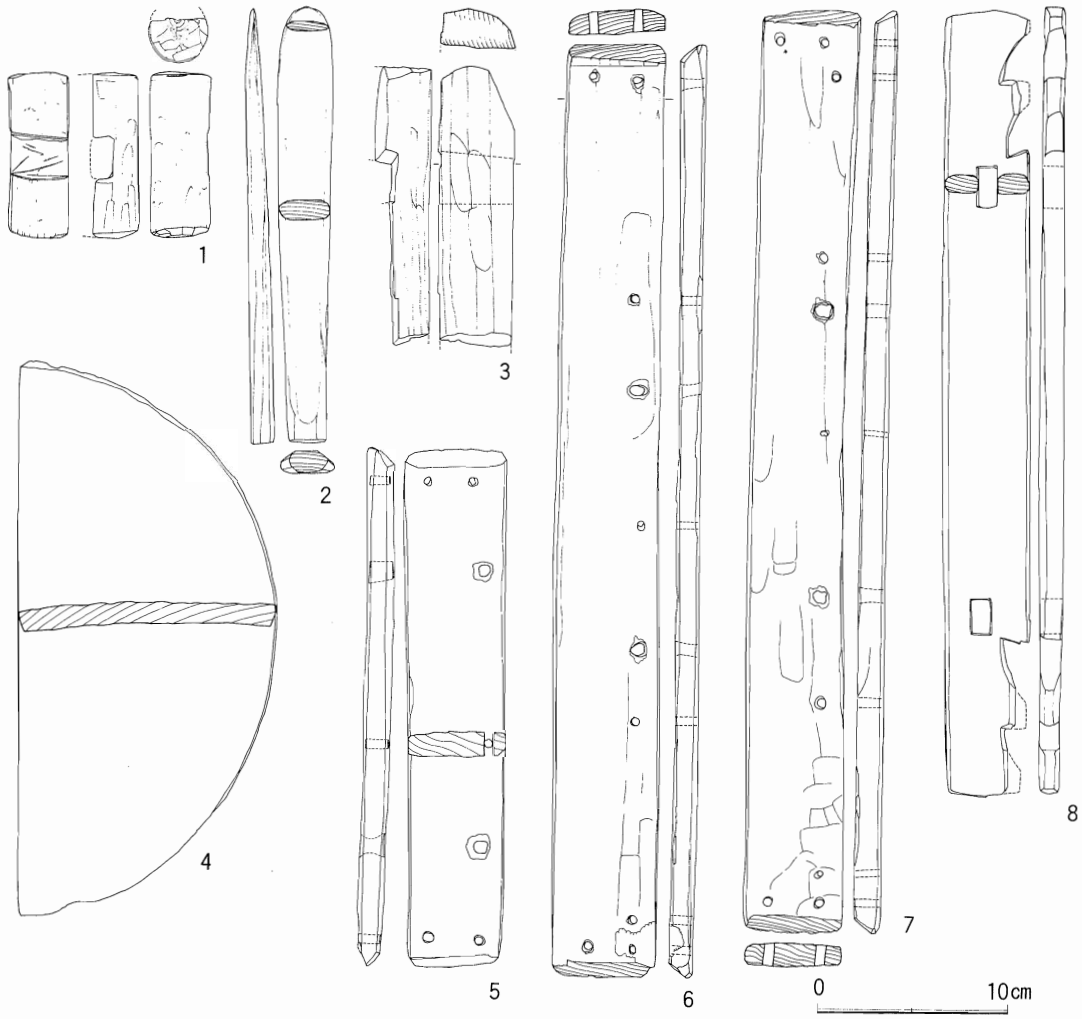
1は敲石である。両面に凹みをもつが，一方の凹部は反対側のものより深く，磨滅している。浅い凹部をもつ方の面には擦痕が認められる。石材は砂質ギ岩である。2は砥石で様々な方向の擦痕が確認できる。石材はシルト質砂質ギ岩である。



第36図　第Ⅵ調査区中層出土遺物実測図



第37図　第Ⅵ調査区中層出土遺物実測図



第38図　第Ⅵ調査区中層出土遺物実測図

Ⅴ　む　　す　　び

今回の調査で，第Ⅰ，Ⅱ，Ⅲ，Ⅳ調査区においては，古墳時代から中世にかけての遺物が出土したものの遺構は検出し得なかった。この付近は以前出雲国庁推定地とされていた地点であったが，建物等が存在し得るような基盤層はみられなかった。

第Ⅴ調査区においては，前回の調査（昭和55年度）に続く水田跡を確認した。今回の調査で下層水田跡の時期は，弥生時代後期前半と確認したが，上層の水田跡については不明でやや時期的に下

る可能性もある。夫敷遺跡は，意宇平野の中央，東端，弥生時代においては中海の海岸線に近いという場所と思われる。この平野中では，上小紋，向小紋の両遺跡において同時期の水田跡を検出している。この遺跡は，後背温地に立地しており水田の各規模は夫敷遺跡に比べ小さなものである。夫敷遺跡の水田跡は一面が約80㎡とかなり大規模なものであり，各水田の中には検出し得なかったが小畦等の施設が存在していた可能性もある。

第Ⅵ調査区では，意宇川の旧河道の一部と思われる幅30mの溝状の落ち込みを検出した。この旧河中の堆積土は，下層（古墳時代前期），中層（古墳時代中期中葉），上層（古墳時代中期後葉）に分かれている。

下層出土遺物は，在地系の土師器では小谷式の範疇に含まれるものである。出土した土師器は，壷，甕，高坏，器台，低脚坏，小形丸底壷といった器種であり，前期におけるほとんどの器種が揃っている。これら在地の土師器に，畿内布留系と考えられる一群が含まれている。甕（第22図５・６）は，口縁端部が内側に向け肥厚しており，布留式の甕の特徴を有している。また，器台（第22図１～４，７・８），鉢（第22図９）といった従来，当地において出土していない器形の土器が出土しており，布留系と考えられる。これら外来系の土器は，布留式の中でも中段階とされるものであり，在地の土器はその並行関係より小谷式の新しい頃という年代観が考えられる。下層（前期）からは，畿内庄内系と考えられる甕（第22図21～25）の破片も出土している。

中層出土遺物は，従来当地において大東式と呼ばれていた時期にあたる。しかし大東式の実体が曖昧なためその時期的位置づけも不明確であった。今回出土した一群は，土師器の甕，壷，高坏，坏，甑，韓式系土器，初期須恵器である。土師器の甕は二種類あり，複合口縁の退化形態と考えられるもの（第23図）と，単純口縁（第24，25）がある。複合口縁のものは，前期に比べ口縁部が厚くなり，上端と下端の幅が狭くなっており，下端の突出もだれた感じとなっている。その中で第23図10・11・14は，複合口縁の退化形態と考えるよりは，他の要素を考えるべきと思われる。単純口縁の甕は，口縁部が「く」の字状を呈している。口縁の内面にハケメの痕跡を残すものもある。この二種類の甕は同時期のものである。高坏も二種類みられ，坏部に丸味をもつもの（第26図）と坏部に稜を持つもの（第27・28図）がある。椀形の高坏（第26図）は坏部の径が極めて近く，器形も良く似ており，規格品と思われる。内面には暗文を持つものと持たないものがみられる。27図１～５は，大形の高坏であり，特に１・２の内外面は使用によりスス状の炭化物が付着しており，高坏が煮炊きにも使われたようである。この時期の高坏の形態に二種類のものがみられるのは，当地に限らず他の地域でもみられるようである。外面に稜の付く高坏の形態は，大角山遺跡出土のものに比べ後出的な要素である。

中期の坏（第30図）は当地でこれだけまとまって出土した例はなく，同時期にこれだけのバラエ

ティがあることが判明した。

壷（第31図）は，6・7・8のように極めて器壁の厚いものがあり，外面調整のハケメのやや粗いのが特徴である。9は，底部が平底であり，韓式系土器にみられる小形の器種にも似た形態である。

甑（第32，33図）は，体部から口縁部に向け直線的に立ち上り，体部の中程に穴をあけ把手を差し込んで付けている。底部は平底状を呈し，円形の穴が6～7個穿けられている。3・6は，体部下半にタタキメの痕跡がかすかに残っている。

韓式系土器（第34図　3～16）　韓式系土器は，器形の伴るものは3だけである。把手の上半に切り込みを入れ，体部外面には菱形のタタキを施している。韓式系土器は県内では初めての出土であり，従来みられなかった甑とともに他の地域（畿内等）との関連が強い遺物である。

初期須恵器（第34図　1・2）　1は把手の付く鉢であり焼成も良い。2の甕は，体部内面にヘラケズリを施している点で他に例を見ないものであり，当地に須恵器の入った段階のものと考えられる。

上層出土遺物（第35図）

上層からは，須恵器の高坏，坏とともに土師器，坏，高坏，壷，甕，甑といったセットが出土している。須恵器は，山本編年Ⅰ期に含まれるものであり5世紀後半と考えられる。土師器の甕は，口縁部にかすかに複合口縁の名残りがある程度である。甑は，底部が平底から丸底へと変化しており，把手も貼り付けるだけのものとなっている。この時期の遺物は，中層に比べ極端に少ない出土数であった。

以上Ⅵ区は前期～中期にかけて三段階に分かれる包含層が確認された。特に前期と中期中葉の土層には間層があり，出土土器に中期前葉のものがないことが注意される。この時期の土器は実体が不明であるが前期と中期中葉の間では土器の器形，器種構成に大きな変化があったようである。前期の布留式の段階（一部庄内式）より畿内とのつながりが認められ，特に中期には，須恵器，韓式系土器等からより強い関連が見られたようである。今後，古墳や同時期の集落の状況をふまえた上で考えるべき資料と思われる。

夫敷遺跡の第Ⅵ調査区においては，古墳時代前期から中期にかけて，三層の包含層が確認された。今回調査を行った範囲内では，遺構はSK－01のみであった。しかし，これだけ多量の生活に関係した遺物が出土しており，付近には集落があったものと思われる。その集落も，その場所が当時の中海の汀線近くの河口付近に立地しており，韓式系土器が出土した点を考えると，畿内でも河内湖周辺にその出土する遺跡が多いことなどから，この遺跡の周辺が当時の港的性格を持っていた可能性もあり，今後の周辺の調査により，実体が解明されるものと思われる。

自 然 科 学 分 析

付編1　夫敷遺跡出土土器の蛍光X線分析

奈良教育大学　三 辻 利 一

1) はじめに

化学分析による古代土器の産地推定の方法は，生産地母集団の化学特性を前以て整理しておき，これに遺跡から出土した土器の化学分析の結果を対応させることによって行われる。勿論，土器の化学特性は素材粘土の化学特性であり，これは母岩の化学特性に支配されている。したがって，土器の化学特性は根源的には地質構造に深い関係をもつことになる。

もう一つの大切なことは母集団の化学特性は分析結果の平均値を使って点として表現される性質のものではないことである。全国各地の窯跡出土須恵器の分析データによると，$\pm 3\sigma$（シグマ）（標準偏差）程度の広がりを持たせておかなければならないことである。この広がりのある母集団に，遺跡出土土器の分析結果を対応させなければならないのである。ここに，従来の分析化学が取扱って来たのとは異質の問題がある。従来の分析化学では分析対象の化学特性を，分析値の平均値を使った点として把握してきた。それというのも，従来の分析化学の分析対象は純物質系であったからである。複雑系の分析をする場合にも，純物質系にするための，「分離」という重要な操作段階を必要としたのである。一方，土器の産地推定における分析化学は純物質系の分析化学ではなく，土器や粘土，岩石を複雑系のまま分析する，所謂，バルク分析である。このために，母集団の特性は広がりのある星雲状の本体として把握されることになる。この結果，遺跡出土土器の分析結果から，どの星雲状母集団に帰属するかを決めるためには判別分析が必要になる。このように，土器の産地推定における分析化学とは考え方やデータ処理の仕方において，従来の分析化学とは全く異なる。化学分析による古代土器の産地推定を理解する上に，上述のことは重要である。

実際に，産地推定をする上にもっとも重要なことは，如何にして母集団を整理しておくかということである。須恵器のように，生産地である窯跡が残っており，かつ，そこから多数の試料が得られるものは一基の窯跡，あるいは，同じ地質構造の地域内の窯跡群を一母集団として把握できる。しかし，土師器や弥生土器のように窯跡が残っていないものはどうして母集団を設定するかが大問題である。現在，各地で母集団の設定が試みられている。うまくいった一例は化学分析による分類と考古学的観察による分類が一致したときである。この場合，これらを一母集団としてとらえることができる。

このような考え方で，夫敷遺跡など島根県内の2・3の遺跡出土土師器，弥生土器の分析データを解読した結果について報告する。

2) 分析結集

表1に全試料の分析値を示してある。分析値は岩石標準試料JG－1による標準化値で示されている。この結果を使って，分布図上でこれらの土器が分類できるかどうかを検討した。まず，図1には夫敷遺跡出土土師器のRb－Sr分布図を示してある。この分布図は各地の窯跡出土須恵器の地域差をよく表示することで知られている。この分布図で化学特性にどの程度の差異があるかを探るのが常とう手段である。ところが，図1をみてわかるように，夫敷遺跡出土の土師器はSr量にかなりのばらつきがあり，そのため，横にかなりの広がりをもって分布している。窯跡出土須恵器の分析データをみている限り，これらが同一産地のものとは考え難い。しかし，考古学的器形観察から在地産，畿内産，韓式土師器とされているものに差異が認められず，同じ領域に広がって分布しているので，どこで区別して集団を形成したらよいのか判断できない。そこで，他の因子についてみてみた。図2には考古学的に在地産と推定される土師器と畿内産と推定される土師器のK因子を対比してある。№32，15がややずれて分布するものの，他のものには大差がないことがわかる。図3

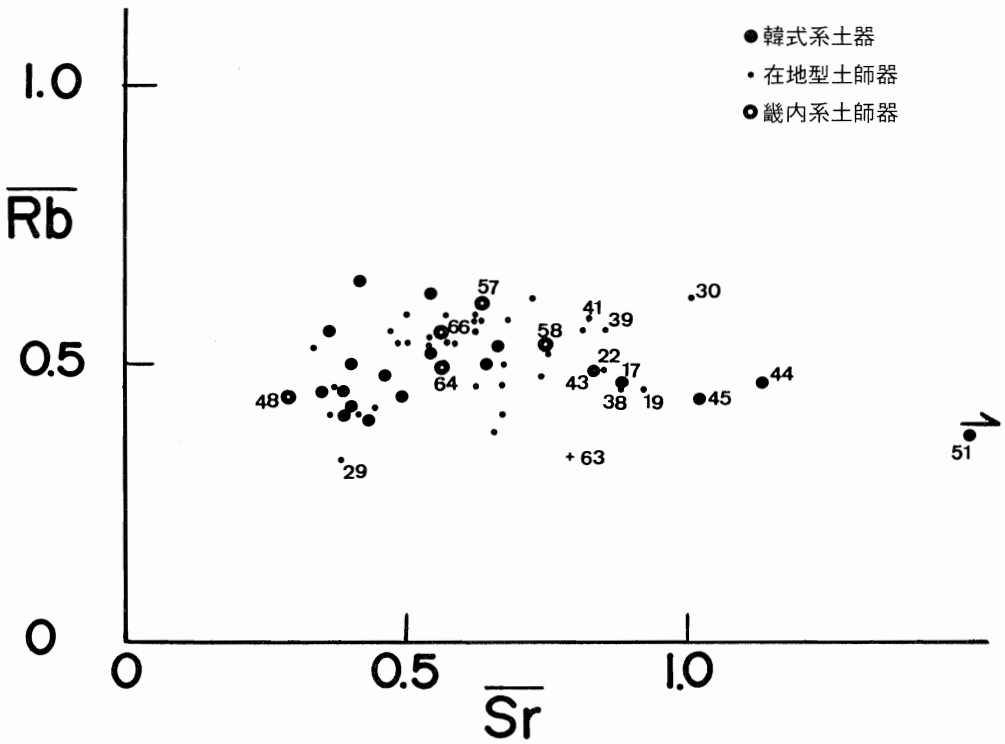


図1　夫敷遺跡出土土師器のRb-Sr分布図

にはCa因子を対比してあるが，ここでも，No51を除いて他のものには大差が認められない。同様に，図4にはFe因子を対比してある。No28，29，33，35，37，48にはFe量が多いものの，他の土師器にはFe量でも大差はないことがわかる。この結果，器形観察から在地産と推定された土師器と畿内産と推定された土師器の胎土は類似しており，相互識別は難しいことがわかった。むしろ，器形に無関係に，No51などの数点土師器の胎土に異常が認められた。

図5，6，7には器形観察から韓式系土器と推定された土器のK，Ca，Fe因子を対比してある。これらの図では比較のため，図2～4で示された在地産と推定される土師器の分析値を全て包含するようにして在地領域を示してある。図5では韓式系土器のK量はすべて，この在地領域に含まれることがわかる。器形観察で搬入品と推定されているNo63のみは他のものから少しずれて分布している。同様のことは図6のCa因子でも認められる。図7のFe因子でも同様である。ただ，No15のみはFe量が大きくずれる。

以上の結果から，器形的にみて在地産，畿内産，韓式と推定された土師器の胎土には本質的な差違はなく，

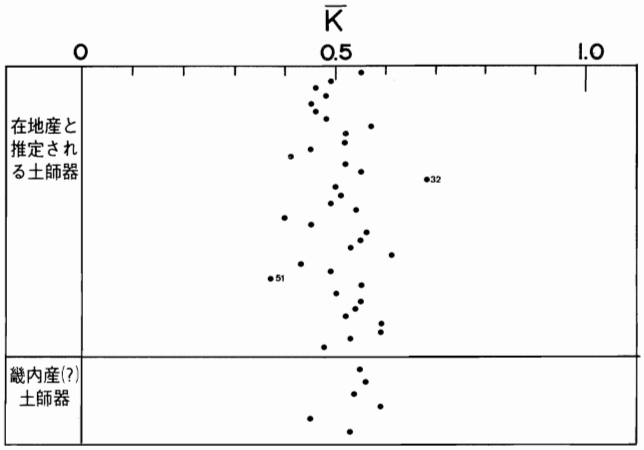


図2　在地産と推定される土師器のK量

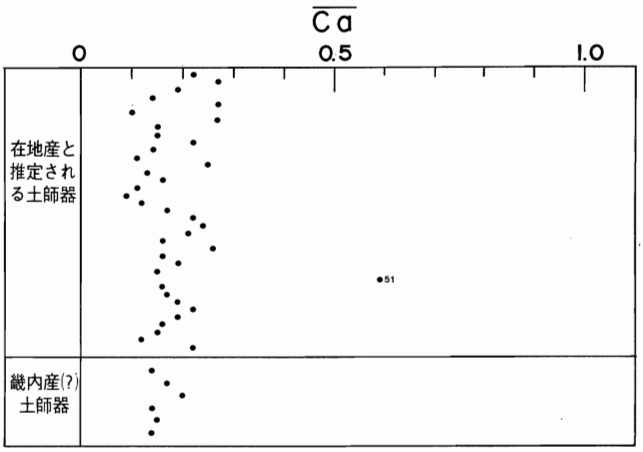


図3　在地産と推定される土師器のCa量

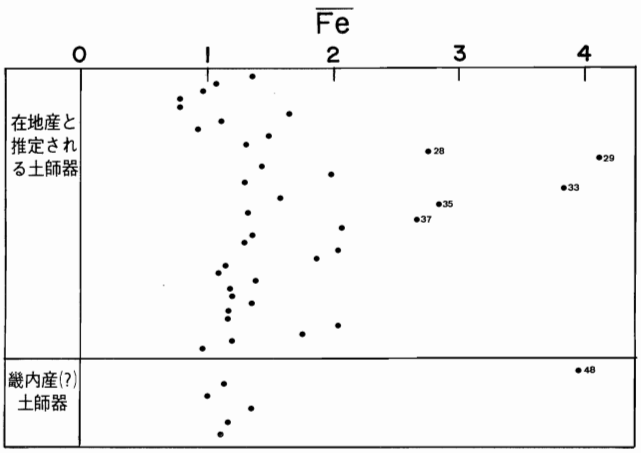


図4　在地産と推定される土師器のFe量

類似した胎土をもつことが示された。在地産土師器のうち，No51はK，Ca，Sr因子に異常が認められ，他の土師器とは異なる胎土をもつ。また，畿内産土師器のうち，No48はFe因子とSr因子で他の土師器の胎土とは異なる。さらに，搬入品と推定されているNo63も全因子で他の土師器集団から少しずれており，外部からの搬入品とみられる。Fe因子のみに異常がみられるNo28，29，33，35，37，およびNo15の土師器については搬入品かどうかの判断は難しい。

さて，多くの在地産土師器，畿内産土師器，韓式系土器の胎土が類似しているということはどう解釈したらよいのだろうか。一つの考え方はこれらが同じ地域内，したがって，最も可能性の高いものとして，在地産の形式が異なる土師器であるということである。他の考え方は考古学的器形観察から推定されるように，これらがそれぞれ在地産，畿内産，朝鮮半島産であって，胎土がたまたま類似しているだけであるということである。土師器胎土の分析データは目下のところ，須恵器ほどには出されていないので，積極的に判断することはできないが，窯跡出土須恵器の分析データをみる限り，畿内のものにはCa，Sr量が少なく，在地

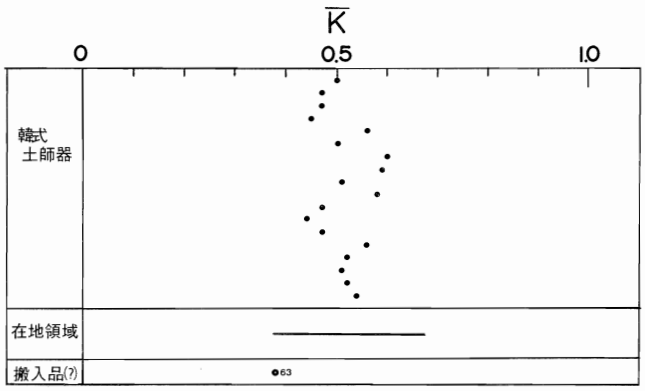


図5　韓式系土器のK量

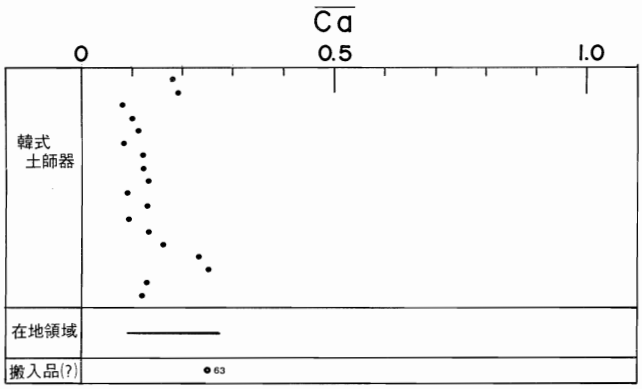


図6　韓式系土器のCa量

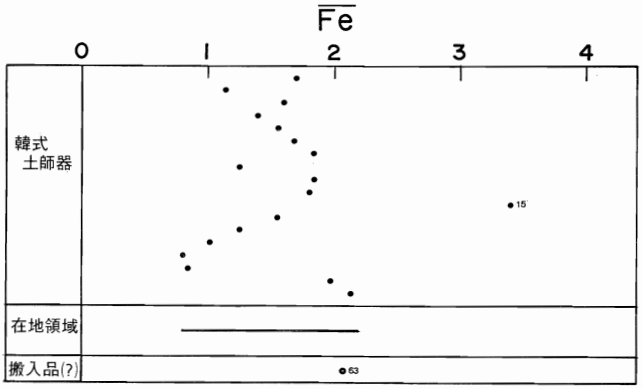


図7　韓式系土器のFe量

のものにはCa，Sr量が比較的多いので，この点からみると，後者の考え方を支持することは難しい。やはり，これらの土師器は器形に違いは認められるものの，胎土は同じである。つまり，在地産と考える方が妥当ではないかと筆者は考えている。ただ，器形に無関係に，胎土に異常が認められた数点の土師器は外部からの搬入品である可能性をもつと考えている。

次に，弥生土器についてみてみよう。図８には夫敷遺跡から出土した弥生土器のRb－Sr分布図を示す。№83が少しずれて分布するものの，図１の夫敷遺跡出土土師器と全く同じ領域に分布することが注目される。これらの弥生土器のK，Ca，Fe因子はそれぞれ，図９，10，11に対比してある。これらの図には比較のため，在地産土師器の全分析点を包含するようにして在地領域を示してある。そうすると，図10のCa因子で№83が大きくずれる以外はすべて在地領域に対応しており，ほとんどの弥生土器も在地産であることを示すとみられる。№83は搬入品である可能性をもつ。

次に，石台遺跡出土弥生土器のRb－Sr分布図を図12に示す。№84，87の２点は他の７点の弥生土器とはずれて分布する。このことは図９のK因子，図10のCa因子でも認められる。したがって，№84，87の２点の弥生土器は外部からの搬入品であると推定される。他の７点の弥生土器は図１の在地の土師器集団の左半分の領域内に分布する。このことは図１で在地産と推定された土師器が広く分布したが，これらは決して在地の一ケ所で作られたものではなく，島根県内の数ケ所で作られたものである可能性を示唆すると同時に，石台遺跡の７点の土師器も在地産であることを示すとみられる。さらに，石台遺跡の７点の弥生土器の胎土は夫敷遺跡の７点の弥生土器と類似した胎土をもつこともわかる。

一方，図13には布田遺跡の弥生土器のRb－Sr分布図を示す。これらも図１の在地産の土師器の分布領域内に分布するが，夫敷遺跡や石台遺跡の弥生土器とは対照的に，Sr量の多い右半分の領域に分布し，これらの弥生土器の産地は島根県内の別の場所であることを示している。図10，11のCa因子，Fe因子でもこの傾向は認められる。しかし，図９のK因子には差異はない。K因子は大きな地域差を表す因子で，通常，島根県内のものには大差は認められない。布田遺跡の弥生土器のうち，№107のみはK，Rb因子に異常が認められ，外部からの搬入品である可能性をもつ。

以上にみてきたように，弥生土器も殆どが島根県内産のものであり，夫敷遺跡，石台遺跡の弥生土器に対し，布田遺跡の弥生土器は県内の別の場所で作られた弥生土器があると推定される。しかし，夫敷遺跡と石台遺跡の弥生土器はほぼ，同じ地域内で作られた可能性をもつ。

窯跡の残っていない土師器，弥生土器については，まだまだ不確定なことが多く，これ以上に積極的に言うことは危険である。今後の分析データの集積を待つ外ない。

図14には夫敷遺跡から出土した古式須恵器のRb－Sr分布図を示す。№２，67，68の３点は大阪陶邑産の可能性をもつが，№１には大阪陶邑産の可能性はない。

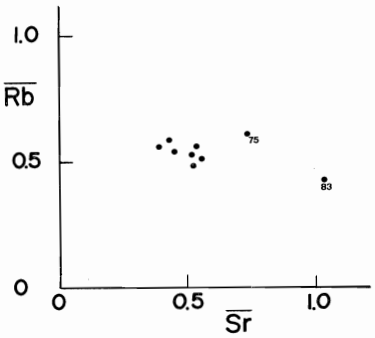


図8　夫敷遺跡出土弥生土器の
Rb-Sr分布図

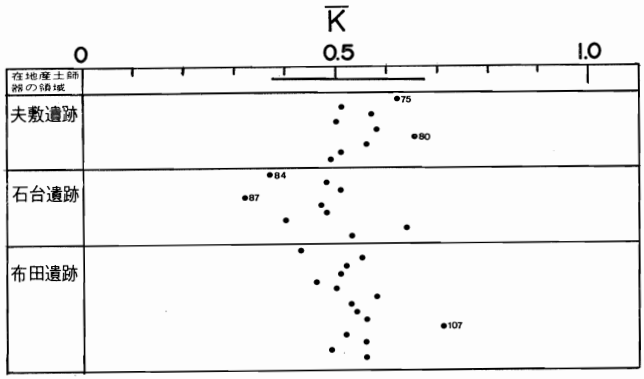


図9　弥生土器のK量

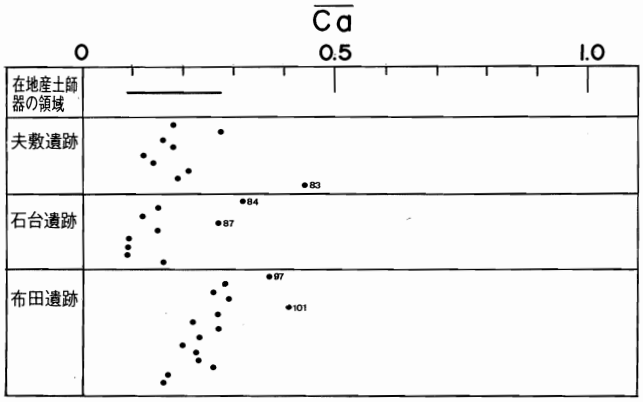


図10　弥生土器のCa量

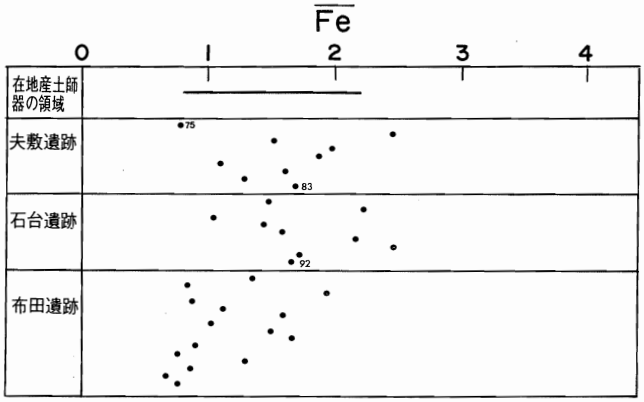


図11　弥生土器のFe量

図15には大坪遺跡出土須恵器のRb－Sr分布図を示す。これらも古式須恵器であるが，大阪陶邑産の可能性をもつものはNo.96のみで，No.93，94，95にはその可能性はない。

そこで，より定量的な産地推定をするため，地元，高畑群と大阪陶邑群間の2群間判別分析を試みた。図2には両群の重心からのマハラノビスの汎距離の二乗をK，Ca，Rb，Srの4因子を使って計算した結果を示してある。経験的帰属条件は$D^2 \leqq 10$であるから，この条件から大阪陶邑群に帰属してもよいとされるものはNo.2，67，68とNo.96の4点のみである。また，地元産として許容されるものは大坪遺跡のNo.93，94，95の3点のみであり，No.1はどちらにも帰属しない。No.1の産地は不明である。

なお，胎土からみた場合，No.1，93，94，95は新羅の礪渓堤窯産，No.2，68は新羅の内谷里窯跡群や望星里窯跡群産の可能性もあるので，これらについては再度，考古学的な吟味が必要である。

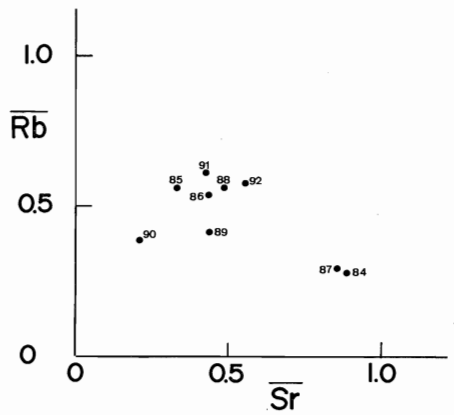


図12　石台遺跡出土弥生土器の Rb-Sr分布図

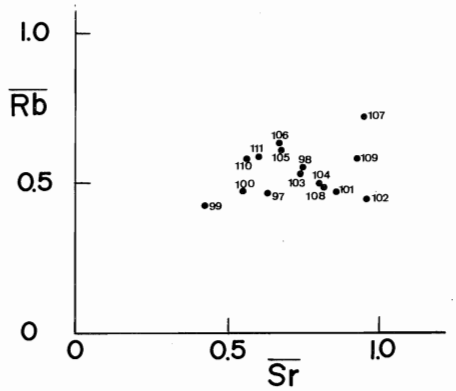


図13　布田遺跡出土弥生土器の Rb-Sr分布図

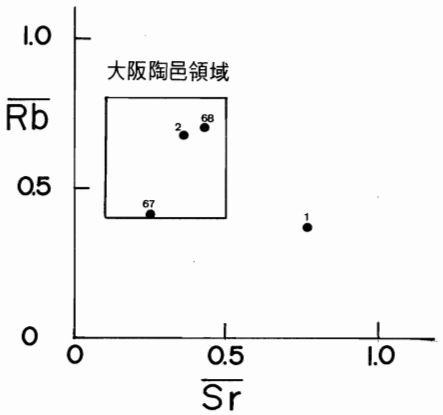


図14　夫敷遺跡出土須恵器の Rb-Sr分布図

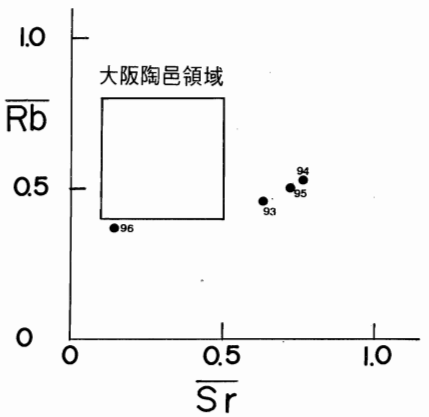


図15　大坪遺跡出土の須恵器の Rb-Sr分布図

表1　分析結果

	図版番号	実測番号	器種	K	Ca	Fe	Rb	Sr
夫敷	35－2	Ⅰ－67	須恵器	0.376	0.037	286	0.412	0.250
〃		68	〃	0.609	0.127	1.89	0.702	0.431
〃	34－2	Ⅰ－1	〃	0.406	0.277	2.50	0.366	0.777
〃	34－1	2	〃	0.617	0.112	2.61	0.675	0.358
〃	34－3	5	韓式系土器	0.503	0.178	1.70	0.529	0.656
〃	32－3	6	〃	0.467	0.189	1.13	0.498	0.639
〃	32－2	7	〃	0.468	0.084	1.60	0.453	0.382
〃	33－3	8	〃	0.447	0.096	1.40	0.414	0.393
〃	32－1	9	〃	0.560	0.113	1.56	0.435	0.492
〃	35－13	10	〃	0.496	0.081	1.69	0.452	0.335
〃	33－7	11	〃	0.603	0.124	1.84	0.560	0.362
〃	32－6	12	〃	0.590	0.118	1.25	0.631	0.535
〃	33－8	13	〃	0.511	0.134	1.83	0.521	0.535
〃	33－10	14	〃	0.577	0.086	1.79	0.645	0.405
〃	33－2	15	〃	0.472	0.131	3.40	0.419	0.401
〃	32－4	16	〃	0.442	0.093	1.55	0.499	0.403
〃		17	〃	0.469	0.135	1.25	0.465	0.883
〃	23－1	18	在地型土器	0.551	0.224	1.35	0.592	0.617
〃	23－7	19	〃	0.487	0.267	1.07	0.447	0.916
〃	23－5	20	〃	0.462	0.187	0.963	0.460	0.666
〃	23－3	21	〃	0.484	0.139	0.792	0.541	0.567
〃	24－13	22	〃	0.454	0.270	0.787	0.485	0.854
〃	25－6	23	〃	0.462	0.104	1.64	0.408	0.409
〃	24－6	24	〃	0.476	0.274	1.10	0.405	0.666
〃	25－9	25	〃	0.570	0.153	0.920	0.550	0.542
〃	24－15	26	〃	0.516	0.145	1.48	0.541	0.477
〃	30－18	27	〃	0.522	0.218	1.30	0.620	0.718
〃	30－24	28	〃	0.452	0.136	2.75	0.529	0.329
〃	30－17	29	〃	0.413	0.113	4.11	0.332	0.378
〃	30－12	30	〃	0.516	0.245	1.42	0.621	1.00
〃	30－14	31	〃	0.551	0.126	1.98	0.557	0.468
〃	30－13	32	〃	0.681	0.163	1.29	0.576	0.631
〃	26－7	33	〃	0.498	0.105	3.83	0.408	0.364
〃	27－1	34	〃	0.507	0.089	1.57	0.456	0.365
〃	26－9	35	〃	0.492	0.121	2.83	0.423	0.440
〃	27－5	36	〃	0.540	0.169	1.31	0.516	0.749
〃	26－17	37	〃	0.395	0.221	2.66	0.381	0.657
〃		38	〃	0.454	0.237	2.06	0.460	0.878
〃		39	〃	0.556	0.206	1.35	0.559	0.853
〃		40	〃	0.554	0.158	1.29	0.503	0.666
〃		41	〃	0.534	0.263	2.03	0.579	0.824
〃		42	〃	0.611	0.158	1.86	0.587	0.497
〃	34－12	43	韓式系土器	0.564	0.163	1.02	0.486	0.839
〃		44	〃	0.515	0.233	0.812	0.466	1.13
〃	34－10	45	〃	0.505	0.250	0.838	0.441	1.02
〃		46	〃	0.524	0.128	1.97	0.483	0.457
〃		47	〃	0.540	0.118	2.13	0.404	0.429
〃	22－9	48	畿内系	0,551	0.141	3.97	0.437	0.291
〃	18－6	49	在地系	0.431	0.188	1.13	0.459	0.616
〃	17－14	50	〃	0.491	0.150	1.09	0.532	0.543
〃	18－2	51	〃	0.371	0.593	1.38	0.370	1.77
〃	17－3	52	〃	0.552	0.158	1.17	0.586	0.565
〃	18－7	53	〃	0.495	0.172	1.19	0.558	0.618
〃		54	〃	0.549	0.194	1.34	0.581	0.682
〃	20－11	55	〃	0.544	0.215	1.16	0.557	0.811
〃	20－8	56	〃	0.518	0.192	1.16	0.578	0.616
〃	22－14	57	畿内系	0.562	0.168	1.14	0.610	0.629
〃	22－8	58	〃	0.537	0.198	1.00	0.523	0.752
〃	22－10	59	〃	0.587	0.141	1.35	0.614	0.572

	図版番号	実測番号	器　種	K	Ca	Fe	Rb	Sr
夫　敷	19－9	60	在地系	0.586	0.157	2.04	0.540	0.496
〃	21－12	61	〃	0.586	0.150	1.75	0.543	0.580
〃	19－1	62		0.530	0.122	1.19	0.545	0.517
〃	22－25	63	搬入(?)	0.384	0.254	2.05	0.336	0.790
〃	22－3	64	畿内系	0.450	0.152	1.17	0.501	0.556
〃		65	在地系	0.479	0.224	0.963	0.478	0.740
〃	22－7	66	畿内系	0.528	0.144	1.11	0.563	0.559
〃		Ⅰ－75	弥生土器	0.615	0.179	0.783	0.606	0.726
〃	11－1	76	〃	0.505	0.273	2.45	0.510	0.562
〃		77	〃	0.569	0.162	1.52	0.560	0.543
〃		78	〃	0.503	0.176	1.98	0.537	0.454
〃	9－8	79	〃	0.575	0.120	1.87	0.555	0.391
〃	9－12	80	〃	0.655	0.144	1.10	0.592	0.434
〃		81	〃	0.560	0.209	1.61	0.531	0.516
〃	9－13	82	〃	0.513	0.194	1.28	0.483	0.522
〃	9－6	83	〃	0.489	0.435	1.69	0.425	1.03
石　台	27－9	Ⅱ－84	〃	0.367	0.318	1.48	0.283	0.894
〃	27－8	85	〃	0.480	0.147	2.22	0.559	0.331
〃	27－1	86	〃	0.507	0.120	1.04	0.537	0.440
〃	27－10	Ⅱ－87	〃	0.317	0.271	1.44	0.289	0.859
〃		88	〃	0.474	0.146	1.59	0.561	0.487
〃		89	〃	0.477	0.095	2.16	0.406	0.438
〃		90	〃	0.396	0.089	2.46	0.390	0.210
〃		91	〃	0.643	0.087	1.72	0.608	0.430
〃		92	〃	0.530	0.163	1.66	0.576	0.556
大　坪	7－1	Ⅲ－93	須恵器	0.493	0.293	2.17	0.456	0.633
〃	2	94	〃	0.454	0.299	1.61	0.528	0.763
〃	3	95	〃	0.441	0.309	1.59	0.502	0.722
〃	8－2	96	〃	0.279	0.026	2.61	0.365	0.143
布　田		Ⅳ－97	弥生土器	0.432	0.370	1.35	0.472	0.630
〃		98	〃	0.551	0.278	0.826	0.550	0.746
〃		99	〃	0.518	0.261	1.93	0.427	0.432
〃		100	〃	0.506	0.294	0.876	0.469	0.547
〃		101	〃	0.461	0.408	1.12	0.469	0.860
〃		102	〃	0.495	0.267	1.59	0.448	0.957
〃		103	〃	0.582	0.218	1.02	0.540	0.743
〃		104	〃	0.531	0.265	1.50	0.501	0.810
〃		105	〃	0.538	0.233	1.66	0.608	0.677
〃		106	〃	0.556	0.195	0.900	0.625	0.674
〃		107	〃	0.706	0.225	0.761	0.720	0.953
〃		108	〃	0.516	0.228	1.30	0.494	0.805
〃		109	〃	0.564	0.255	0.857	0.583	0.934
〃		110	〃	0.488	0.167	0.665	0.577	0.559
〃		111	〃	0.560	0.164	0.760	0.590	0.598

表2　古式須恵器の産地推定

遺　跡　名	試　料　番　号	大阪陶邑群からのマハラノビスの汎距離	高畑群からのハマラノビスの汎距離
夫敷遺跡	Ⅰ－67	5.5	25
〃	Ⅰ－68	9.4	10
〃	Ⅰ－1	90	12
〃	Ⅰ－2	8.4	10
大坪遺跡	Ⅲ－93	35	1.0
〃	Ⅲ－94	62	3.9
〃	Ⅲ－95	55	2.8
〃	Ⅲ－96	7.8	52

付編２　夫敷遺跡出土銅鏃の科学的調査

東京国立文化財研究所
保存科学部　　平　尾　良　光

1）はじめに

島根県教育委員会からの要請で島根県八束郡東出雲町夫敷遺跡から出土した銅鏃の科学的調査を行った。蛍光Ｘ線分析法で試料の材料組成に関する情報を得，[1] 鉛同位体比から材料の産地を推定しようとした。[2]

2）分　析　法

蛍光Ｘ線分析はフィリプス社製波長分散型蛍光Ｘ線分析装置PW1404LSで行なった。

機器の使用条件はスカンジウム管球を用い，60kV，50mAで一次Ｘ線を発生させ，二次Ｘ線を空気圧下でシンチレーションカウンタとガスフローカウンタの併用で測定した。測定範囲角度10－50度を25分かけて走査した。なお装置の制約上測定される部分は直径約１㎝の円内に限られる。

鉛同位体比の測定は鉛を化学分離した後，VG社製全自動表面電離型質量分析計Sector-Jで行なった。

採取した試料の錆約３mgを硝酸0.5mℓに溶解し，白金電極を用いて電気分解し，鉛を精製した。鉛同位体比測定のため，レニウムのフィラメント上に約50ngの鉛をリン酸－シリカゲル法で固着し，フィラメント電流～2.6Aとして，3×10^{-11}Aとなるよう調整し，鉛同位体比を測定した。なお機器は標準NBS－SRM－981で規格化した。

3）蛍光Ｘ線分析の結果

試料の測定場所は銅鏃つけね付近で，錆がかなり落とされた部分を選んだ。それ故，測定された化学組織は，かなり本体の組成を反映していると推定できる。得られたスペクトルを図１に示す。この図から判別できることは，銅が殆どで，少量のスズが含まれている。痕跡量のアンチモン，銀，鉛，ヒ素が見えている。スズと鉛が含まれていることから青銅である。アンチモンや銀，ヒ素が含まれていることからすると，弥生時代の試料によくある青銅と共通している特徴である。[3]

4）鉛同位体比測定の結果

測定された鉛同位体比を表１に示す。

この値を今までに測定された値と比較してみると，図２となる。[4]

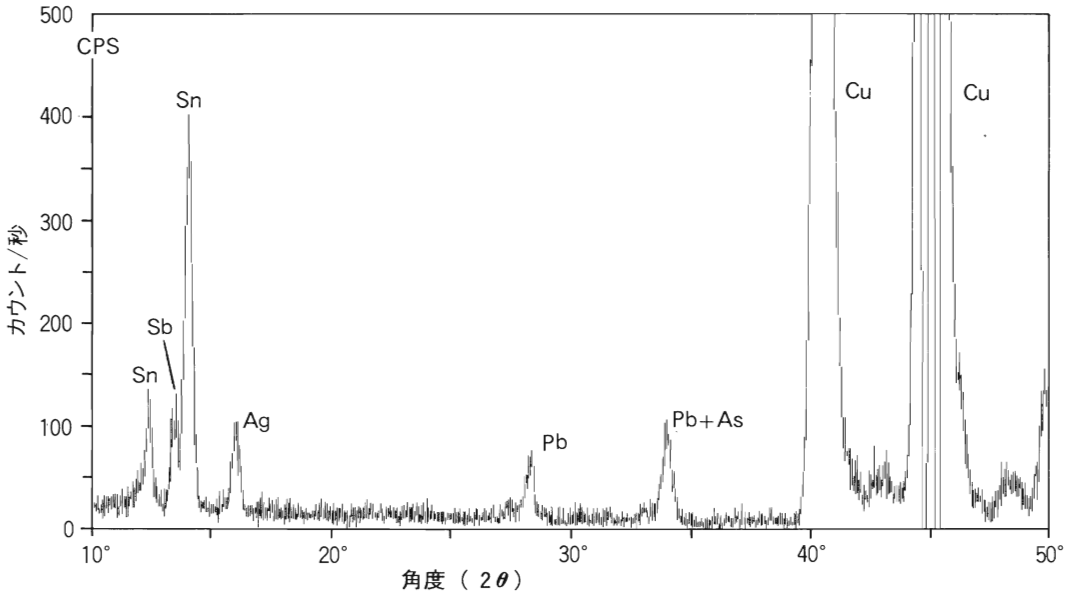


図１　銅鏃の蛍光X線スペクトル

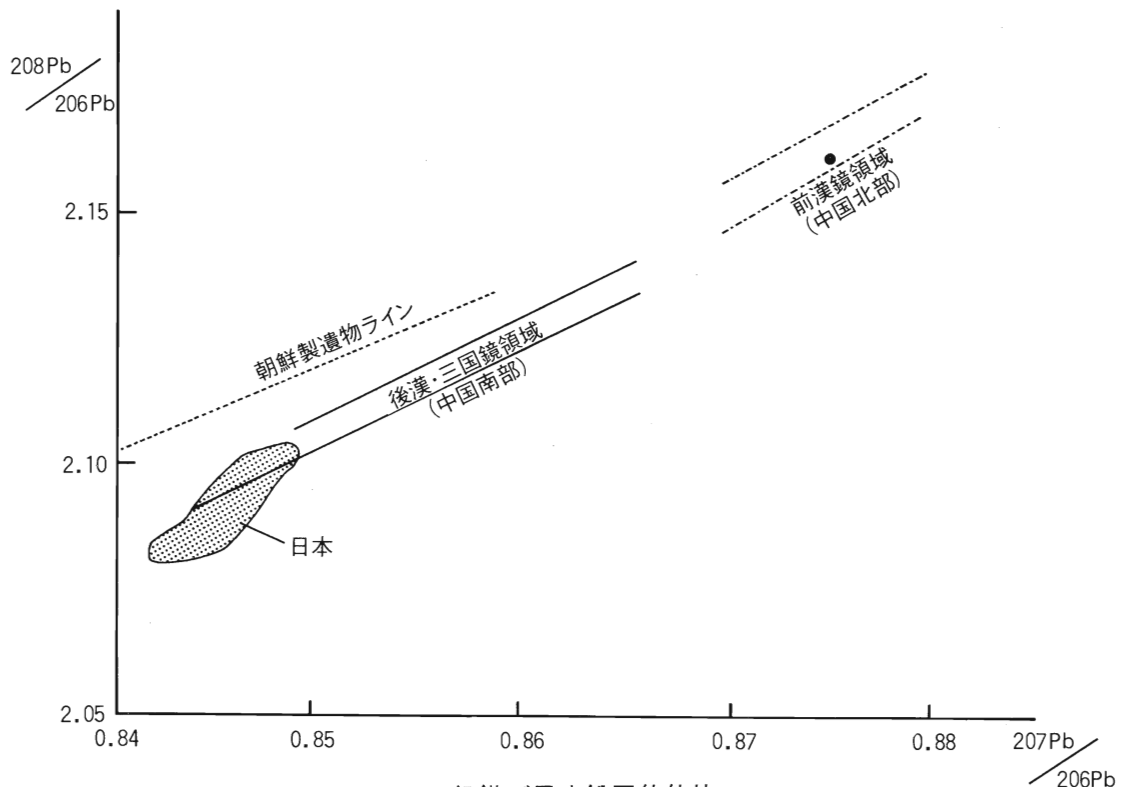


図２　銅鏃が示す鉛同位体比

表１　夫敷遺跡出土銅鏃の鉛同位体比

$^{206}pb/^{204}pb$	$^{207}pb/^{206}pb$	$^{208}pb/^{206}pb$
17.783	0.8745	2.1609
±0.004	±0.0001	±0.0002

図２から判断すると，夫敷遺跡出土銅鏃は前漢鏡が示す領域に属している。また銅鐸で言えば，中期の銅鐸が示す範囲である。(5)

結論として，蛍光Ｘ線分析および鉛同位体比の結果からすると，夫敷遺跡から出土した銅鏃の材料は，弥生時代に日本へ輸入された青銅と同様な材料であると推定できる。

5)　引用文献

(1)　大沢真澄，考古資料の理学的分析と年代測定法，「考古資料の見方」，編集甘粕健，柏書房，東京　1983

(2)　馬淵久夫，青銅文化の流れを追って，「続考古学のための化学10章」，編集馬淵，富永，東京大学出版会，東京　1986

(3)　平尾良光，三浦定俊，東京国立博物館保管　国宝　竜首水瓶の科学的調査，Museum №457（1989）

(4)　H.Mabuchi，Y.Hirao，M.Nishida，Laed isotope approach to the understanding of early Japanese bronze culture，Archaeometry **27**，131－159（1985）.

(5)　馬淵久夫，平尾良光，鉛同位体比から見た銅鐸の原料，考古学雑誌，**68**，42－62（1982）

夫敷No.1　土器観察表

挿図番号	出土地点	器種	胎土	焼成	色調	備考
9－1	5区5層	弥生・壺形土器	砂粒少なく密	良好	黄白色	
－2	〃 砂層（5層）	〃	3㎜以下の砂粒を多く含む	〃	灰褐～黒褐色	
－3	〃 4層	〃	3㎜以下の砂粒を多く含む	〃	黄白色	
－4	〃 〃	弥生・甕形土器	〃	〃	黄褐色	
－5	〃 〃	〃	〃	〃	灰褐色	
－6	〃 砂層（5層）	〃	2㎜以下の砂粒を非常に多く含む	〃	黒～灰褐色	
－7	〃 5層	〃	粗い砂粒を含み密	〃	黄灰白色	
－8	〃 砂層（5層）	〃	2㎜以下の砂粒を多く含む	〃	黄白～灰黒色	外面の一部にススが付着
－9	〃 砂層	〃	1㎜以下の均一な砂粒を多く含む	〃	灰黄褐色	外面にスス付着
－10	5区4層	〃	3㎜以下の砂粒を多く含む	〃	黄白～白褐色	
－11	5区砂層（5層）	〃	1㎜以下の均一な砂粒を多く含む	〃	黄褐～灰黒褐色	外面スス付着
－12	〃 5層	〃	2㎜以下の砂粒を多く含む	〃	灰褐～白黄褐色	〃
－13	〃 砂層（5層）	〃	3㎜以下の砂粒を非常に多く含む	〃	黄白～白灰褐色	
－14	〃 4層	弥生・高坏形土器脚部	3㎜以下の砂粒を多く含む	〃	黄白～灰色	
－15	〃	〃	砂粒を多く含むが密	〃	黄白色	外面丹塗
－16	〃 5層	〃	3㎜以下の砂粒を非常に多く含む	〃	灰～黄白色	端部に炭化物付着
－17	〃 4層	弥生・底部	2㎜以下の砂粒を多く含む	〃	白灰色	
－18	〃 砂層（5層）	〃	1㎜以下の均一な砂粒を多く含む	〃	白褐～黒褐色	
－19	〃 〃	〃	2㎜以下の均一な砂粒を多く含む	〃	灰黒～茶褐色	2次的な焼成をうけている
－20	〃 4層	〃	2㎜以下の砂粒を多く含む	〃	灰～灰褐色	
－21	〃 〃	〃	1～3㎜大の砂粒を多く含む	〃	暗灰褐色	
－22	〃 砂層（5層）	〃	2㎜以下の砂粒を多く含む	〃	灰～黄白色	外面に黒斑
－23	〃 4層	〃	1～3㎜大の砂粒を多く含む	〃	赤褐～白茶色	内外面とも磨滅し調整不明
－24	〃 〃	弥生・脚部	2㎜以下の砂粒を多く含む	〃	黒灰～黄褐色	
11－1	〃 SD－03	弥生・甕形土器	3㎜以下の砂粒を非常に多く含む	〃	灰黄～黄褐色	
－2	〃 〃	須恵・坏	微砂粒を多く含む	〃	青灰色	
－3	〃 〃	〃 蓋	1㎜程度の砂粒を多く含む	〃	〃	
15－1	6－A区・SK－01	土師・小形丸底壺	砂粒を含み密	〃	黒色（一部暗灰色）	
－2	〃 〃	〃	1～3㎜の砂粒を多く含む	〃	暗灰色	外面の一部にスス付着
－3	〃 〃	〃	〃	〃	灰白色	外面にスス付着
－4	〃 〃	〃	1㎜程度の砂粒を多く含む	〃	外:赤褐色 内:白赤褐色	
－5	〃 〃	土師・甕形土器	砂粒を多く含む	〃	肌色	外面下半部にスス付着
－6	〃 〃	〃	砂粒を多く含み密	〃	黄灰白色（一部黒色）	

挿図番号	出土地点	器種	胎土	焼成	色調	備考
16－ 1	6－A区	土師・壷形土器	砂粒を多く含み密	良好	明黄灰褐色	
－ 2	〃区	〃	細かい砂粒を含み密	〃	淡灰褐色	
－ 3	6－A区・灰色層（15層）	〃	砂粒を含み密	〃	黄灰白色	
－ 4	6－A区	〃	砂粒を多く含み密	〃	明灰色～白灰白色	
－ 5	〃	〃	〃	〃	明灰褐～白黒色	
－ 6	6－B区	〃	〃	〃	赤灰色	
－ 7	6－A区	〃	〃	〃	明灰褐色	
－ 8	〃	土師・甕形土器	〃	〃	黄灰白色	
－ 9	〃	〃	細砂粒を多く含み密	〃	明灰褐色	
－10	6－A区・灰色砂層	〃	砂粒を含み密	〃	暗灰褐色	口縁下部～頸部に炭化物付着
－11	6－A区	〃	砂粒を多く含み密	やや不良	桃灰白色	外面風化
17－ 1	〃	〃	2㎜以下の砂粒を多く含む	良好	白褐～黒褐色	外面スス付着
－ 2	〃	〃	砂粒を多く含み密	〃	灰褐色	
－ 3	〃	〃	1㎜程度の砂粒を多く含む	〃	黄土色	外面胴部以下にスス付着
－ 4	〃	〃	砂粒を多く含む	〃	〃	外面にスス付着
－ 5	6－A区・灰色砂層	〃	〃	〃	外:黒色 内:黄土色	内面頸部以下黒色
－ 6	〃 15層	〃	砂粒含み密	〃	淡灰褐色	
－ 7	6－A区	〃	砂粒を多く含む	〃	黄土色	外面の一部にスス付着
－ 8	6－A区・灰色砂層（15層）	〃	2㎜以下の砂粒を多く含む	〃	灰白～灰白褐色	
－ 9	〃 15層	〃	〃	〃	灰～白黄灰色	外面スス付着
－10	〃 ・灰色砂層	〃	砂粒を多く含む	〃	黄土色	
－11	6－A区	〃	砂粒を多く含み密	〃	黄灰白色	
－12	〃	〃	2㎜以下の砂粒を多く含む	〃	白灰～灰白褐色	
－13	〃	〃	1㎜以下の砂粒を多く含む	〃	黄白～黒色	外面スス付着
－14	6－A区・灰色砂層	〃	砂粒を多く含む	〃	黄土色	外面に多量のスス付着
－15	6－A区	〃	砂粒を含み密	〃	名黄灰褐色	
－16	〃	〃	2㎜以下の砂粒を多く含む	〃	黄灰白色	
－17	6－A区・灰褐色砂層	〃	微砂粒を多く含む	〃	黄土色	外面にスス付着
－18	〃 灰色砂層（15層）	〃	〃	〃	外:赤褐色 内:淡赤褐色	口縁部にスス付着
－19	6－A区	〃	砂粒を多く含む	〃	外:黄土色 内:淡黄土色	外面にスス付着
－20	6－A区・灰色砂層	〃	微砂粒を含む	〃	白黄色	
18－ 1	6－A区15層	〃	砂粒を多量に含む	〃	黄土色	外面口縁部、胴部、内面胴部黒色
－ 2	〃	〃	〃	〃	〃	外面にスス付着
－ 3	6－A区	〃	〃	〃	黄褐色	

挿図番号	出土地点	器種	胎土	焼成	色調	備考
18－ 4	6－A区	土師・壷形土器	砂粒を多量に含む	良好	黄褐色	
－ 5	〃	〃	1㎜以下の砂粒を多く含む	〃	黄白～灰白色	
－ 6	6－B区	〃	〃	〃	外:暗茶褐色 内:黄土～暗茶褐色	外面にススが付着
－ 7	6－A区	〃	〃	〃	外:黄土色 外:暗黄土色	外面に炭化物付着
－ 8	6－A区・灰色砂層	〃	〃	〃	黄土色	
－ 9	6－A区	〃	砂粒を多く含む	〃	〃	
－10	6－A区・15層	〃	砂粒を非常に多く含む	〃	〃	
－11	〃	〃	2㎜以下の砂粒を多く含む	〃	黄灰褐色	
19－ 1	6－A区・灰色砂層	土師・高坏形土器	砂粒多く含み密	〃	桃白～灰白色	
－ 2	6－A区	〃	細かい砂粒多く含み密	〃	外:明灰褐色 内:暗灰色	
－ 3	6－A区・灰色砂層	〃	〃	〃	赤黄白色	
－ 4	6－B区・明灰粘質土層	〃	〃	〃	桃白色 （一部暗灰色）	
－ 5	6－A区	〃	砂粒を多く含み密	〃	明灰褐色	
－ 6	6－B区・砂礫層	〃	砂粒を含み密	〃	外:暗灰色 内:黄桃色	
－ 7	6－A区15層	〃	砂粒を多く含み密	不良	桃白色 （一部暗灰色）	全体に風化し、調整不明
－ 8	6－B区・褐色粘土層	〃	〃	良好	赤褐色	内面風化のため調整不明
－ 9	6－A区・灰色粘土層	〃	細かい砂粒を多く含み密	やや不良	桃白色	
20－ 1	〃 ・砂層	土師・器台形土器	砂粒を多く含み密	良好	明灰褐色	
－ 2	6－A区	〃	〃	〃	明黄灰褐色	
－ 3	6－A区・灰色砂層	〃	砂粒を含み密	〃	明灰褐色	
－ 4	〃 ・15層，灰色砂層	〃	砂粒を多く含み密	〃	〃	
－ 5	6区・SK－02	〃	〃	〃	黄褐色	
－ 6	〃 SK－02灰色砂層	〃	〃	〃	灰白色	
－ 7	6－A区・灰色砂層	〃	砂粒を含み密	〃	灰褐色	
－ 8	〃 ・灰色砂層（15層）	〃	細かい砂粒を含み密	〃	〃	
－ 9	〃 〃	〃	細かい砂粒を多く含み密	〃	明赤灰色	
－10	6－A区	〃	砂粒を多く含み密	〃	灰褐色	
－11	6－A区15層	〃	〃	〃	黄灰白色 （一部暗灰色）	
－12	6－A区	〃	〃	〃	黄灰白色	
21－ 1	〃	土師・低脚坏形土器	〃	〃	灰黄褐色	
－ 2	6－A区・灰色砂層	〃	細かい砂粒を多く含む	〃	黄灰褐色	
－ 3	6－B区・灰色粘質土	〃	砂粒を含み密	〃	黄白色	表面風化
－ 4	6－B区	〃	砂粒を多く含み密	〃	桃灰白色	
－ 5	6－A区・灰色砂層（15層）	〃	〃	〃	明黄褐色	表面風化

挿図番号	出土地点	器種	胎土	焼成	色調	備考
21－ 6	6－A区	土師・低脚坏形土器	砂粒を多く含み密	良好	黄白色（外面一部暗灰色）	
－ 7	6－A区	〃	〃	〃	黒灰色（一部黄灰白色）	
－ 8	6－B区15層	〃	〃	〃	桃灰白色	
－ 9	6－A区	〃	砂粒を含み密	〃	灰褐色（内面一部黒色）	
－10	6－A区・灰色砂層（15層）	〃	砂粒を多く含み密	〃	外:暗灰色 内:灰褐色	
－11	〃 15層	土師・坏形土器	〃	〃	灰色	
－12	〃 灰色砂層	〃	〃	〃	明茶灰色	
－13	6－A区	土師・低脚坏脚部	〃	〃	明黄灰褐色	
－14	〃	〃	〃	〃	明灰褐色	
－15	6－A区・黒灰色砂質土	〃	細砂粒を多く含み密	〃	暗灰～明黄灰色	
－16	6－A区	〃	砂粒多く含み密	〃	赤褐～黄灰褐色	
－17	6－A区15層	土師・壷形土器	細砂粒を多く含み密	〃	明灰褐色	外面胴部下半に炭化物付着
－18	6－A区・灰色砂層	〃	砂粒を含み密	〃	外:暗灰色 内:明灰色	
－19	6－A区	土師・小形丸底壷	〃	〃	黄白色～黄桃白色（一部灰色）	表面部分的に風化
－20	〃	〃	1㎜程度の砂粒を含む	〃	外:暗茶褐色 内:茶褐色	内外面とも風化著しい
22－ 1	〃	土師・器台形土器	砂粒を含み密	〃	明灰褐色	
－ 2	6－A区	〃 脚部	砂粒多く含み密	〃	黄桃白色	3方向に透孔あり
－ 3	6－A区・灰色砂層	〃 〃	砂粒を含み密	〃	外:橙灰色 内:明茶灰色	〃
－ 4	〃 ・灰色粘土下層	〃 〃	砂粒を多く含み密	〃	黄白色	透孔あり
－ 5	6－A区	土師・甕形土器	2㎜以下の砂粒を多く含む	〃	黄白～白褐色	
－ 6	6－B区・灰色粘質土層	〃	1㎜以下の砂粒を多く含む	〃	白黄褐色	
－ 7	6－A区・灰色砂層15層	土師・高坏形土器脚部	細砂粒を多く含み密	〃	暗灰～灰色	
－ 8	6－A区	〃	砂粒少なく密	〃	暗灰褐色	
－ 9	6－A区・灰色砂層	土師・鉢形土器	砂粒含まず密	〃	桃白色～黄灰白色	
－10	〃 〃	〃	砂粒多く含み密	〃	明茶灰白色（一部暗灰色）	
－11	〃 〃（15層）	土師・器台形土器	砂粒多く含み密	〃	灰白褐色（一部暗灰色）	
－12	〃 15層	土師・壷形土器	砂粒含み密	〃	外:明黄褐色 内:灰色	
－13	〃 〃	〃	砂粒少なく密	〃	外:黒灰色 内:暗灰色	
－14	6－A区	〃	砂粒を含み密	〃	黄白色（外面部灰褐色）	
－15	〃	〃	砂粒を多く含み密	〃	灰白褐色	
－16	〃	〃	〃	〃	暗灰色	
－17	6－A区・灰色砂層	〃	砂粒少なく密	〃	外:暗灰色 内:明灰色	
－18	〃 15層	〃	〃	〃	黒灰色	
－19	〃 〃	土師・底部	〃	〃	灰色	外面に赤色顔料塗布

挿図番号	出土地点	器種	胎土	焼成	色調	備考
22−20	6−A区	土師・高坏または器台	粗い砂粒を含み密	良好	明灰白色	
−21	〃	土師・甕形土器	砂粒多く含み密	〃	暗灰色	外面にタタキ有
−22	6−A区・灰色砂層	〃	粗い砂粒を含み密	〃	赤灰色	〃
−23	〃 15層	〃	砂粒少なく密	〃	明灰褐色（外面一部黒色）	〃
−24	〃 〃	〃	〃	〃	明灰褐色	〃
−25	〃 〃	〃	〃	〃	外:赤茶色 内:暗灰色	〃
23− 1	6−A区	〃	1㎜前後の均質な砂粒を火非常に多く含む	〃	白灰黄〜灰黄褐色	
− 2	〃	〃	3㎜以下の砂粒を非常に多く含む	〃	灰黄色	
− 3	6−A・B区	〃	1㎜以下の砂粒を多く含む	〃	白灰〜白灰褐色	外面は炭化
− 4	6−A区	〃	3㎜以下の砂粒を多く含む	〃	黄灰褐色	
− 5	〃	〃	2㎜以下の砂粒を非常に多く含み粗	〃	灰黄色	外面炭化
− 6	〃	〃	礫，3㎜以下の砂粒を多量に含む	〃	黄白色	
− 7	〃	〃	2㎜以下の砂粒を非常に多く含み粗	〃	黄灰色	
− 8	〃	〃	2㎜以下の砂粒を非常に多く含む	〃	白黄色	外面やや炭化
− 9	〃	〃	〃	〃	灰黄褐色	
−10	6−A区・間砂礫層	〃	砂粒を多く含む	〃	黄土色	
−11	6−A区・灰色粘土下層	〃	3㎜以下の砂粒を非常に多く含む	〃	黄白〜灰褐色	
−12	6−A区	〃	〃	〃	黄白褐色	外面肩部以下は炭化
−13	〃	〃	2㎜以下の砂粒を非常に多く含む	〃	黄灰褐色	
−14	〃	〃	3㎜以下の砂粒を非常に多く含む	〃	黄白灰〜灰褐色	外面最大径を中心に炭化物付着
−15	〃	〃	1㎜以下の砂粒を非常に多く含む	〃	白褐色	
24− 1	6−A区	土師・甕形土器	2㎜以下の砂粒を非常に多く含む	〃	黄白色	
− 2	〃	〃	3㎜以下の砂粒を非常に多く含む	〃	黄白褐色（断面は暗灰色）	外面は炭化
− 3	6−A区・6−B区	〃	2㎜以下の砂粒を非常に多く含む	〃	灰〜黄灰色	〃
− 4	6−A区	〃	砂粒を多く含む	〃	黄土色	外面は部分的に黒変
− 5	6−B区	〃	1㎜以下の砂粒を非常に多く含む	〃	暗灰色	外面は炭化
− 6	6−A区	〃	3㎜以下の砂粒を非常に多く含む	〃	黄褐色	
− 7	6−A区・中層	〃	〃	〃	白灰褐〜灰褐色	
− 8	6−A区	〃	3㎜以下の砂粒を多く含む	〃	黄灰色	内面は炭化
− 9	6−B区5層	〃	2㎜以下の砂粒を非常に多く含む	〃	黄白色〜黄褐色	外面は炭化
−10	6−A区	〃	〃	〃	灰褐色	
−11	6−A・6−B区	〃	1㎜以下の砂粒を多く含む	〃	白灰褐色	
−12	6−A区	〃	3㎜以下の砂粒を非常に多く含む	〃	黄白〜黄褐色	
−13	〃	〃	小礫をわずか1㎜以下の砂粒を多く含む	〃	灰〜灰褐色	外面一部黒斑

挿図番号	出土地点	器種	胎土	焼成	色調	備考
24－14	6－A区	土師・甕形土器	3㎜以下の砂粒を非常に多く含む	良好	赤褐色～黄白色	
－15	〃	〃	3㎜以下の砂粒を多く含む	〃	明黄白色	外面は炭化
－16	〃	〃	3㎜以下の砂粒を非常に多く含む	〃	黄白～白褐色	底部内面の一部・脚部外面中央付近に炭化物付着
25－ 1	6－B	〃	2㎜以下の砂粒を多く含む	〃	黄白～灰褐色	
－ 2	6－A区	〃	2㎜以下の砂粒を非常に多く含む	〃	黄白～灰色	
－ 3	〃	〃	3㎜以下の砂粒を非常に多く含む	〃	白～灰褐色	
－ 4	6－A・6－B区	〃	1㎜以下の砂粒を非常に多く含む	〃	黄灰色	外面炭化
－ 5	6－B区	〃	2㎜以下の砂粒を非常に多く含む	〃	灰～白色	やや磨滅
－ 6	6－A区	〃	3㎜以下の砂粒を多く含む	〃	黄白色	
－ 7	〃	〃	㎜以下の砂粒・小礫を多く含む	〃	黄白～赤紫色	
－ 8	〃	〃	2㎜以下の砂粒を多く含む	〃	明黄褐～暗灰色	外面にスス付着
－ 9	6－B区	〃	4㎜以下の砂粒・小礫を非常に多く含む	〃	灰褐色～赤褐色	
－10	6－A区	〃	4㎜以下の砂粒を含む	〃	黄白色	外面炭化
－11	〃	〃	1㎜以下の微砂粒を多量に含む	〃	茶褐色	
－12	6－B区	〃	3㎜以下の砂粒を非常に多く含む	〃	黄白～灰色	
－13	6－A区	〃	2㎜以下の砂粒を非常に多く含む	〃	黄～黄褐色	
26－ 1	〃	土師・高坏形土器	2㎜以下の砂粒多く含む	〃	黄灰色	外面坏部，内面に朱を塗布
－ 2	〃	〃	2㎜以下の砂粒を含む	〃	白黄～灰色	全面に朱を塗布
－ 3	〃	〃	2㎜以下の砂粒を多く含む	〃	〃	〃
－ 4	〃	〃	1㎜以下の砂粒を含む	〃	白黄褐色	
－ 5	6－A・B区	〃	1㎜以下の砂粒を少量含み密	〃	明白黄～赤褐色	
－ 6	6－A区	〃	2㎜以下の砂粒を多く含む	〃		内，外面とも朱塗で，外面に2次焼成によるスス付着
－ 7	〃	〃	〃	〃	明褐色	
－ 8	〃	〃	〃	〃	明赤褐色	
－ 9	〃	〃	2㎜以下の砂粒を含む	〃	赤褐色	
－10	〃	〃	2㎜以下の砂粒を多く含む	〃	白黄～黄褐色	
－11	〃	〃	〃	〃	白黄～灰褐色	外面口縁部に黒斑
－12	〃	〃	〃	〃	明黄褐色	外面は炭化物，タール付着
－13	〃	〃	2㎜以下の砂粒をやや多く含む	〃	桃褐色	
－14	〃	〃	1㎜以下の砂粒を少量含む	〃	明赤褐色	
－15	〃	〃	1㎜以下の砂粒を多く含む	〃	黄～黄褐色	
－16	〃	〃	4㎜以下の砂粒を含む	〃	灰白～白褐色	
－17	〃	〃	2㎜以下の砂粒を含む	〃	黄褐色	
－18	〃	〃	1㎜以下の砂粒を多く含む	〃	黄白色	

挿図番号	出土地点	器種	胎土	焼成	色調	備考
27－ 1	6－A区	土師・高坏形土器	1㎜以下の砂粒を少量含む	良好	明黄灰色～赤褐色	
－ 2	〃	〃	5㎜以下の砂粒を多く含む	〃	桃褐～明褐色	外面に黒斑
－ 3	6－A・B区	〃	3㎜以下の砂粒を多く含む	〃	黄白～灰色	全面に朱を塗布，内面炭化物付着。外面は2次焼成による剝離
－ 4	6－A区	〃	〃	〃	黄白～白赤褐色	外面にスス付着
－ 5	〃	〃	2㎜以下の砂粒を多く含む	〃	黄白～灰褐色	外面に炭化物付着
－ 6	〃	〃	〃	〃	黄灰色	
－ 7	〃	〃	〃	〃	赤褐色	外面全体に鉄分付着
－ 8	〃	〃	5㎜以下の砂粒を多く含む	〃	赤褐色～黒色	炭化物付着
－ 9	〃	〃	3㎜以下の砂粒を多く含む	〃	黄白～黄褐色	
－10	〃	〃	4㎜以下の砂粒を多く含む	〃	白桃～赤褐色	全体にやや磨滅
－11	〃	〃	2㎜以下の砂粒を多く含む	〃	白黄灰～灰色	
27－12	〃	〃	4㎜以下の砂粒を多く含む	〃	黄白～茶褐色	全体に磨滅著しい
－13	〃	〃	3㎜以下の砂粒を多く含む	〃	黄灰～明褐色	
28－ 1	6－B区・砂礫層	〃	2㎜以下の砂粒を含む	〃	明白褐色	
－ 2	6－A区	〃	3㎜以下の砂粒を非常に多く含む	〃	暗灰褐色	口縁部外面に黒斑
－ 3	〃	〃	2㎜以下の砂粒を非常に多く含む	〃	灰褐色（外面一部黒色）	
－ 4	6－B区	〃	微砂粒を少量含む	〃	明黄褐～灰褐色	
－ 5	6－A区	〃	1㎜以下の砂粒を含む	〃	白褐～灰褐色	
－ 6	〃	〃	3㎜以下の砂粒を多く含む	〃	明黄褐色	
－ 7	〃	〃	1㎜以下の微砂粒を多く含む	〃	明灰黄色	
－ 8	〃	〃	4㎜以下の砂粒を多く含む	〃	灰褐～明褐色	
－ 9	〃	〃	〃	〃	黄褐色	
－10	6－B区	〃	3㎜以下の砂粒を含む	〃	黄灰～明褐色	
－11		〃	1㎜以下の砂粒を少量含む	〃	桃白色	全体に磨滅
－12	6－A区	〃	〃	〃	暗黄褐～灰色	外面が炭化し，剝離
－13	〃	〃	1㎜以下の砂粒を含む	〃	黄灰色	口縁外面に黒斑
－14	〃	〃	1㎜以下の砂粒を多く含む	〃	黄白灰色	
－15	〃	〃	5㎜以下の砂粒を非常に多く含む	〃	赤褐色	
－16	〃	〃	5㎜以下の砂粒を多く含む	〃	暗灰～灰褐色	やや磨滅
－17	〃	〃	2㎜以下の砂粒を多く含む	〃	黄灰～赤褐色	
－18	6－B区	〃	〃	〃	紫桃～赤褐色	
－19	6－A区	〃	〃	〃	白黄～赤褐色	
－20	〃	〃	3㎜以下の砂粒を非常に多く含む	〃	明褐色	
－21	〃	〃	5㎜以下の砂粒を多く含む	〃	赤褐～白褐色	

挿図番号	出土地点	器種	胎土	焼成	色調	備考
28－22	6－A区	土師・高坏形土器	2㎜以下の砂粒を多く含む	良好	白黄～明褐色	
29－1	〃	土師・高坏形土器脚部	1㎜以下の砂粒を多く含む	〃	赤黄褐色	
－2	〃	〃	〃	〃	灰～灰褐色	
－3	〃	〃	〃	〃	赤黄色	脚部に黒斑
－4	〃	〃	〃	〃	灰～灰褐色	外面全体と内部の一部朱塗り
－5	〃	〃	〃	〃	白灰～灰褐色	〃
－6	〃	〃	1㎜以下の砂粒・赤色微粒子を含む	〃	赤黄褐色	
－7	6－B区	〃	1㎜以下の砂粒を多く含む	〃	黄褐色	
－8	6－A区	〃	〃	〃	白橙～灰褐色	
－9	〃	〃	1㎜以下の砂粒を含む	〃	黄灰白色	
－10	〃	〃	1㎜以下の砂粒を多く含む	〃	黄灰～灰褐色	
－11	〃	〃	3㎜以下の砂粒を多く含む	〃	灰褐色	
－12	〃	〃	1㎜以下の砂粒を含む	〃	灰褐～黒灰褐色	
－13	〃	〃	2㎜以下の砂粒を含む	〃	白黄灰～赤黄色	
－14	6－B区	〃	1㎜以下の砂粒を非常に多く含む	〃	白黄灰色	
－15	6－A区	〃	1㎜以下の砂粒を多く含む	〃	黒灰～白灰褐色	2次焼成をうける（？）
－16	〃	〃	1㎜以下の砂粒を多く含む	〃	灰褐色	
－17	6－B区	〃	〃	〃	灰～灰褐色	
－18	6－A区	〃	2㎜以下の砂粒を多く含む	〃	明黄褐色	
29－19	〃	〃	3㎜以下の砂粒を多く含む	〃	灰褐色	
－20	6－B区	〃	2㎜以下の砂粒を多く含む	〃	赤褐色	3方向に円形透孔
－21	6－A区	〃	1㎜以下の砂粒を多く含む	〃	灰褐色	〃
－22	〃	〃	1㎜以下の砂粒を含む	〃	白灰褐色	
－23	〃	〃	1㎜以下の砂粒を多く含む	〃	黄褐～灰褐色	
30－1	〃	土師・坏形土器	細かい砂粒を少量含み密	〃	明茶灰色	
－2	〃	〃	砂粒少なく密	〃	明茶褐色	一部朱を塗布
－3	6－B区	〃	〃	〃	黄白～桃灰色	
－4	6－A区	〃	大きめの砂粒を少量含む	〃	黄橙色（外面一部黒灰色）	
－5	〃	〃	砂粒を含み密	〃	桃灰色	
－6	6－B区	〃	細かい砂粒含み密	〃	明茶褐色	
－7	6－A区	〃	砂粒多く密	〃	黄桃白色	丹塗
－8	〃	〃	砂粒少なく密	やや軟質	〃	表面が風化
－9	〃	〃	砂粒多く密	良好	淡黄灰色	
－10	6－A区・灰色粘土下層	〃	砂粒少なく密	〃	明灰褐色	

挿図番号	出土地点	器種	胎土	焼成	色調	備考
30－11	6－B	土師・坏形土器	砂粒多く密	良好	明黄灰色	
－12		〃	砂粒を含み密	〃	暗灰色 （一部淡黄灰色）	
－13	6－A区	〃	砂粒少なく密	〃	明黄白色	一部丹塗
－14	〃	〃	砂粒多く密	〃	赤黄褐色	一部風化
－15	〃	〃	砂粒含み密	〃	外面:明茶褐色 内面:黒灰色	外面:丹塗 内面:外面下部に炭化物付着
－16	〃	〃	細かい砂粒多く道	〃	外面:黒色 内面:暗灰色	
－17	〃	〃	砂粒を含み密	やや不良	灰白色～黒色	
－18	〃	土師・鉢形土器	砂粒少なく密	良好	外面:黒色 内面:暗灰色	
－19	〃	土師・坏形土器	砂粒を含み密	〃	明灰褐色	内，外面丹塗
－20	〃	〃	細かい砂粒を含み密	〃	灰褐色	
－21	6－A区・灰色粘土層（砂層）	〃	砂粒少なく密	〃	淡黄灰色	
－22	6－A区	〃	細かい砂粒を含む	〃	明桃灰褐色	
－23	〃	〃	砂粒少なく密	〃	黄灰白～桃灰白色 （一部黒色）	外面風化
－24	〃	〃	〃	〃	暗灰色～明茶褐色	
－25	〃	〃	砂粒を含み密	〃	桃白色	表面やや風化
－26	〃	土師・低脚坏形土器	細かい砂粒を含み密	〃	黄灰褐色	
－27	〃	手捏土器	細かい砂粒を含む	〃	黄桃色	一部丹塗
－28	6－B区	〃	細かい砂粒覆い	〃	明灰色 （一部黒色）	
－29	6－A区	〃	細かい砂粒を含む	〃	明茶灰色	
31－ 1	〃	土師・壷形土器	砂粒を多く含む	〃	外面:赤褐色 内面:淡赤褐色	内，外面とも一部にスス付着
－ 2	〃	〃	1㎜程度の砂粒を含む	〃	外面:赤褐色 内面:黄土色	内面に黒色の付着物あり
－ 3	6－B区	〃	3㎜以下の砂粒を少量含む	〃	淡黄褐色	
－ 4	6－A区	〃	1㎜程度の砂粒を含む	〃	外面:赤褐色 内面:淡赤褐色	
－ 5	〃	〃	1㎜以下の微砂粒を多く含む	〃	明灰褐色	外面底部にススが付着
－ 6	〃	〃	1～3㎜程度の砂粒を多く含む	〃	赤褐色	
－ 7	〃	〃	微砂粒を多量に含む	〃	外面:黒色 内面:暗茶褐色	
－ 8	〃	〃	2㎜程度の砂粒を含む	〃	外面:黒色 内面:茶褐色	
－ 9	〃	〃	砂粒を多く含む	〃	黄土色	外面にスス付着
－10	6－A区・灰色粘土層	〃	1～2㎜程度の砂粒を多く含む	〃	外面:茶黄色 内面:灰白～暗灰色	外面一部黒変
－11	6－A区	手捏土器	砂粒を多く含む	〃	外面:赤褐色 内面:白赤褐色	
－12	6－A区・黒褐色粘質土層	土師・壷形土器	1㎜程度の砂粒を含む	〃	明黄白色	
－13	6－A区	〃	1～2㎜程度の砂粒を含む	〃	暗茶灰～黒灰色	
－14	6－A区・灰色砂質土層	〃	1㎜以下の砂粒を多量に含む	〃	外面:暗茶灰色 内面:灰白色	外面スス付着
－15	6－A区	〃	1～3㎜程度の砂粒を含む	〃	茶白色	

挿図番号	出土地点	器種	胎土	焼成	色調	備考
31−16	6−A区	手捏土器	1㎜以下の微砂粒を含む	良好	灰白色	
−17	〃	〃	〃	〃	明茶白色	外面丹塗り，スス付着
32− 1	6−B区	甑形土器	3㎜以下の砂粒を多く含む	〃	白黄褐〜白褐色	全体に磨滅
− 2		〃	3㎜以下の砂粒を非常に多く含む	〃	明黄褐〜灰白色	底部から一方の把手にかけて黒斑
− 3	6−A区	〃	〃	〃	白黄灰〜茶色	
− 4	6−B区	〃	2㎜以下の砂粒を多く含む	〃	白黄〜灰色	
− 5	6−A区	〃	〃	〃	白褐色	
− 6	6−A・B区	〃	2㎜以下の砂粒を非常に多く含む	〃	灰褐〜黒褐色	
− 7	6−A区	〃	1㎜以下の砂粒を含む	〃	黄灰色	
− 8	6−A区・灰色粘土層（中層）	〃	2㎜以下の砂粒を含む	〃	灰褐色	
33− 1	6−A区	〃	2㎜以下の砂粒を多く含む	〃	〃	
− 2	〃	〃	〃	〃	赤褐色〜黄褐色	
− 3	〃	〃	3㎜以下の砂粒を多く含む	〃	明赤褐〜灰褐色	
− 4	〃	〃	〃	〃	明白褐〜灰褐色	
− 5	〃	〃	〃	〃	白黄色	
− 6	〃	〃	1㎜以下の砂粒を含む	〃	白黄〜灰褐色	
− 7	6−A区・中層	〃	2㎜以下の砂粒を多く含む	〃	暗茶褐色	
− 8	6−A区	〃	3㎜以下の砂粒を非常に多く含む	〃	白褐〜黄褐色	
− 9	〃	〃	2㎜以下の砂粒を多く含む	〃	黒灰褐色	
−10	〃	〃	1㎜以下の砂粒を多く含む	〃	明茶白色	全体に磨滅
−11	〃	〃	3㎜以下の砂粒を含む	〃	白黄褐色	
−12	6−B区	甑形土器・把手	3㎜以下の砂粒を多く含む	〃	赤褐〜灰色	
−13	6−B区・砂礫層	〃	2㎜以下の砂粒を非常に多く含む	〃	白黄灰色	
−14	6−B区	〃	1㎜以下の砂粒を多く含む	〃	白〜黄白色	
34− 1	6−A区	須恵・鉢形土器	3㎜程度の砂粒を焦慮含み密	〃	青灰色	
− 2	〃	須恵・壷形土器	1㎜以下の微砂粒を多く含む	不良	暗灰褐〜明赤褐色	
− 3	〃	朝鮮系軟質土器・鍋形土器	1㎜程度の砂粒を多く含む	良好	明灰色	外面やや風化
− 4	〃	朝鮮系軟質土器・甕形土器	微砂粒を多く含む	〃	外面:黒色 内面:黒土色	
− 5	6−B区	〃	微砂粒を多く含む	〃	〃	
− 6	6−A区	〃	1㎜以下の微砂粒を含む	〃	〃	
− 7	6−B区	〃	〃	〃	外面:灰白色 内面:暗灰黄色	
− 8	〃	〃	〃	〃	〃	
− 9	〃	〃	1㎜以下の微砂粒を含む	〃	灰黄土色	
−10	6−A区	〃	〃	〃	黄土色	

挿図番号	出土地点	器種	胎土	焼成	色調	備考
34－11	6－A区	朝鮮系軟質土器・甕形土器	微砂粒を含む	良好	外面:黄土色 内面:淡黄土色	
－12	6－B区	〃	1㎜以下の微砂粒を多く含む	〃	黄白色	
－13	〃	〃	〃	〃	〃	
－14	6－A区	〃	1㎜以下の微砂粒を含む	〃	茶白色	
－15	〃	〃	1～3㎜程度の砂粒を含む	〃	外面:白灰色 内面:黄土色	
－16	6－B区	〃	砂粒を多く含む	〃	黒灰褐色	
－17	〃	不明	1㎜程度の砂粒を含む	〃	外面:淡黄土色 内面:黄土色	
－18	〃	土製支脚	細かい砂粒を多く含み密	〃	明黄褐～赤桃白色	
35－1	6－A区	須恵・高坏形土器	〃	〃	明灰色 (下部暗灰色)	外面下部は風化
－2	〃	須恵・蓋形土器	1㎜以下の砂粒を少量含む	〃	暗青灰色	
－3	6区・3層	土師・坏形土器	細砂粒を含み密	〃	黄白色	一部丹塗，表面風化
－4	〃	〃	〃	〃	暗茶褐色	表面風化
－5	〃	〃	砂粒を含み密	〃	明橙褐色	暗紋をもつ
－6	〃	土師・高坏形土器	1㎜以下の砂粒，赤色粒を含む	〃	赤褐色	
－7	〃	土師・壷形土器	4㎜以下の砂粒を非常に多く含む	〃	桃～赤褐色	外面～口縁内面丹塗
－8	6区・4層	土師・甕形土器	砂粒を多く含む	〃	外面:黄白～灰色 内面:黒鉛色	
－9	6区・3層	〃	1㎜以下の砂粒，微砂粒を多く含む	〃	白褐色	外面にスス付着
－10	〃	〃	1㎜以下の砂粒を含む	〃	暗灰黄色	内，外面部分的に黒変
－11	6－A区	〃	2㎜以下の微砂粒を多く含む	〃	灰黄～黒褐色	
－12	6区・3層	〃	2㎜以下の均一な精砂粒を非常に多く含む	〃	白褐～黄白色	
－13	6区	土師・甑形土器	1㎜以下の砂粒を少量含む	〃	外面:黄白色 内面:暗灰白色	底部内，外面，口縁の一部が黒変

夫敷№2　土製品観察表

挿図番号	出土地点	遺物名	全長(現在長)cm	最大幅cm	重量(現重量)g	石材	備考
36－7	6－A区・黒色粘質土	管玉	1.9	(径) 0.2	0.7	緑色凝灰岩	孔径:0.2cm
37－1	6－A	敲石	13.4	12.2	830	砂質ギ岩	
－2	〃	砥石	(5.9)	5.3	120.8	シルト質軽石ギ岩	
44－24	5区	土錘	(5.2)	(径) 2.1×2.0	20.3	(胎土)1㎜以下の砂粒を含む	孔径:0.7cm，焼成:良好，色調:黄灰褐色
－25	〃	〃	5.5	(〃) 2.0×1.8	19.2	(〃) 〃	孔径:0.55cm，焼成:良好，色調:黄灰褐色
－26	〃	〃	(6.1)	(〃) 2.0	23.3	(〃) 〃	孔径:0.65cm，焼成:良好，色調:灰褐色
－27	〃	〃	5.9	(〃) 2.5	36.0	(〃)2㎜以下の砂粒を含む	孔径:0.65cm，焼成:良好，色調:赤褐色
－28	〃	〃	(7.3)	(〃) 2.0×2.5	34.2	(〃)1㎜以下の砂粒を含む	孔径:0.7cm，焼成:良好，色調:黄灰褐色

図　　版

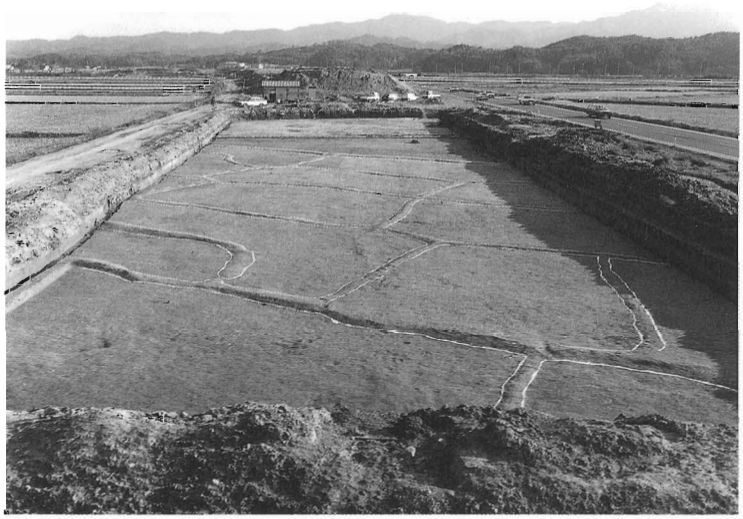
意宇平野遠景（西より）

夫敷遺跡（調査前）

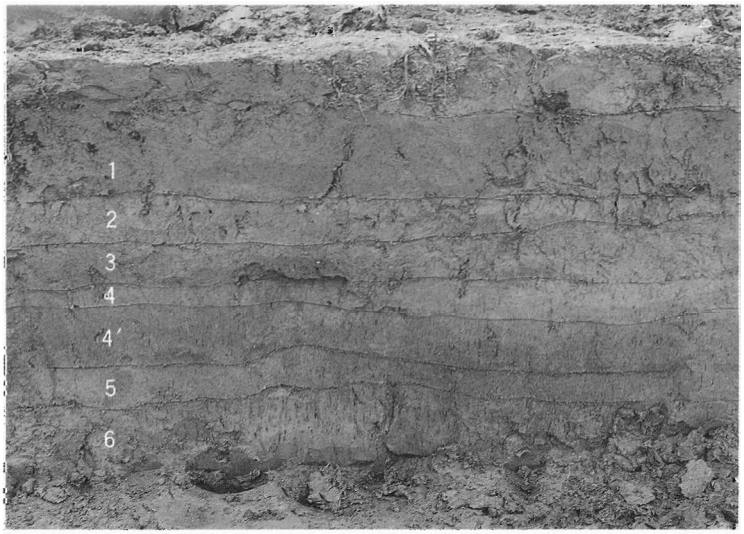
第Ⅳ調査区（北西より）

図版 2

第Ⅴ調査区上層水田址
（北西より）



同下層水田址（北西より）



東壁土層

第Ⅵ調査区全景
（調査後、北西より）

第Ⅵ調査区上層遺物
出土状況

同　上

図版 4

第Ⅵ調査区
中層遺物出土状況
（北東より）

同　上

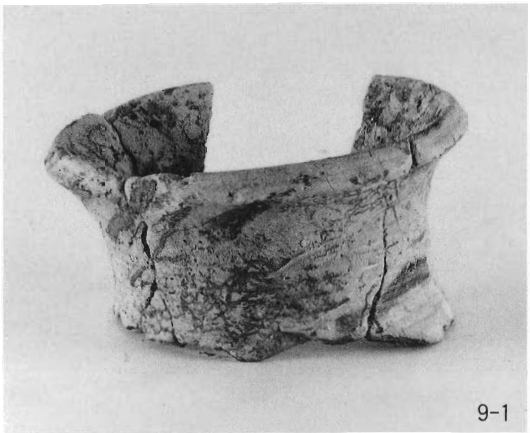
第Ⅵ調査区
中央ベルト東壁

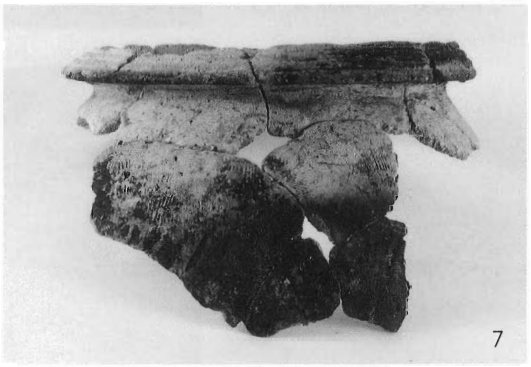
第Ⅵ調査区下層遺物
出土状況（南東より）

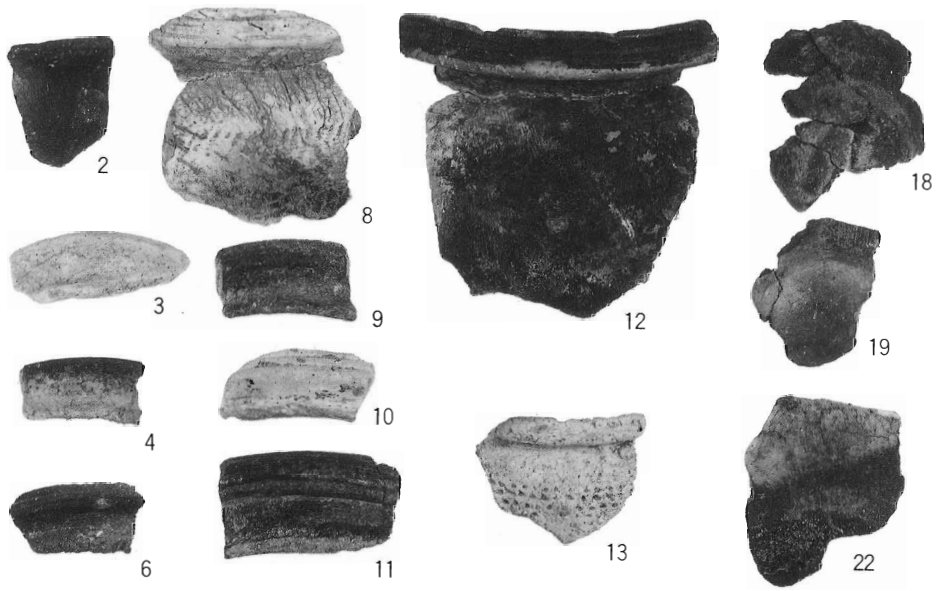
SK-01遺物出土状況

同完掘状況

図版 6

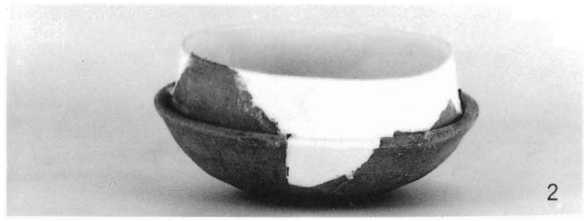






V区出土遺物(弥生土器)

11-1



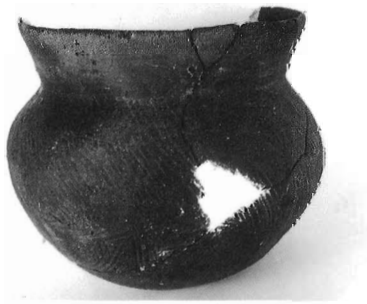
2

3

SD-03出土遺物

15-1

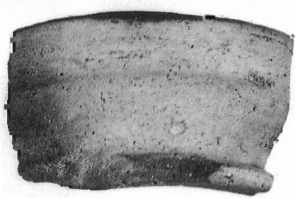
4



2

5

3

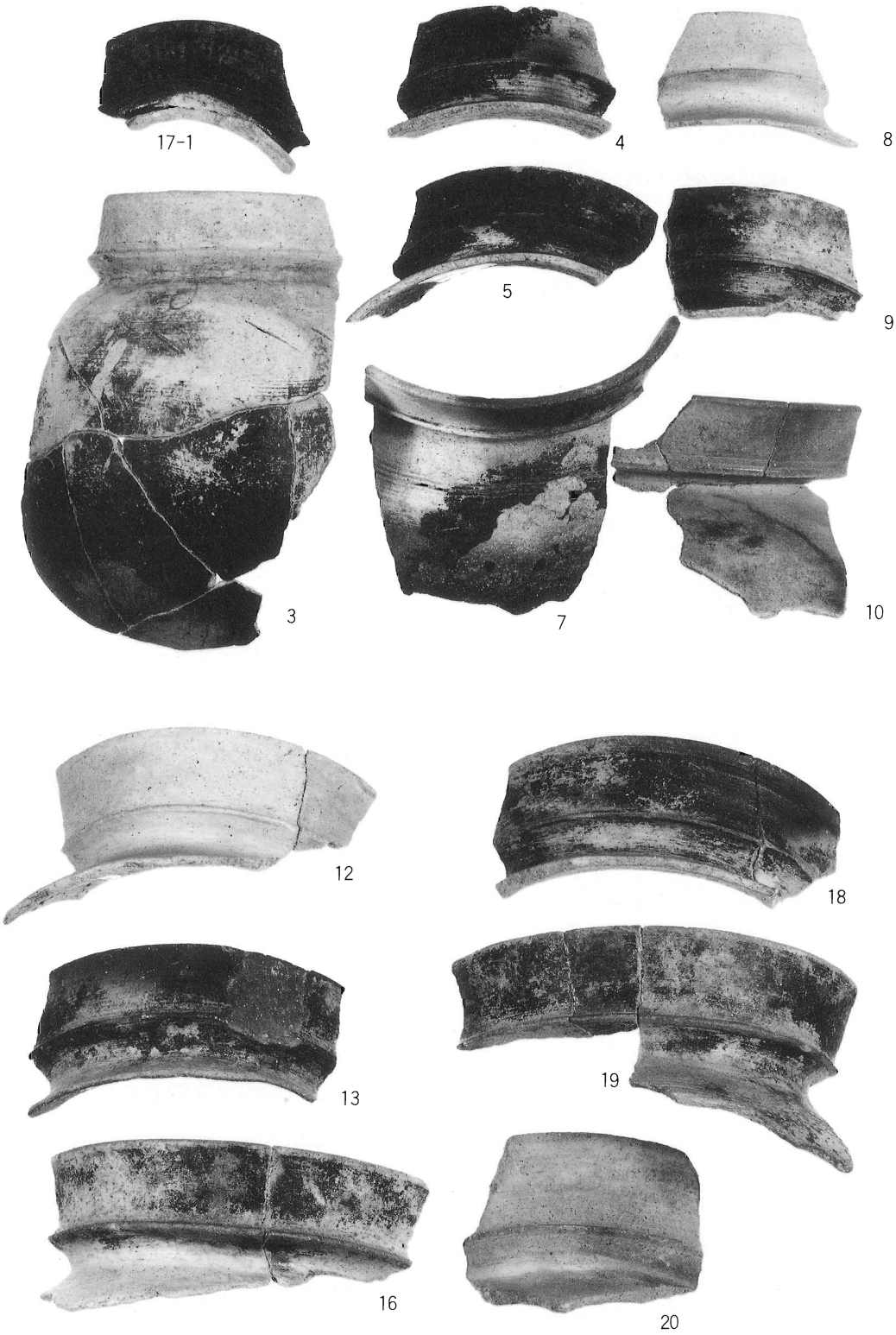


6

Ⅵ区SK-01出土遺物

図版 8

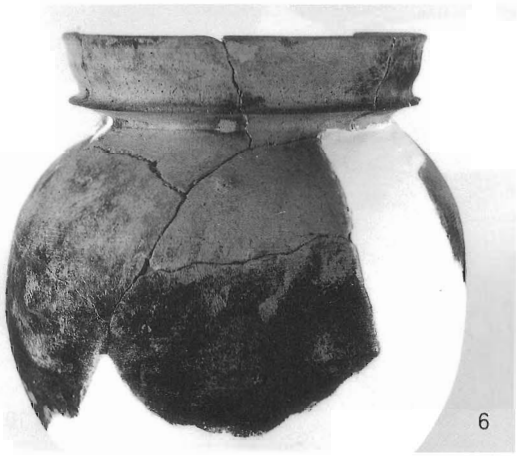
Ⅵ区下層出土遺物(壺)



Ⅵ区下層出土遺物(甕)

図版10

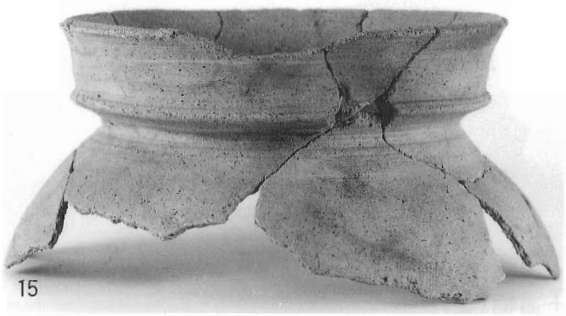
17-2


6

18-1

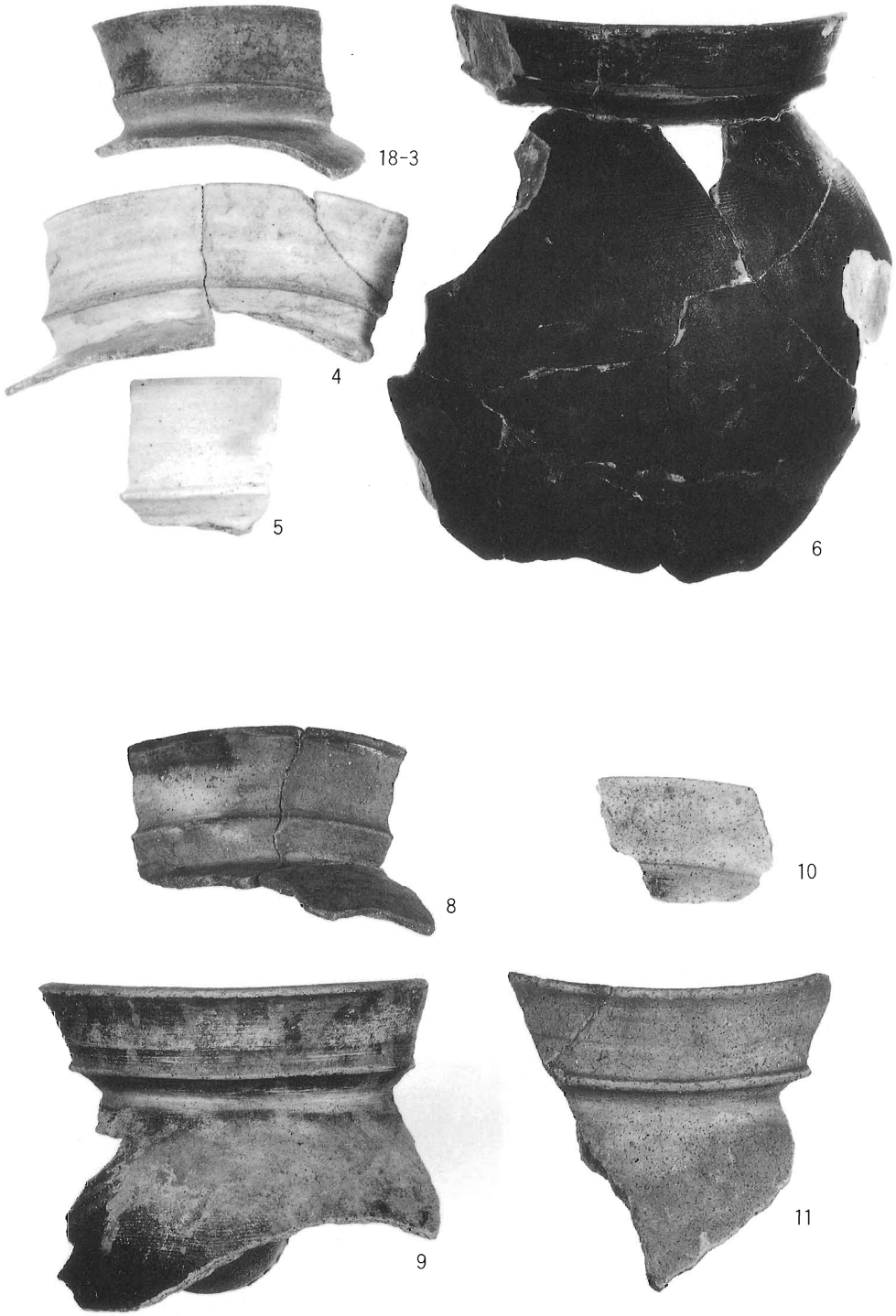
2

11


15

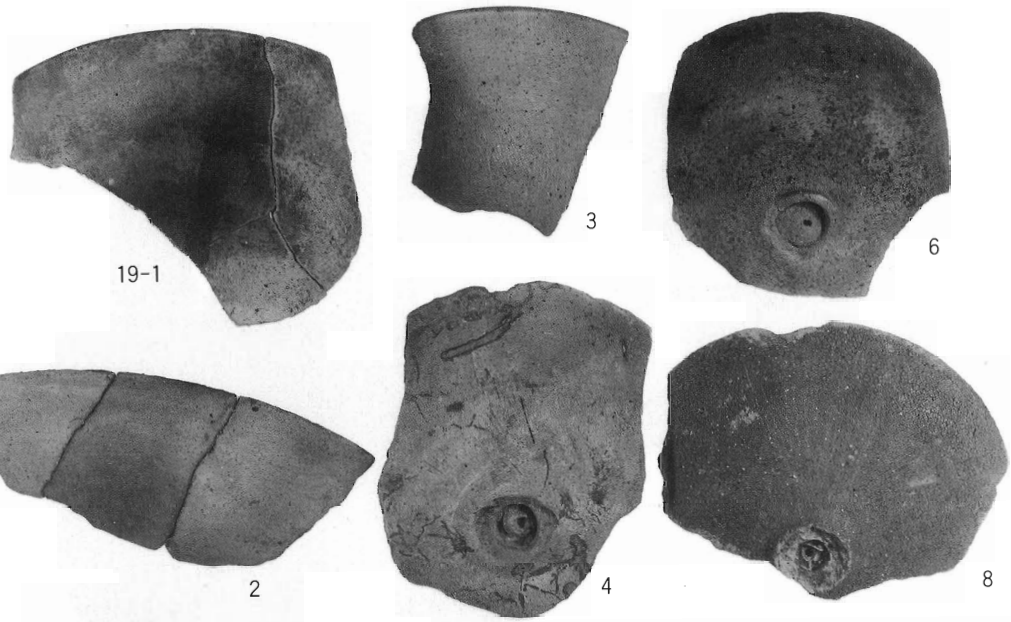
7

Ⅵ区下層出土遺物(甕)

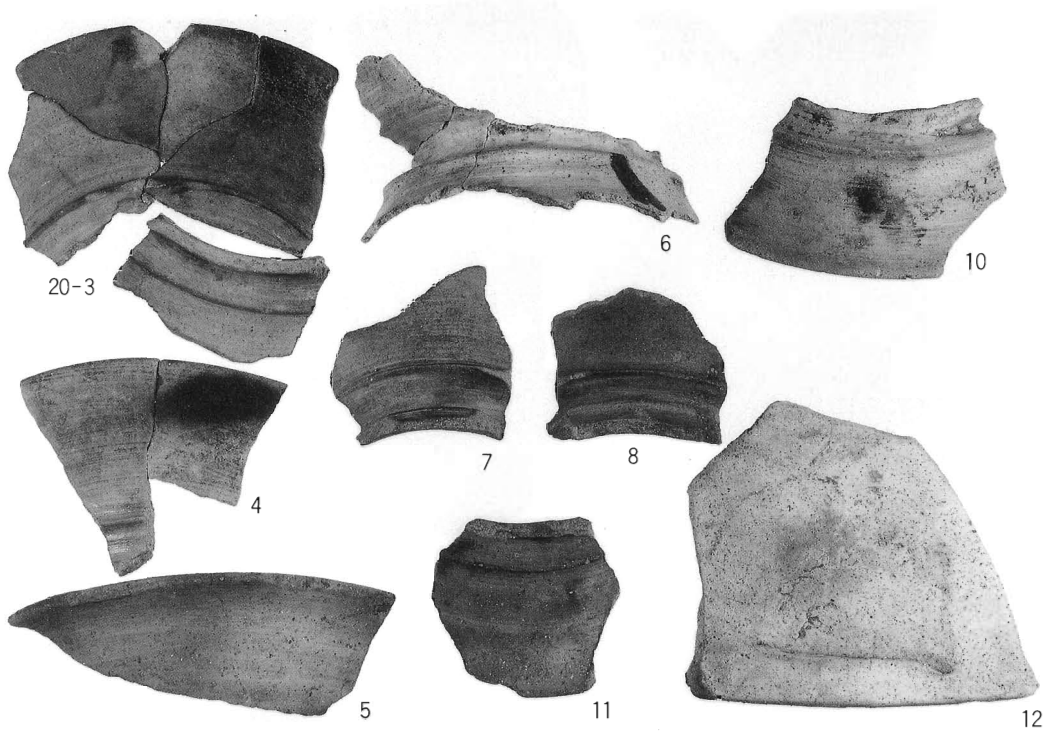


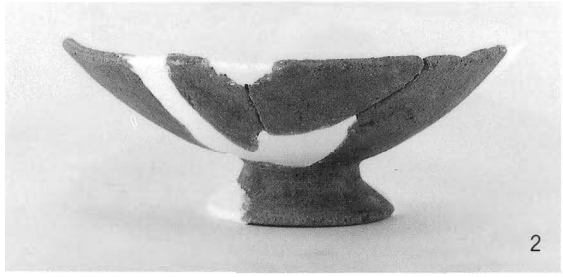
Ⅵ区下層出土遺物(甕)

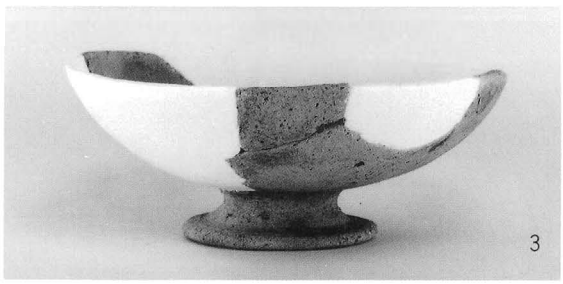
図版12



Ⅵ区下層出土遺物(高坏19、器台20)



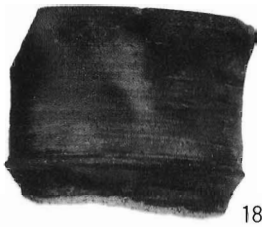




Ⅵ区下層出土遺物(器台20-3～12、低脚坏21)

図版14

21-17

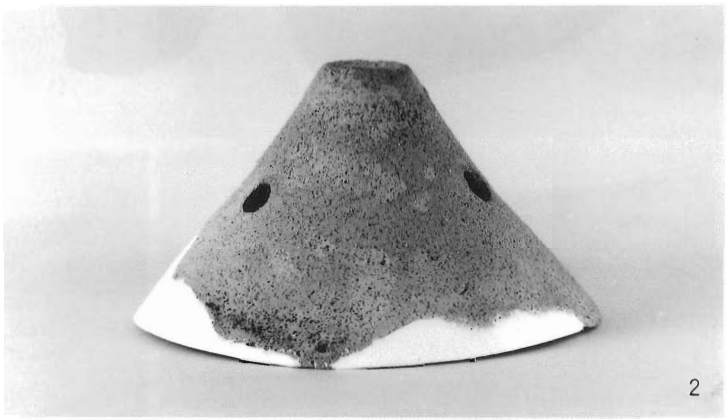


18

19

20

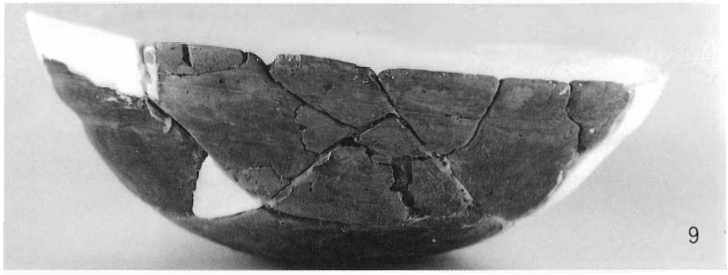
22-1



2

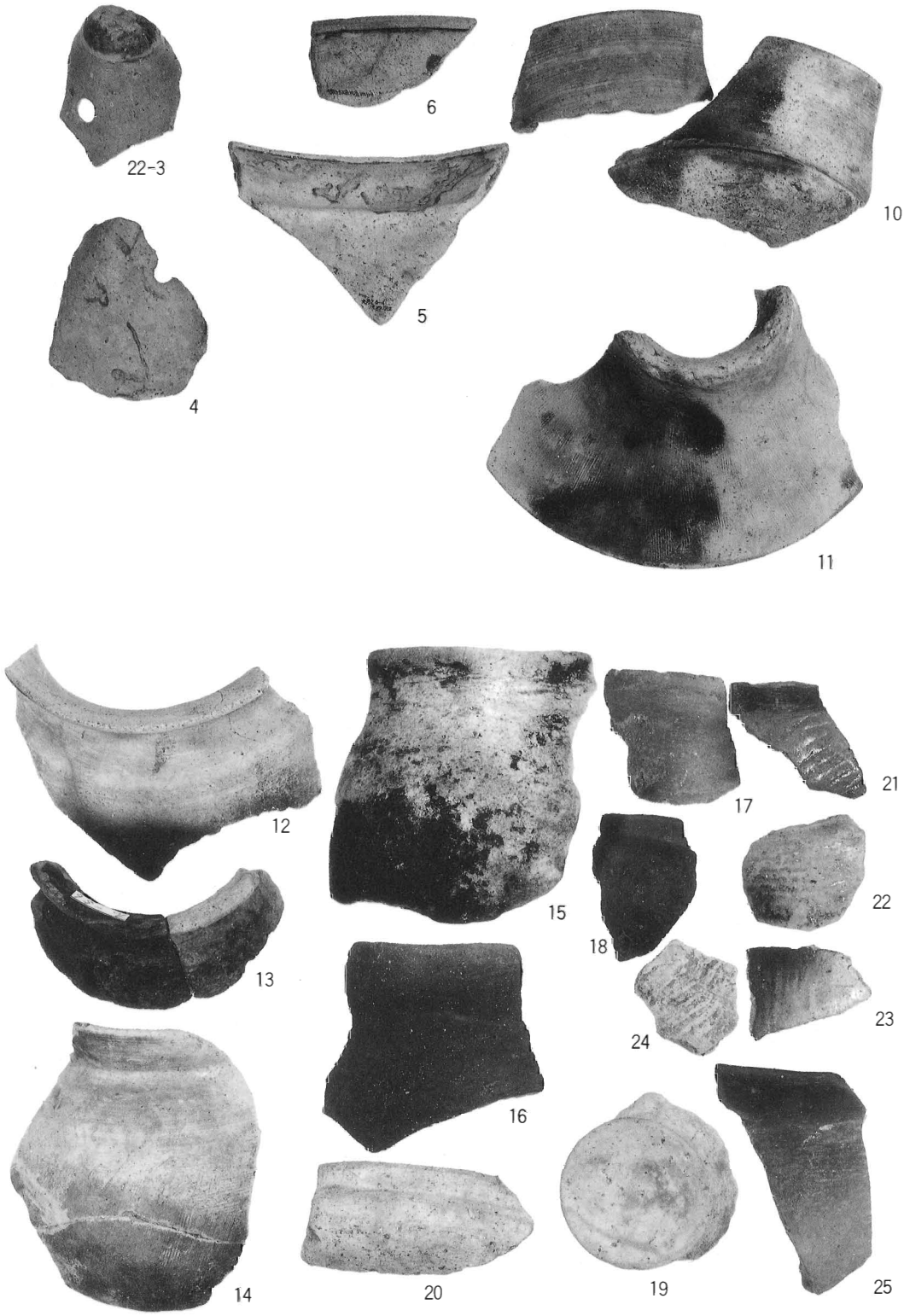
7

8



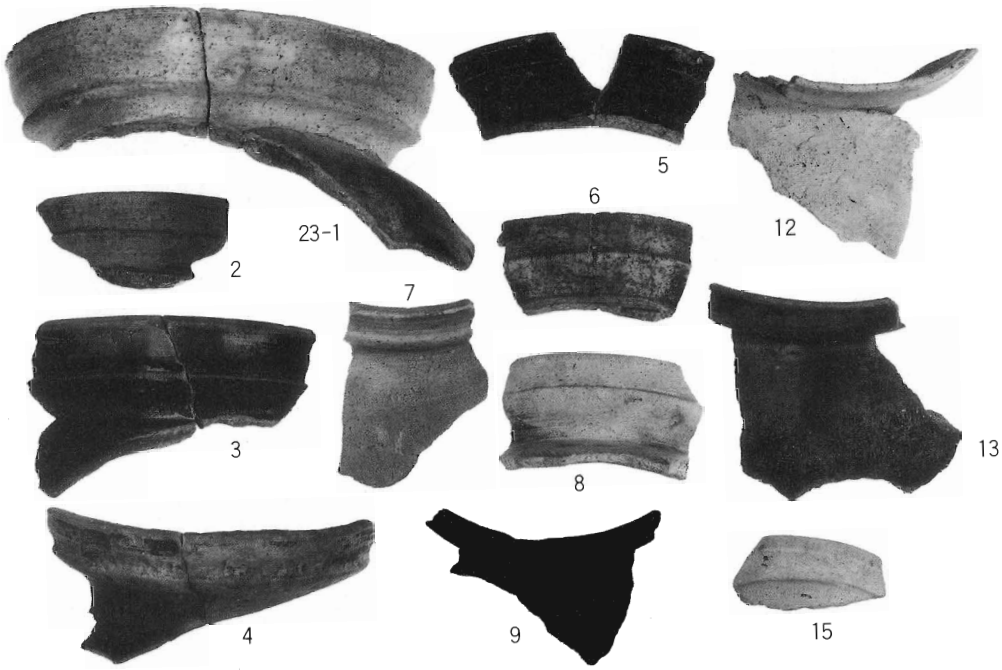
9

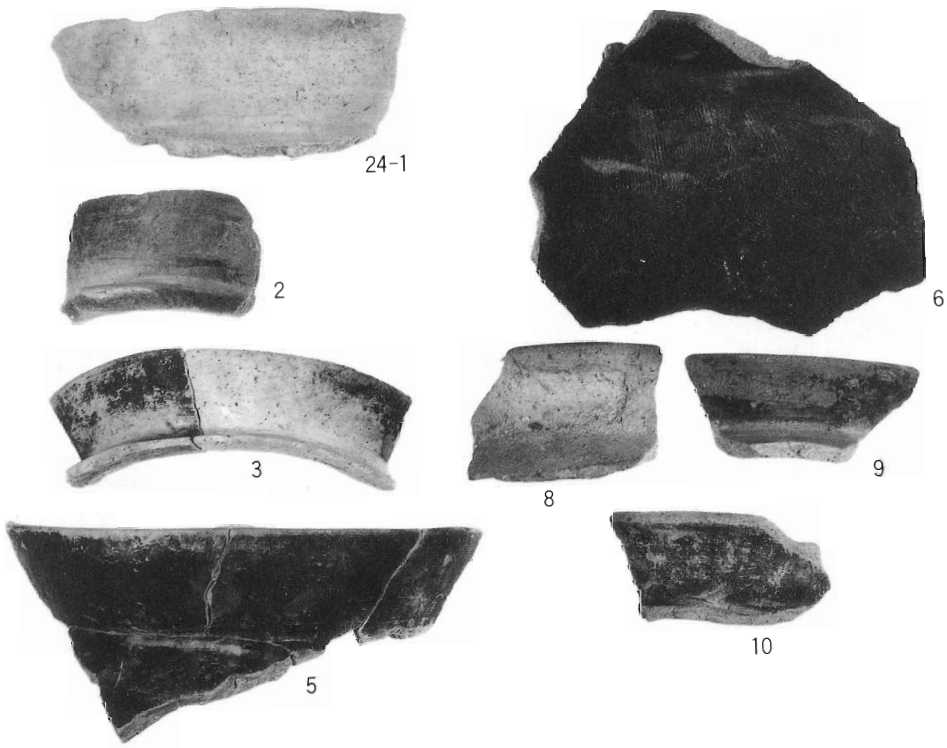
Ⅵ区下層出土遺物(布留式土器、その他)



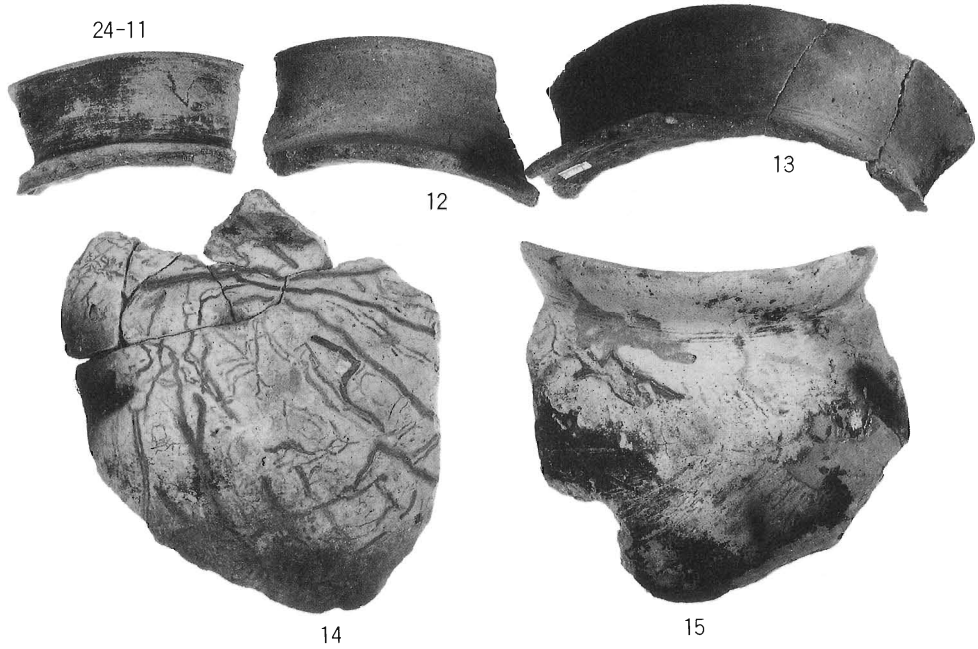
Ⅵ区下層出土遺物(布留式土器、その他)

図版16



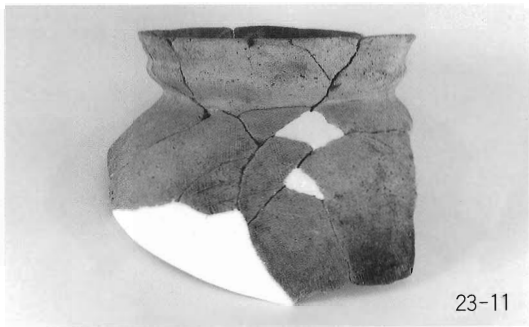


Ⅵ区中層出土遺物(甕)



Ⅵ区中層出土遺物(甕)

図版18


23-11

24-16

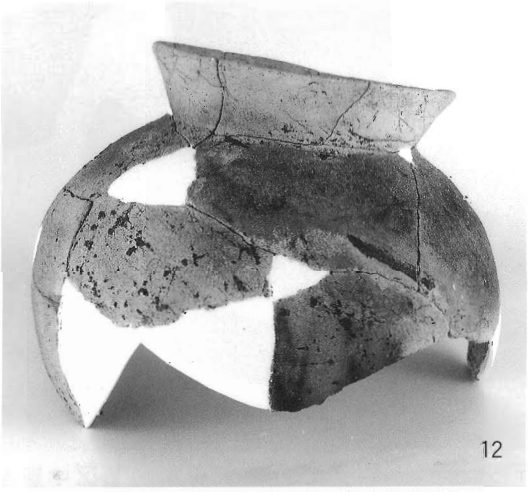
24-7

25-3

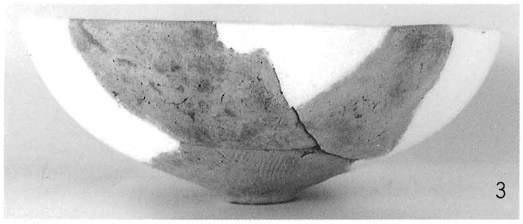
25-7

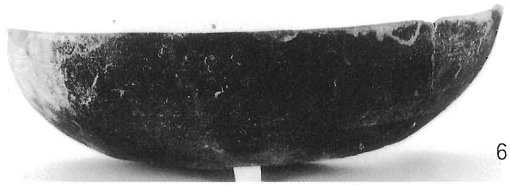
11

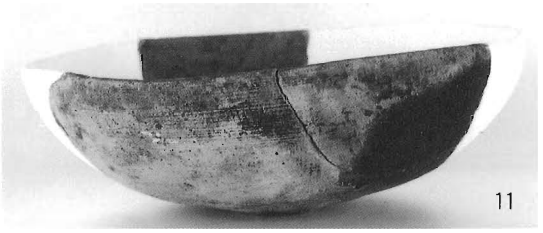
23-14

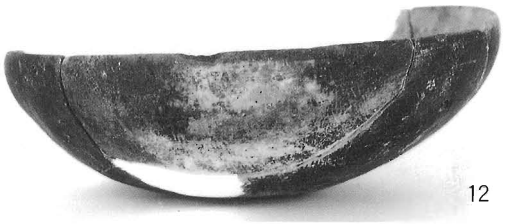

12

Ⅵ区中層出土遺物(甕)







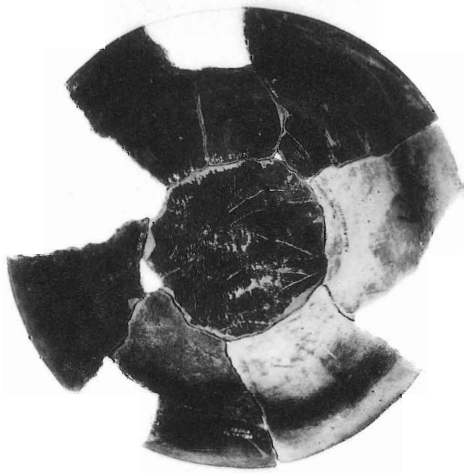


Ⅵ区中層出土遺物(高坏)

図版20

27-1

6


1

8

3

9

4

10

5

Ⅵ区中層出土遺物(高坏)

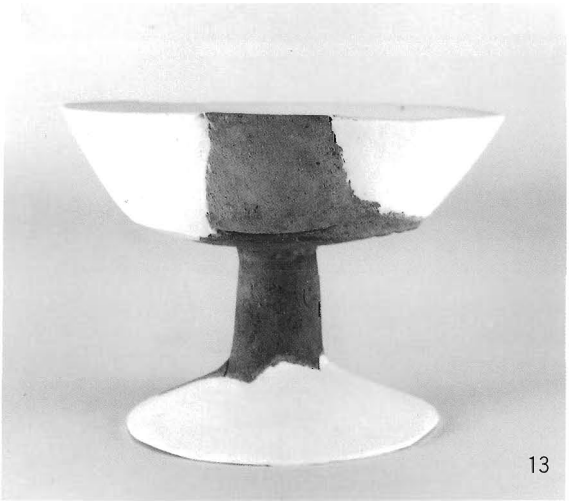
27-11

28-1

2

12

3


13

4

5

Ⅵ区中層出土遺物（高坏）

図版22

28-6

16

9

17

11

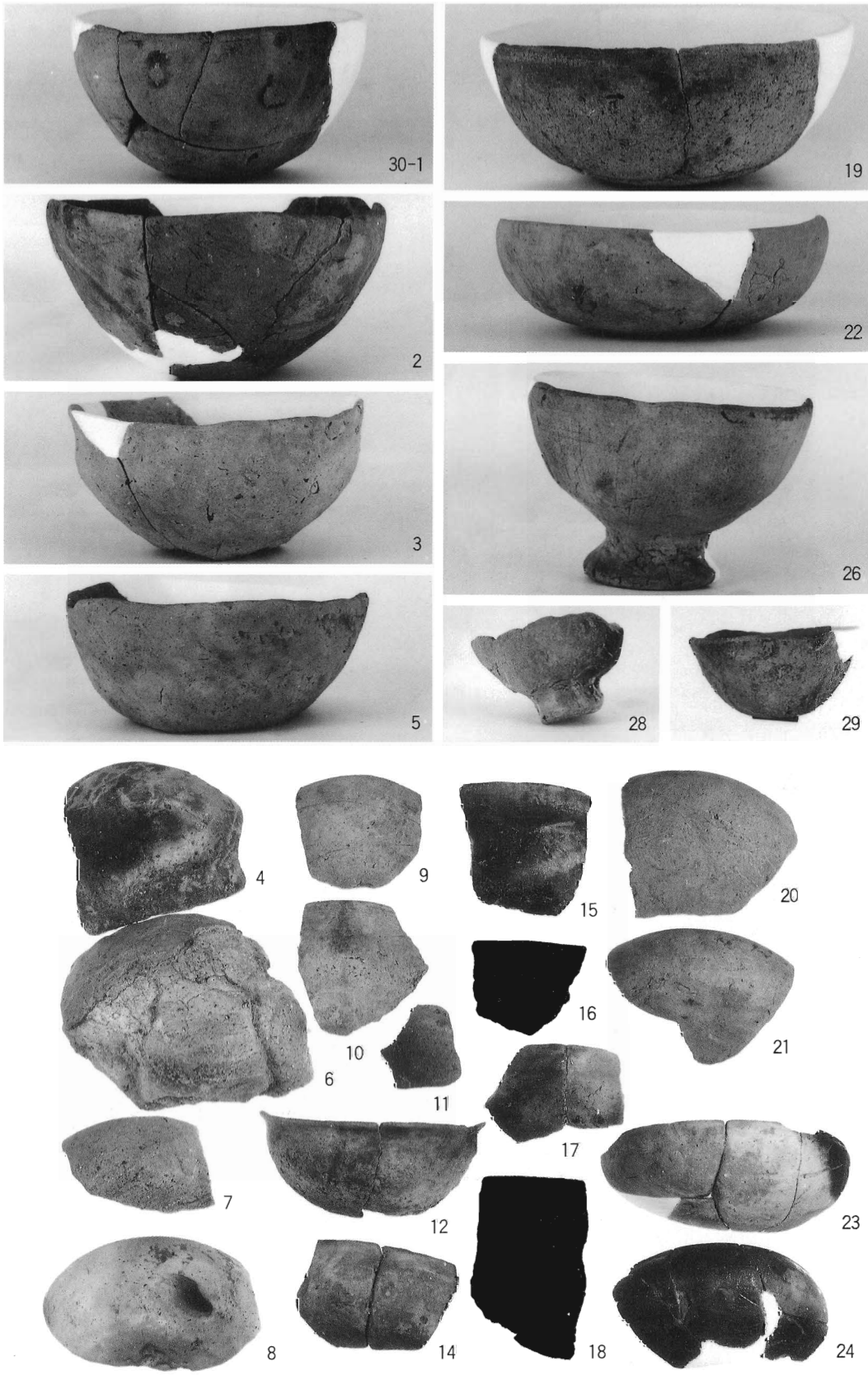
20

13

14

21

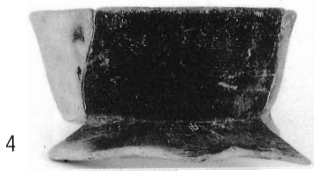
Ⅵ区中層出土遺物(高坏)



Ⅵ区中層出土遺物(坏)

図版24

31-1


4

10

6

12

2

7

13

3

9

17

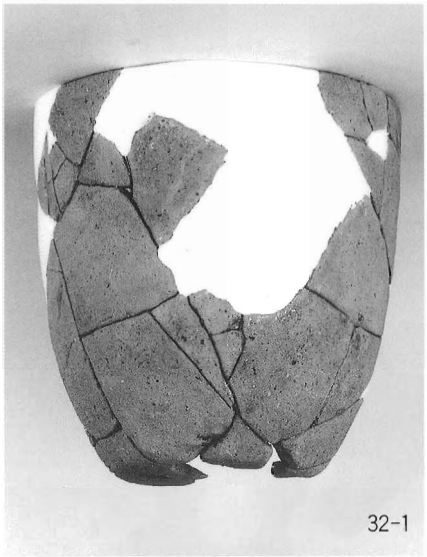
5

8

14

15

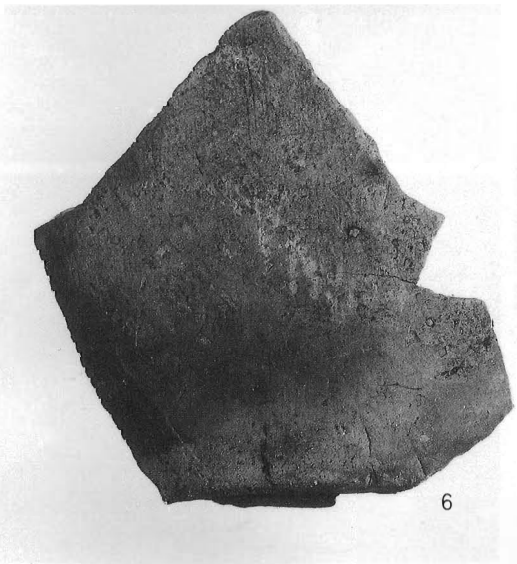
Ⅵ区中層出土遺物(壺)

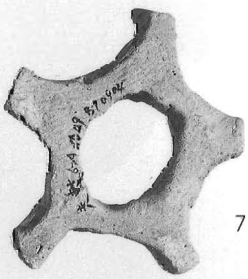

32-1

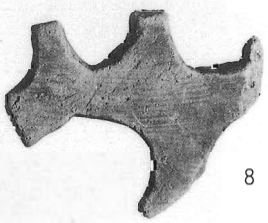
3

2

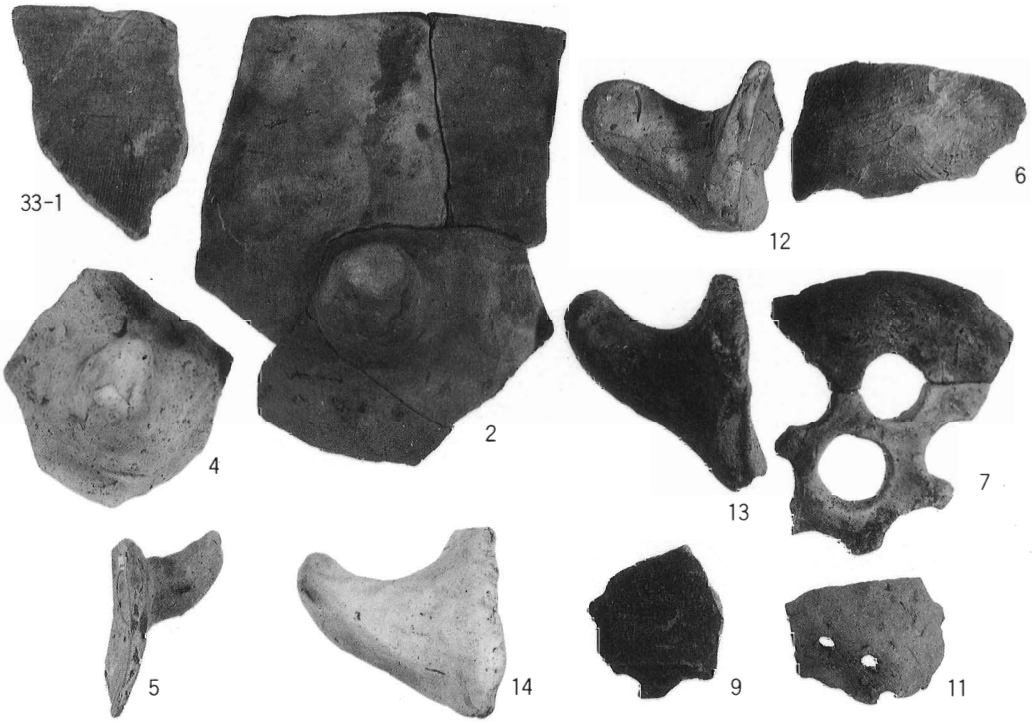
4

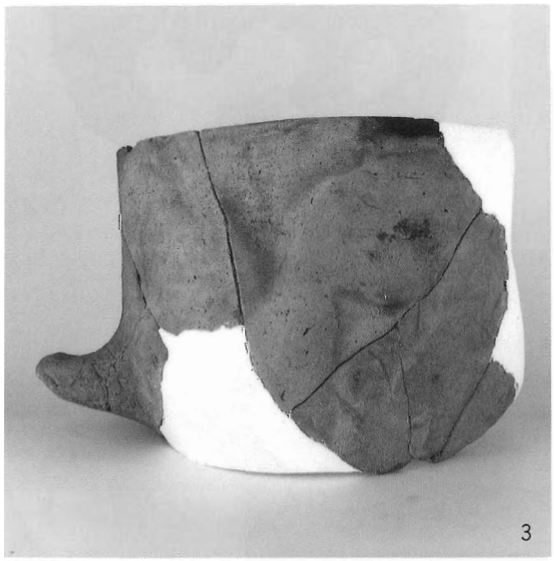

6

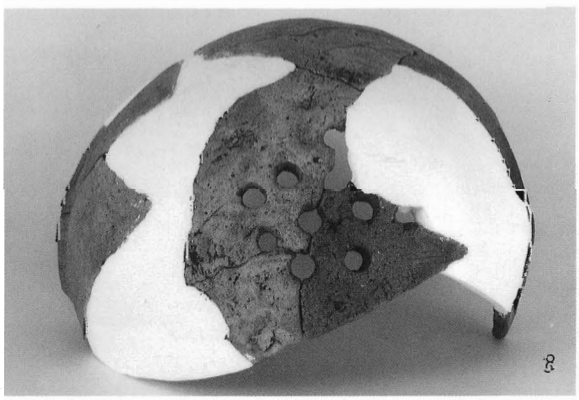

7


8

Ⅵ区中層出土遺物(甑)



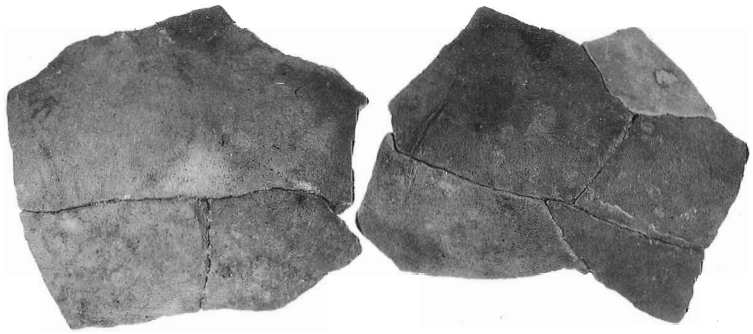




Ⅵ区中層出土遺物(甑)

34-1

18

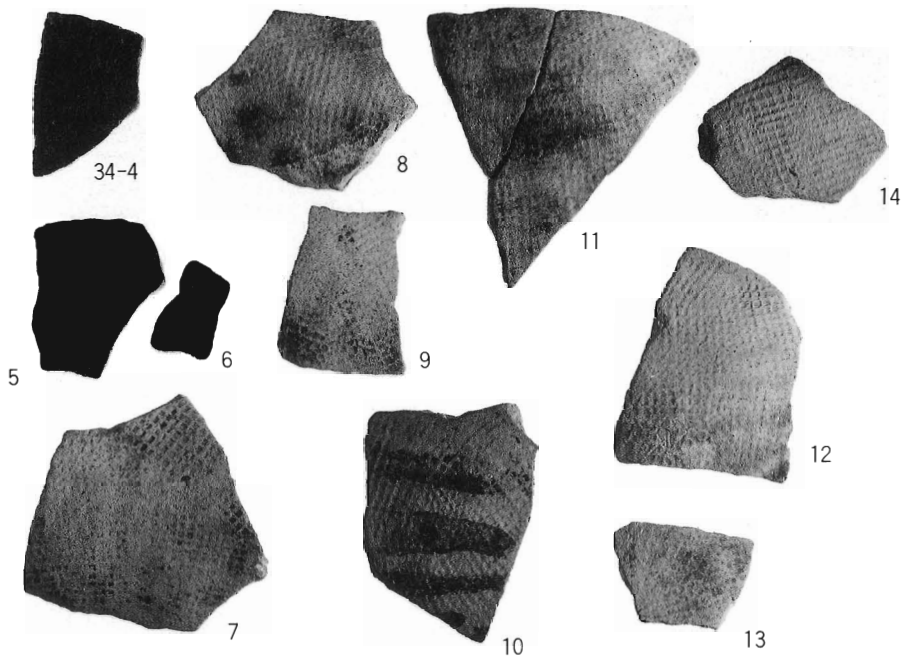


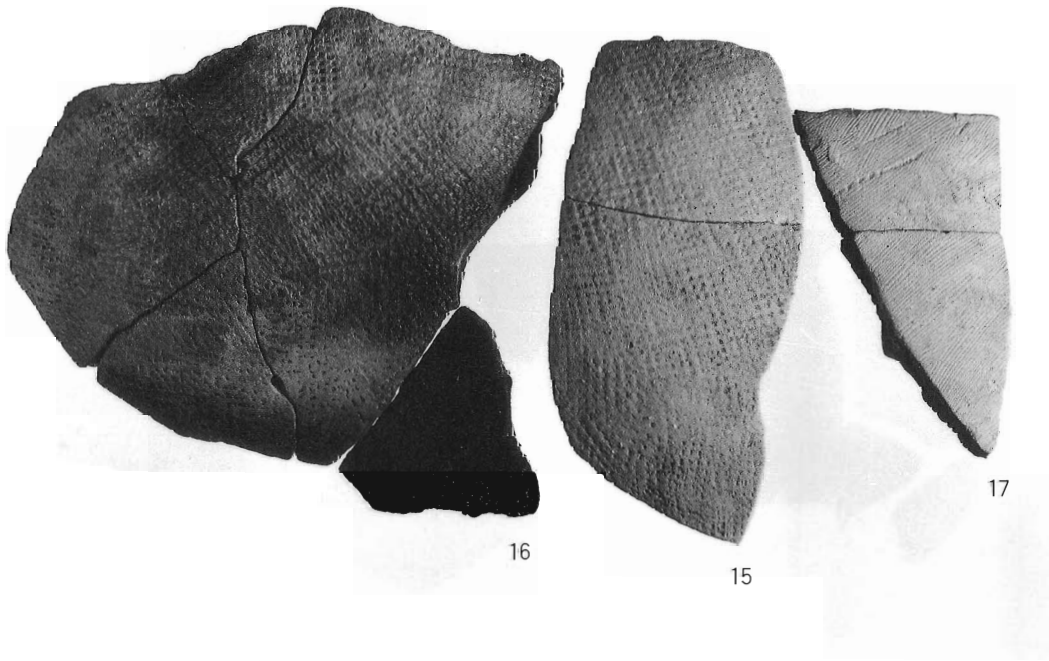
2

3

Ⅵ区中層出土遺物(初期須恵器1・2、韓式土器３、支脚18)

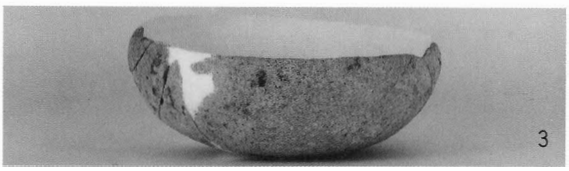
図版28

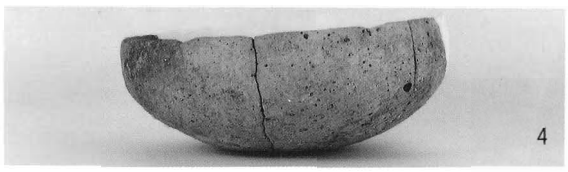




Ⅵ区中層出土遺物(韓式土器)

35-1

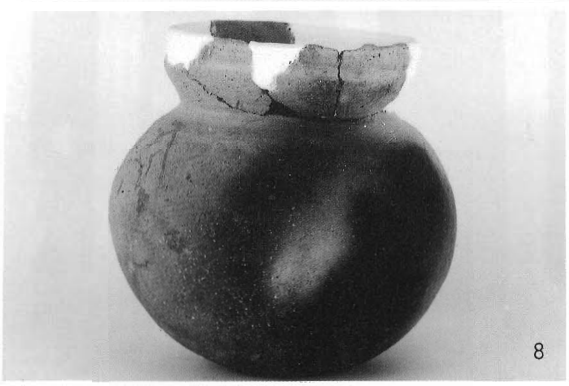

3


4

5

6

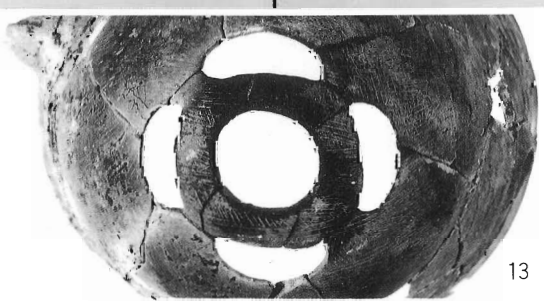
7


8

10

12

I


13

Ⅵ区上層出土遺物(須恵器、土師器、甑)

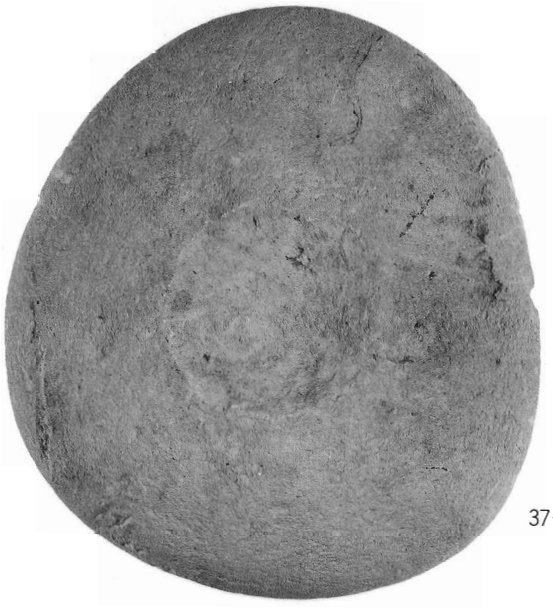
図版30

36-1

2

3

4



37-1

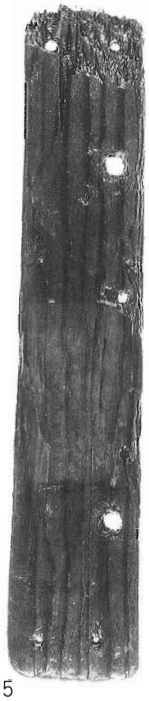
2

38-1

2

3

4



5

6

7

8

Ⅵ区中層出土遺物

平成元年３月　発行

国道９号線バイパス予定地内

埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅵ

（夫敷遺跡）

編集・発行　島根県教育委員会
松江市殿町１番地

印刷・製本　有限会社　谷口印刷
松江市母衣町89番地